東 城 跡、川 辺 遺 跡

― 都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う発掘調査報告書 ―

２０１９年３月

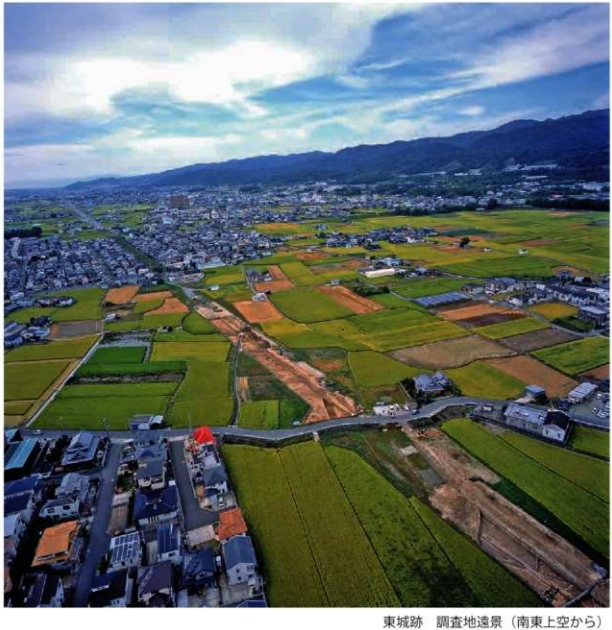
公益財団法人 和歌山県文化財センター

東 城 跡、川 辺 遺 跡

― 都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う発掘調査報告書 ―

２０１９年３月

公益財団法人 和歌山県文化財センター



東城跡　調査地遠景（南東上空から）

東城跡　２－２区　２堀コーナー部（北西から）

序

和歌山県北部を西流する紀ノ川の下流域には、肥沃な和歌山平野が形成されています。この和歌山平野を中心とした地域には太古から人々が生活を営んだ痕跡が数多く残されており、これまで数々の発掘調査が行われてきました。

東城跡、川辺遺跡は紀ノ川右岸の沖積平野に位置しております。東城跡は平成29年に新規発見された遺跡で、中世初めに当地を治めていた中村氏の居館とされる施設に伴う堀跡や、弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴建物、土器を一括投棄したとみられる溝状遺構などを確認しました。

川辺遺跡は過去数度にわたる発掘調査が実施され、縄文時代から中世にいたる複合遺跡として県下でも著名な遺跡です。今回の調査において、古代の流路及び畦畔、水田、弥生時代後半～古墳時代の溝や弥生時代終末期の土器棺墓、弥生時代の周溝墓の可能性がある溝などを確認しました。

ここに調査成果を取りまとめ報告書を刊行いたします。この成果が郷土の歴史を知るための一資料となれば、幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書作成に当たりご指導、ご助言を頂いた関係各位の方々に深く感謝申し上げます。今後とも当文化財センターへのより一層のご理解とご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

平成３１年３月

公益財団法人　和歌山県文化財センター

理事長　櫻井　敏雄

例　言

1　本書は、和歌山市山口西及び楠本に所在する東城跡、川辺遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は、和歌山県による都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴い平成29年度に発掘調査を実施し、同30年度に出土遺物等整理業務を実施した。
3　当業務は、和歌山県の委託を受けた公益財団法人和歌山県文化財センター（以下、「当文化財センター」とする。）が、和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
4　発掘調査及び出土遺物等整理業務に要した経費は、和歌山県が負担した。
5　現地調査に際し、各関係機関並びに近隣の方々から多大なご協力を得た。
6　本書は、発掘調査業務担当者と協議のうえ、佐伯が編集し、川辺遺跡を金澤、東城跡を佐伯が執筆した。
7　写真図版に使用した東城跡の遺構写真は村田が、遺物写真は佐伯が、川辺遺跡の遺構写真及び遺物写真は金澤が撮影した。
8　発掘調査に当たっては、次の諸氏から多大なご指導・ご教示を賜った。
　海津一朗、河内一浩、冨加見泰彦、水島大二
9　発掘調査・出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は当文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。
10　発掘調査・出土遺物等整理業務は、下記の調査組織のもと実施した。

	発掘調査業務（平成29年度）	出土遺物等整理業務（平成30年度）
事務局長（管理課長）	南　正人	井上　拳宏
埋蔵文化財課長	藤井　幸司	丹野　拓
	村田　弘　（東城跡）	佐伯　和也
	小林　充貴（東城跡）	金澤　舞
	土井　孝之（川辺遺跡）	
	金澤　舞　（川辺遺跡）	

11　川辺遺跡２－３区の現地発掘調査については和歌山県教育委員会が実施した。

凡　例

1　発掘調査及び出土遺物等整理業務は、財団法人和歌山県文化財センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年４月）に準拠して行った。
2　本書で使用した座標値は平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）、標高は東京湾平均海面（T．P．+）、方位は座標北（G．N．）を用いた。
3　発掘調査及び整理作業で使用した調査コードは以下のとおりである。
　東城跡・・・17－01・443（2017年度－和歌山市・東城跡）
　川辺遺跡・・17－01・145（2017年度－和歌山市・川辺遺跡）
4　遺物実測図の縮尺は、土器類は原則として1／4、それ以外は必要に応じて縮尺を明示している。遺構及び遺物写真の縮尺は特に統一していない。
5　土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修　小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2010年版）を使用した。

本文目次

巻頭写真
序・例言・凡例
第１章　位置と環境 …… 1
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 1
第２章　経緯と経過 …… 3
第１節　調査に至る経緯 …… 3
第２節　調査の経過 …… 3
第３節　出土遺物等資料の整理 …… 4
１．出土遺物等整理業務 …… 4
２．金属製品保存処理 …… 5
第４節　普及活動 …… 5
第３章　既往の調査 …… 6
第１節　東城跡 …… 6
第２節　川辺遺跡 …… 6
第４章　調査の方法 …… 8
第５章　調査成果 …… 10
第１節　東城跡 …… 10
１．基本層序 …… 10
２．調査の成果 …… 15
（１）　中世の遺構と遺物 …… 15
（２）　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物 …… 25
第２節　川辺遺跡の調査成果 …… 68
１．基本層序 …… 68
２．調査の成果 …… 68
（１）　中世の遺構と遺物 …… 73
（２）　古代の遺構と遺物 …… 73
（３）　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物 …… 77
第６章　まとめ …… 87
第１節　東城跡 …… 87
第２節　川辺遺跡 …… 88
遺物観察表 …… 90
写真図版（遺構・遺物）
報告書抄録

挿 図 目 次

図1 周辺の遺跡…… 1
図2 川辺遺跡既往の調査位置図…… 7
図3 川辺遺跡時期別遺構分布図…… 7
図4 調査区区割り図及び区画…… 8
図5 調査区の設定と地区割…… 9
図6 土層断面図…… 11・12
図7 遺構全体図（上面）…… 13・14
図8 掘立柱建物1実測図…… 15
図9 掘立柱建物2実測図…… 16
図10 掘立柱建物3実測図…… 16
図11 柱列1実測図…… 17
図12 1井戸実測図…… 18
図13 358井戸実測図…… 18
図14 78土坑実測図…… 19
図15 50・300・304・356土坑土層断面図…… 19
図16 119・108・105溝土層断面図…… 20
図17 2堀土層断面図…… 21
図18 202自然流路土層断面図…… 22
図19 遺構全体図（下面）…… 23・24
図20 竪穴建物1実測図…… 26
図21 竪穴建物2・3・4・5実測図…… 27
図22 竪穴建物2・4・5内貯蔵穴土層断面図…… 28
図23 竪穴建物6実測図…… 29
図24 竪穴建物7実測図…… 30
図25 竪穴建物8実測図…… 31
図26 竪穴建物9・10実測図…… 33
図27 竪穴建物13・14・15・16実測図…… 35
図28 竪穴建物13・14・15・16土層断面図…… 36
図29 竪穴建物17・18・19実測図…… 38
図30 竪穴建物17・18・19土層断面図…… 39
図31 竪穴建物20・21実測図…… 41
図32 竪穴建物22・23・24実測図…… 43
図33 竪穴建物25・26・27実測図…… 44
図34 竪穴建物28・29実測図…… 46
図35 竪穴建物30実測図…… 47
図36 竪穴建物31実測図…… 47
図37 竪穴建物32実測図…… 48
図38 竪穴建物33実測図…… 48
図39 230土坑実測図…… 49
図40 214・368・369・384土坑土層断面図…… 51
図41 67溝実測図…… 52
図42 弥生時代～古墳時代の溝土層断面図…… 53
図43 185溝実測図…… 54
図44 1井戸、3・300・356土坑、2堀出土遺物実測図…… 56
図45 202自然流路出土遺物実測図…… 57
図46 竪穴建物1・2・4・5・7・9出土遺物実測図…… 58
図47 竪穴建物10～15出土遺物実測図…… 59
図48 竪穴建物15～19出土遺物実測図…… 60
図49 竪穴建物19～22・25・26出土遺物実測図…… 61
図50 竪穴建物28・29・31、369土坑出土遺物実測図…… 62
図51 369・371土坑、471・472溝出土遺物実測図…… 63
図52 67溝出土遺物実測図…… 64
図53 67溝出土遺物実測図…… 65
図54 198・186・185溝出土遺物実測図…… 66
図55 185溝出土遺物実測図…… 67
図56 川辺遺跡調査区土層断面図…… 69・70
図57 遺構全体図…… 71・72
図58 35・49・58・100・61溝、112・1・46流路、137水田、2畦畔土層断面図…… 75
図59 135・136・113・114・76・56・99・95・45・129溝土層断面図…… 76
図60 52溝平面図及び土層断面図…… 79
図61 62・117・3・29・108・98・54溝、138、30土層断面図…… 80
図62 91土器棺墓平面図・土層断面図…… 81
図63 62・117・126・119・110・134・140・80・81・82・72・66・106・109・139溝、69・118・89土坑土層断面図…… 84
図64 出土遺物①…… 85
図65 出土遺物②…… 86
図66 古代の主要遺構配置図…… 89

表 目 次

表1　川辺遺跡既往の調査一覧

写真図版目次

巻頭図版1	東城跡　調査地遠景
巻頭図版2	東城跡　2-2区
	2掘コーナー部
写真図版1	東城跡　調査地俯瞰
写真図版2	2-2・1-1区　上面全景
写真図版3	1-2・2-2区　上面掘立柱建物
写真図版4・5	1-2・2-2区　上面井戸、土坑他
写真図版6	2-2・1-2区　上面土坑、溝
写真図版7・8	1-2・2-2区　上面堀
写真図版9	2-2・1-1区　上面自然流路、溝
写真図版10	1-1・2-1区　上面溝
	1-1・2-1区　下面全景
写真図版11	1-1・2-1区　下面全景
写真図版12～14	2-1・1-1区　竪穴建物1～8
写真図版15	2-1・1-1区　竪穴建物9・10、
	下面土坑
写真図版16	1-2・2-2区他　下面全景
写真図版17～26	1-2・2-2区　下面全景
	2-2・1-2区　竪穴建物13～33
写真図版27	1-2・2-2区　下面土坑
写真図版28～31	2-1・1-2・2-2区　溝
写真図版32	調査区壁面土層
写真図版33	川辺遺跡　2-1区　全景
写真図版34	2-1区　遺構
写真図版35	2-1区　遺構、
	調査区南壁土層
写真図版36	2-2区　全景
写真図版37	2-2区　遺構
写真図版38	2-2区　遺構、
	2-3区　全景
写真図版39～49	東城跡　出土遺物
写真図版50・51	川辺遺跡　出土遺物

第１章 位置と環境

第１節　地理的環境

東城跡、川辺遺跡は和歌山市の北東部、山口西および楠本に所在する。地形的には紀ノ川の下流右岸に位置し、和泉山脈から紀ノ川に流れ込む雄ノ山川が段丘に造り出した扇状地の南端から沖積地上に立地する。調査地周辺の水田の標高は10.0～11.0mほどであり、雄ノ山川の周辺に南北に広がる微高地上の縁辺部に存在する。

地形的には沖積地に相当する部分であるが、詳しくはこの辺りの沖積地は地理的分類の沖積Ⅲ面に相当するものである。この沖積Ⅲ面上に北側の和泉山脈から南流して紀ノ川に注ぐ河川及び自然流路が扇状地を造り出しており、両遺跡はこの扇状地の末端部もしくはその延長線上に位置するもので、沖積地の中ではやや微高地となり、集落を形成するには適地となっている。また、周辺には長地型の条理型水田が認めら、古くから豊かな穀倉地帯であったが、近年は急速に商用地や住宅地として開発されている。

第２節　歴史的環境（図１）

東城跡は、古代末から中世にかけてこの地で勢力を誇った中村氏の築いた居館とされているもので、和歌山市永穂に所在したとされる山名氏館跡の「西城」に対して「東城」と呼ばれている。現在でも当該地の一帯には「トウジョウ」という地名が残っている。

この「トウジョウ」については資料が乏しく『郷土地図説明　附本郡県物産史』（1906旧川永小学校蔵）には「古邸跡（中村喜内の家系による）」として「川永域内の字北垣内に隣接したところに東城という古来より無税の地があり、本土地の荘司である中村氏の居城という」として東

図１　周辺の遺跡

城跡のことが記されている。また、『海草郡誌－人物編－』（1926 和歌山縣海草郡）には、やはり中村喜内の家系についての説明の中で、代々当地の荘司に補されていたことを述べ、"現今楠本の東川辺の小字宮西の地を明治以前は東城と称し、此は荘司中村氏の居趾といい傳う"とある。

これらは二次資料であり、その真偽については疑問の余地が残るものの、「中村氏」、当地の荘園としての成立については、ある程度文献史料から窺える。鎌倉時代には調査地周辺は平田荘となり、公卿吉田家の所領となる。正治２年（1200）に吉田経房から嫡子の参川守資経に平田荘が含まれる所領を譲った記事があり、この立荘は12世紀後半以前とされている。（『吉田経房処分状写』京都大学所蔵文書）。また、中村氏については、『経俊卿記』において吉田経俊の熊野参詣に際して「中村左衛門尉・平田馬充」が雑事の奉仕にあたったことが書かれている。さらに中村氏については平田氏とともに、建長６年（1256）７月６日付の『紀伊国守護代・惣官請文案』（御影堂文書）にも見え、幕府御家人として署判を加えている。

このようなことから、伝承されている「東城跡」については、中村氏との関係性から蓋然性が高いものと考えられた。

当該付近の古代から中世を考える上で、「南海道」の存在が重要と思われる。南海道は平城京を起点として淡路・四国へと通じる古代の官道であり、その経路については確定したものではないが、当遺跡の東北東に所在する山口遺跡の南端近くを通り、紀伊国府の所在していた府中へと西走していたと考えられている。この南海道は平安京への遷都に伴い経路が変更されており、大阪南部から雄ノ山峠を越えて紀伊国に入る経路が設定され、山口遺跡付近が紀伊国への入り口に位置することになる。また、古代末から中世にかけて熊野詣が盛んになると雄ノ山峠を越えてから西に向かうのではなく、南下して当遺跡付近に所在していたと推定される「中村王子」を経て紀ノ川左岸の吐前へと向かうコースの利用が頻繁となる。いわゆる熊野古道として知られる道である。当該付近はその渡河地として重要な地点であり、交通の要衝であったと言えよう。

なお、周辺の遺跡について述べれば、当該地周辺は県下でも遺跡の多い地域として知られており、東に隣接する宇田森遺跡・山口遺跡・藤田遺跡など弥生時代から奈良時代の集落跡が密度濃く分布している。

宇田森遺跡は本遺跡の西方向約1.5kmに位置しており、昭和41年から43年にかけて実施された発掘調査では弥生時代中・後期の竪穴建物や溝が数多く検出され、これらの遺構からの出土遺物は県下の弥生土器編年の基準資料となっている。また、北東2.0kmに所在する山口遺跡は、弥生時代後期から中世にかけて断続的に栄える集落跡であり、このすく北側には飛鳥時代の寺院として知られる山口廃寺跡が所在している。その他、山口遺跡の西側には藤田古墳が所在する。この古墳は直径15mほどの円墳で、主体部は竪穴式石室であり、土器とともに鉄刀が出土したと伝えられている。丘陵上に古墳が築造されることの多い紀の川流域にあって、本古墳は平地に近い立地を示し、かつ５世紀代の古墳として注目されよう。また、当該調査地の西側には西田井遺跡や田屋遺跡などの紀ノ川流域を代表する弥生時代から中世までの集落遺跡が連なっている。

第２章　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

和歌山県により都市計画道路西脇山口線道路建設事業が計画され、その事業予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である川辺遺跡に該当することから、和歌山県から平成28年に文化財保護法第94条に基づく通知が和歌山県教育委員会（以下、県教育委員会）へ提出された。これに対し、同年県教育委員会は確認調査が必要である旨を和歌山県へ通知した。その後、和歌山県より県教育委員会に発掘調査の依頼があり、県教育委員会が都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う川辺遺跡第２次確認調査を実施した。その結果、埋蔵文化財が道路建設予定地内に展開することが確認され、県教育委員会は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外についても埋蔵文化財が展開する可能性が高いと判断し、工事中の埋蔵文化財の不時発見を回避するため、和歌山県へ川辺遺跡周辺の試掘調査を依頼した。それに対し、和歌山県より試掘調査について承諾を得て、県教育委員会により都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う川辺遺跡周辺及び（仮称）東城跡試掘調査が実施された。その結果、県教育委員会が実施した４調査区のうち３調査区で埋蔵文化財の展開が確認され、県教育委員会は周知の埋蔵文化財包蔵地である川辺遺跡の範囲を西に拡張した。更に川辺遺跡の西側において、事前の分布調査でも弥生時代後期～古墳時代及び古代末～中世の遺物を表採したことや、文献に東城跡の伝承があったことから、新規の埋蔵文化財包蔵地「東城跡」として認定した。その後、これらの埋蔵文化財が展開する範囲について、和歌山県へ都市計画道路西脇山口線道路建設事業に際しては、平成29年３月28日付け文第548号和歌山県教育委員会教育長通知「和歌山県における発掘調査を要する場合の取り扱い基準」に基づき本発掘調査が必要である旨を報告した。

その後、和歌山県から県教育委員会へ都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う川辺遺跡並びに東城跡発掘調査業務の依頼があり、県教育委員会より公益財団和歌山県文化財センター（以下、当文化財センター）へ都市計画道路西脇山口線建設事業に伴う川辺遺跡、東城跡第２次発掘調査業務の実施計画書の提出依頼があった。それに対し、当文化財センターから県教育委員会へ実施計画書の提出を行い、平成29年５月24日に和歌山県と5,858.8㎡を対象とし（うち、東城跡調査面積4,082.2㎡、川辺遺跡調査面積2709.9㎡）「都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う川辺遺跡並びに東城跡第２次発掘調査業務」として契約を行い、着手した。

なお、東城跡は県教育委員会と協議のうえ、平成29年１月24日付で和歌山県と現有水路を調査面積から控除する変更契約を行い、調査面積を3,860.4㎡に減じた。また、川辺遺跡も電柱並びにガス管の埋設により一部の発掘調査範囲について、当該事業期間中に着手できないことが判明したため、県教育委員会と協議のうえ、平成29年1月24日付で和歌山県と変更契約を行い、調査面積を2,461.9㎡に減じた。なお、当該箇所は２－３区として和歌山県教育委員会が発掘調査を行った。

第２節　調査の経過

東城跡の発掘調査は「東城跡発掘調査工事」として株式会社崎山組が請負い、平成29年８月１日から平成29年12月８日までの工期で実施した。調査区は排土置場等の確保のため、南北に１区と２区に区分けし、更に南側を西から１－１区、１－２区、北側を西から２－１区、２－２区とし、発掘調査は１区、２区の順で実施した。調査対象地の東側である１－２区及び２－２区については遺構面が２面存在する。掘削は全ての調査区において第１層及び第２層を機械で掘削し、第３層及び第４層の遺物包含層は人力で掘削した。遺構面が２面ある範囲については、第５層上面で遺構検出を行い、遺構の埋土を掘削し、一連の処理を行った後、更に第５層である包含層を人力で掘削し、第６層上面で遺構検出を行い、遺構の埋土を人力により掘削した。また、検出した遺構等は掘削後、調査員による全景や個別の写真撮影、調査補助員による実測作業並びにラジコンヘリコプターを用いた航空写真測量による図化作業により記録保存を行った。この様な記録保存作業を行った後、機械により埋戻しを行った。

航空写真測量及び基準点測量は「都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う東城跡航空写真測量・基準点測量委託業務」として平成29年７月４日から平成30年1月12日の工期で株式会社共和に委託し実施した。なお、航空写真測量の撮影は調査の終了した調査区から４回に分けて実施した。

川辺遺跡の発掘調査は、「川辺遺跡第２次発掘調査工事」として株式会社田畑建設が請負い、平成29年７月４日から平成29年12月８日までの工期で実施した。発掘調査区は排土置場等の確保のため、南北に区分けし、南側を２－１区、北側を２－２区とし、発掘調査を２－１区、２－２区の順で実施した。いずれの発掘調査区でも、第０層から第３層までを機械で掘削し、第４層を人力で掘削したのち、遺構の検出を行って、遺構埋土を人力掘削した。検出した遺構等は、足場などからの写真撮影、調査補助員らによる実測作業並びにラジコンヘリコプターを用いた航空写真測量による写真撮影・実測作業により埋蔵文化財の記録保存作業を行った。こうした記録保存作業を行ったのち、機械により埋め戻しを行った。

航空写真測量は、「都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う川辺遺跡航空写真測量委託業務」として、平成29年７月４日から平成30年１月12日の工期で有限会社ヤマニシに委託し実施した。２－１区の測量・撮影は平成29年９月21日、２－２区の測量・撮影を平成29年11月29日に実施した。

第３節　出土遺物等資料の整理

１．出土遺物等整理業務

土器の洗浄作業については、発掘調査中に応急整理作業として調査現場事務所でハケとブラシを用いて行った。特に本発掘調査での出土遺物は素焼きの土器が殆どで、器面が脆弱なためハケを多用した。注記作業は、土器の破片に調査コードと登録番号を面相筆で注記を行った。細片については登録番号のみとした。接合作業は、遺構毎で出土土器を接合し、重複している遺構の出土土器については後に接合を試みた。接合作業の後、欠損部分につい

遺物接合・復元作業風景

デジタルトレース作業風景

遺物実測作業風景

ては土器の充填剤を用いて補強を行った。出土遺物（土器・石製品・金属製品）の実測作業は、報告書に掲載する実測可能な遺物を各遺構から選び出し行った。実測を終えた遺物からフルサイズデジタルカメラを用いて遺物の写真撮影を行った。

出土遺物の登録は、発掘調査現場で土器を取り上げた袋の状態を維持し、これらの遺物カードに付してある登録番号で管理し、登録番号毎の土器の種類に分け破片数を記して登録台帳を作成した。

２．金属製品保存処理

東城跡の356土坑から出土した鉄製品１点を（株）吉田生物研究所に委託して保存処理を行った。作業前の鉄製品は、２片に割れた状態であったが、Ｘ線透過撮影の診断によれば鉄刀片の形状が残っており、クリーニング作業を進めた。この後、樹脂減圧含侵を行い、２片に割れていた遺物片をアクリル樹脂により接合補強した。

また樹脂塗布作業を施し、樹脂塗布上にアクリル絵具により補彩を行った。作業は平成30年６月28日から平成30年11月27日の間に実施した。

第４節　普及活動

東城跡・川辺遺跡の発掘調査成果の現地公開は、周辺住民を対象として平成29年11月26日に実施した。現地公開当日は、各遺跡の遺構から出土した遺物を調査事務所の前に展示し、調査員による展示遺物の解説を行った。展示遺物の解説は、参加していただいた方々にとっても、各遺跡の説明と合わせて遺構の内容をより理解するのに効果的であった。当日の参加人数は73名であった。

現地公開風景①

現地公開風景②

第３章　既往の調査

第１節　東城跡

東城跡は新規発見の遺跡であり、既往の調査歴がない。

今日の調査対象地には、東城跡と呼ばれる館跡の存在が伝承されていた。県教委が館跡と考えられる微高地となる方形区画範囲とその周辺の分布調査を実施したところ、方形区画を中心に12ケ所で弥生時代後半～古墳時代、古代末～中世の遺物の散布が認められたことから、工事中の不時発見を回避するため試掘調査が平成29年２月15日～２月27日の期間で実施された。

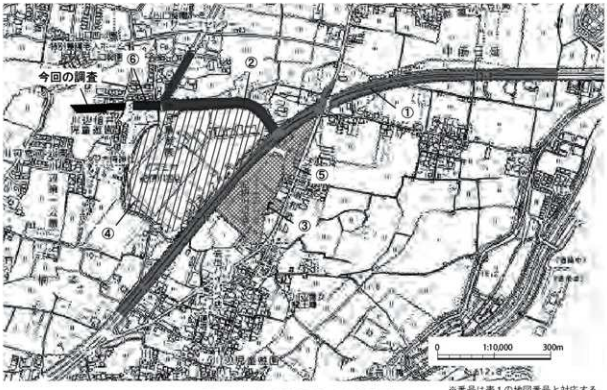
第２節　川辺遺跡

川辺遺跡は、縄文時代後期から中世にかけて遺構が展開する大規模な複合遺跡として知られている。これまでに実施された主要な発掘調査は、以下の表１のとおりである。

表１　川辺遺跡既往の調査一覧

地図番号	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因	調査成果概要	調査組織	参考文献
①	1987.07.09 －1995.03.14	約 30,641	一般国道24号和歌山バイパス建設	縄文時代晩期の甕棺墓6基、弥生時代中期の竪穴建物1棟・方形周溝1基、弥生時代後期後半～古墳時代の溝、古墳時代又は飛鳥時代の竪穴建物1棟、飛鳥時代の竪穴建物・掘立柱建物、道路状遺構、中世の井戸7基、木棺墓7基、近世の墓、土坑等が検出された。その他、包含層から遺先器土偶が出土している。	(財)和歌山県文化財センター	1
②	1997.03.18－12.25 2000.08.21－03.23 2002.03.05－06.25	7,417	県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業	庄内並行期の竪穴建物・方形周溝墓、飛鳥時代の竪穴建物・掘立柱建物・土壙墓・溝、中世の掘立柱建物・土壙墓等が検出された。	(財)和歌山県文化財センター	2
③	2001.12.26－2002.02.25	192		弥生時代中期の竪穴建物2棟、木棺墓と考えられる土坑1基、近世初頭の畦畦を伴う水田区画19単位以上が検出された。	(財)和歌山市文化体育振興事業団	3
④	2006.12.05－2007.05.24	約 2,300	店舗建設	縄文時代晩期中葉の土器棺墓・土坑、弥生時代の溝、古墳時代前期から後期にかけての竪穴建物・溝、飛鳥時代～奈良時代の竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑、鎌倉時代の土壙墓・溝等を検出した。その他、土馬が出土している。	(財)和歌山市都市整備公社	4
⑤	2008.08.25－11.04 2008.10.28－2009.02.04 2009.02.09－02.27、 05.20－06.16	約 1,900	店舗建設	弥生時代中期前葉の土壙墓、方形周溝墓の可能性が高い溝状遺構、弥生時代中期中葉～後期の竪穴建物、飛鳥時代～奈良時代の溝等を検出した。	(財)和歌山市都市整備公社	5
⑥	2014.10.29 －2015.02.13	820	都市計画道路西脇山口線道路建設事業	古墳時代～鎌倉時代の土坑・溝、中世～近世の溝を検出した。	(公財)和歌山県文化財センター	6

【参考文献】
1　松下彰編1995『川辺遺跡発掘調査報告書－一般国道24号和歌山バイパス建設に伴う発掘調査－』
(財)和歌山県文化財センター
2　村田弘・佐伯和也・藤井幸司2005
『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書－県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に伴う発掘調査－』
(財)和歌山県文化財センター
3　川口修実2003『川辺遺跡発掘調査』『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成13年度－』和歌山市教育委員会
4　井馬好英・藤原勝則2008『川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』和歌山市都市整備公社発掘調査報告書第1集
(財)和歌山市都市整備公社
5　井馬好英・前田敬彦2010『川辺遺跡第10・11・12・13次発掘調査報告書』和歌山市都市整備公社発掘調査報告書第3集
(財)和歌山市都市整備公社
6　山本光俊・小林充貴2015『川辺遺跡－都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う発掘調査報告書－』
(公財)和歌山県文化財センター



※番号は表１の地図番号と対応する。

図２　川辺遺跡既往の調査位置図

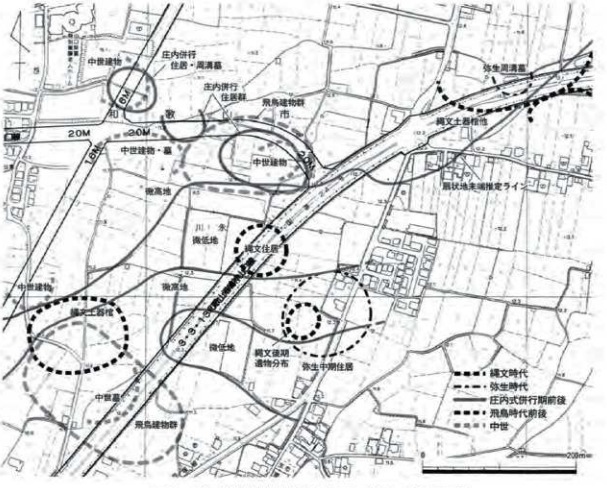


図３　川辺遺跡時期別遺構分布図（井馬・前田 2010）

第４章　調査の方法

発掘調査は財団法人和歌山県文化財センターが定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006）に準拠して行った。発掘調査で使用した調査コードは、東城跡は17－01・443（2017年度－和歌山市・東城跡）、川辺遺跡は17－01・145（2017年度－和歌山市・川辺遺跡）である。出土遺物並びに記録資料はこの調査コードを用いて管理している。実測図作成や遺物取上げの際に用いた調査区の地区割りは、平面直角座標系（世界測地系）第Ⅵ系の座標軸を使用し、数値はｍ単位で表示している。東城跡の地区割りの基点は（Ｘ＝－192,000ｍ、Ｙ＝－68,000ｍ）、川辺遺跡の地区割りの基点は（Ｘ＝－190,000ｍ、Ｙ＝－66,000ｍ）とし、中区画、小区画の地区割りを行った。中区画はこの基点から西方向と南方向にそれぞれ100ｍ四方の区画を１単位として設定し、西方向へ大文字アルファベットでＡ～Ｊ、南方向へアラビア数字で１～10と表記した。更に、中区画を４ｍ四方に区画し、それを１単位として小区画を設定した。小区画も西方向にローマ字の小文字でａ～ｙと、南方向へアラビア数字で１～25と表記した。遺構図作成や遺物取上げの際には、４ｍ四方の小区画で行い、遺物ラベルには中区画と小区画を組み合わせて表記した。また、遺構名は遺構の種類に関わらず、検出した順に３桁の数字で表記した。方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均潮位（Ｔ．Ｐ）からのプラス値を使用した。写真撮影はフルサイズデジタルカメラ並びに中判デジタルカメラを使用し、撮影に際しては、色の正確さを期すためにグレ

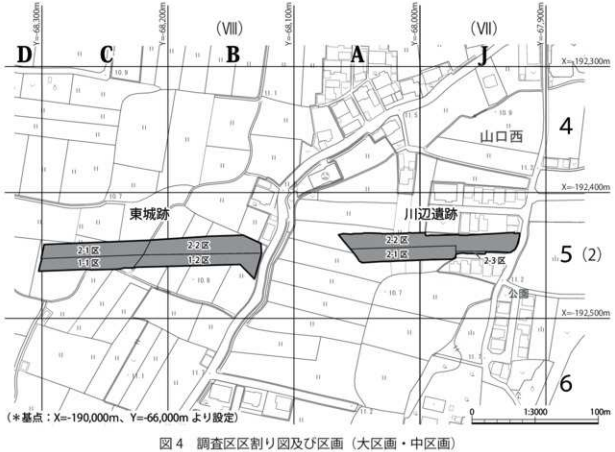


図４　調査区区割り図及び区画（大区画・中区画）

ーチャート又はカラーチャートを写しこみ、ファイル形式はRAW形式とJPEG形式で撮影した。その他、委託業務によりラジコンヘリコプターによる空中写真測量で調査区付近の遠景及び近景を撮影し、各調査区の俯瞰写真撮影を実施した。

記録図面は、手実測によるS＝1/10・1/20の個別遺構実測図（遺構平面図・土層断面図・遺構断面図）を作成したほか、遺構全体図は委託業者によりラジコンヘリコプターによる空中写真測量で作成した。

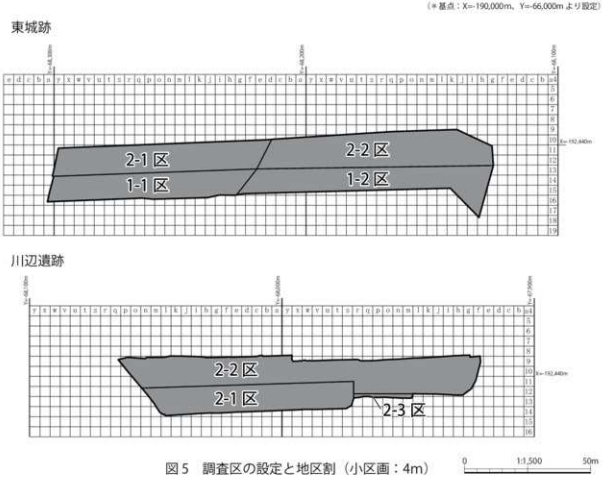


図5　調査区の設定と地区割（小区画：4m）

第５章　調査成果

第１節　東城跡

調査区は東西約187m、南北約20mの長方形で、調査前は全て水田であった。標高は、調査区の東端で10.90m、西端で10.30mと西側に向かってなだらかに傾斜がついており、その比高は0.6mほどである。遺構が確認される面は第５層上面と第６層上面で、前者を上面、後者を下面としている。なお、遺構面が上面、下面と２面の遺構面が確認できるのは調査区の東端から約100mの範囲の１－２区および２－２区である。西側の調査区１－１区、２－１区については遺構検出面が１面で、時期差のある遺構を同一面で検出したため、新しい遺構を上面、古い遺構を下面に相当する遺構とした。

1. 基本層序

今回の調査における基本層序は下記のように６層に大別した。層の中でも土質が同様で若干色調に差異が生じる場合はａ・ｂと枝番を付し細分した。

第１層から下位の堆積層の状況は２－１区と２－２区では全く様相が異なる。この状況は、いつの時期かは定かではないが、大規模な土地の改変が行われた可能性が高い。

第１層は近・現代の水田層で第１ａ層は耕作土、第１ｂ層は床土である。

第２層は浅黄ないし灰白シルト質を呈し、マンガン粒を多く含む。近世以降の耕作土及び床土と考えられる層で水平堆積をなす。層中には中世の土師器皿や瓦器の細片を少量含む。なお、この層は東側の２－２区では確認できない。

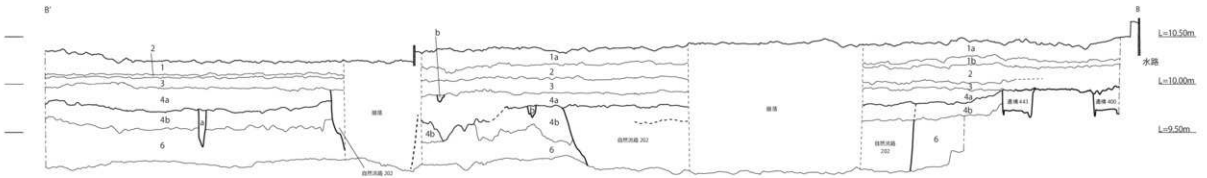
第３層は浅黄シルト質で、第２層と色調が酷似する。２－１区の西側では0.12～0.15mの安定した厚みで水平堆積するが、２－１区の東に行くにつれて細くなり終息する。従って、２－２区では確認できない。この層はマンガン粒を多く含み、第２層と同様に土師器皿や瓦器などの遺物の破片を含む。この状況から、中世の耕作土の可能性が高い。

第４層は暗灰黄シルト層である。上下２層に細分でき、第４ａ層とした上層にはマンガン粒が多く含まれ、第４ｂ層とした下層は上層より濃色である。この層には古墳時代初めの土器片や、中世の土師器片、瓦器片を含む。中世の遺物包含層と考えられる。この層もまた、２－１区では確認できるが、２－２区では確認できない。

第５層は第５ａ層、第５ｂ層、第５ｃ層と３層に細分でき、0.25～0.30mの厚みで水平堆積をなす。この層は２－２区では確認できるが、２－１区では確認できない。第５ａ層は暗灰黄シルトで、２－２区では第１層の直下に0.04～0.08mの厚みでマンガン粒を多く含み、水平堆積を成す。第５ｂ層と第５ｃ層は双方が黄褐シルト層であるが、第５ｃ層は第５ｂ層より黄色味が強い。遺構の切り込みは、第５ｂ層あるいは第５ｃ層の上面から確認できる。また、第５ｂ層、第５ａ層には古墳時代初めの土器が多く含まれる。第５ａ層は中世の包含層と考えられる。

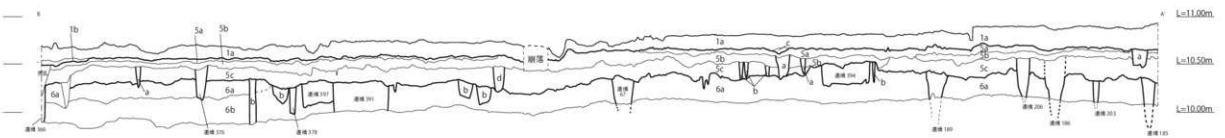
第６層は遺物を含まないところから基盤層と考えられる層で、この層の上面は、第２遺構面として扱っている。また、この層は２－１区と２－２区では双方共にシルト質であるが、色調が異なり、２－１区では明黄シルト、２－２区の第６ａ層では黄灰シルトである。遺構検出面としては、２－１区では第４ｂ層上面あるいは第６層上面、２－２区では第５層（第５ｂ層・第５ｃ層）上面あるいは第６ａ層上面となる。

2-1 区北壁 B-B′

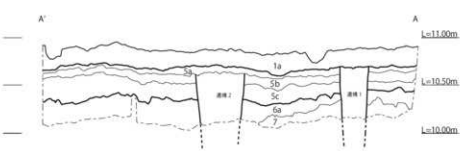


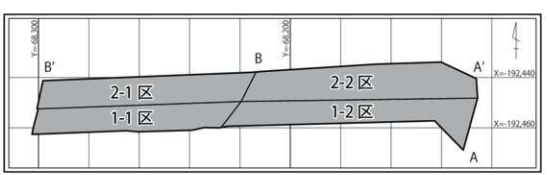
2-1 区
1a　2.5Y5/1 黄灰色シルト（現耕作土）
1b　2.5Y7/6 明黄褐色シルト（現床土）
2　2.5Y7/4 浅黄色シルト
3　2.5Y7/4 浅黄色シルト
4a　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト マンガン含む
4b　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
6　2.5Y7/6 明黄色シルト
a　2.5YR6/2 灰黄色シルト
b　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
d　2.5Y7/2 灰黄色シルト

2-2 区北壁 A′ -B



1-2 区・2-2 区東壁　A-A′





調査区模式図

1-2 区及び 2-2 区
1a　10Y6/1 灰色シルト（現耕作土）
1b　2.5Y7/6 明黄褐色シルト（現床土）
5a　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト マンガン多く含む
5b　2.5Y5/3 黄褐色シルト
5c　2.5Y5/3 黄褐色シルト 5b よりやや黄色強い
6a　2.5Y6/1 黄灰色シルト
6b　2.5Y6/2 灰黄色シルト
7　2.5Y6/1 黄灰色 粗砂・礫混じる
a　2.5YR6/2 灰黄色シルト
b　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
d　2.5Y7/2 灰黄色シルト

1m
1:40
5m
1:300

図 6　土層断面図

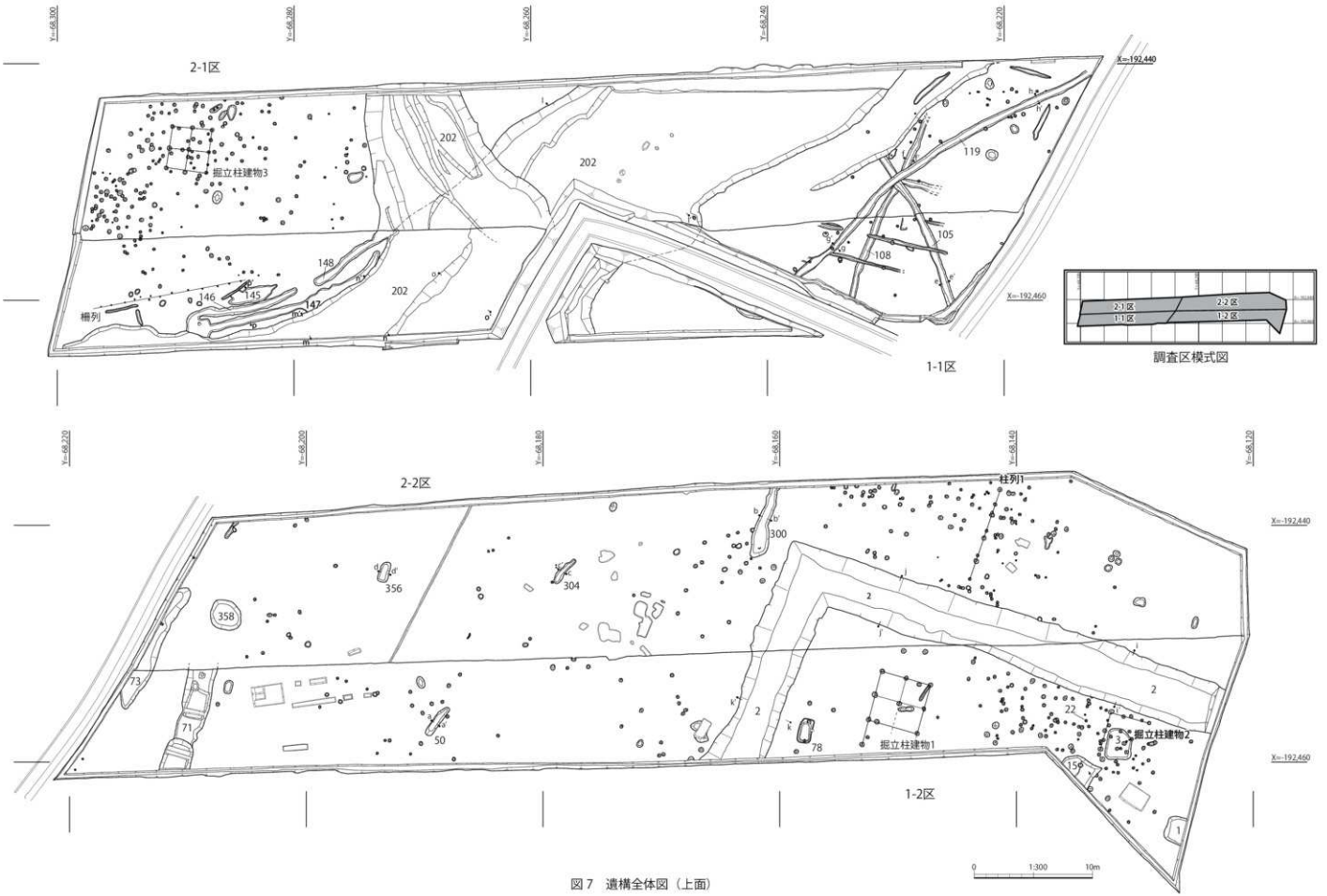

Y=68,300
Y=68,280
Y=68,260
Y=68,240
Y=68,220
X=-192,440
X=-192,460
2-1区
掘立柱建物3
202
148
146
145
147
栅列
119
105
108
1-1区
調査区模式図
2-1区
2-2区
1-1区
1-2区
Y=68,220
Y=68,200
Y=68,180
Y=68,160
Y=68,140
Y=68,120
2-2区
柱列1
300
304
356
358
73
71
50
78
掘立柱建物1
22
掘立柱建物2
156
1-2区
0
1:300
10m

図 7　遺構全体図（上面）

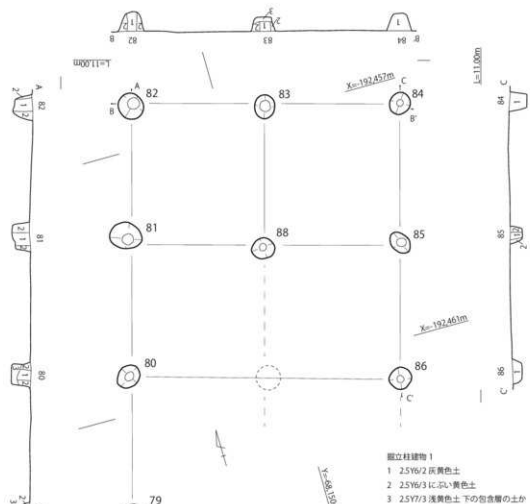


図８　掘立柱建物１実測図

２．調査の成果

（１）中世の遺構と遺物

上面では中世に帰属する遺構、調査区の西端では掘立柱建物３や柱穴群を検出した。柱穴群は、建物が建つ一定量以上に検出したが、組み合う柱穴がなく建物プランを想定するに至らなかった。また、掘立柱建物３の東側には、北東から南西に流れていたと思われる202自然流路があり、この自然流路の埋没時期寸前の溝状遺構の支線を数条検出した。調査区の中央付近では土坑状遺構304・356を検出し、この内の１基は出土遺物から中世墓と考えられる。調査区の東端では方形区画を囲繞していたと考えられる堀の北西隅の屈曲部分を検出し、この堀に関連すると思われる掘立柱建物や柱列を検出した。

掘立柱建物１（図８、写真図版３）　堀の内側で検出した掘立柱建物である。規模は西辺で桁行（南北）３間、北辺で梁行（東西）２間である。桁行の柱間は、北から芯々で2.1m、2.15m、2.2mで、梁行は東から2.1m、2.1mを測る。柱穴の掘形は、径0.3～0.4mの円形を呈し、残存の深さは0.3m前後を測る。柱穴の埋土は、柱当りは灰黄シルト、掘形部分はにぶい黄シルトである。柱当りの痕跡から柱の直径は0.2m前後であったと判断される。また、掘形の埋土中から13

世紀前半代の瓦器椀片が出土していることから鎌倉時代前期に帰属する建物と判断した。なお、建物の方位は16度東偏する。

掘立柱建物２（図９、写真図版３）

掘立柱建物１と同様に堀の内側で検出した掘立柱建物である。建物の規模は東西２間、南北２間以上になるものと思われるが、南辺と東辺については整然とした並びを確認できなかった。東西方向の柱間は、芯々で西から1.75m、1.65mで、南北方向は芯々で北から1.70m、1.65mで、建物１と比べると柱間が狭い。柱穴の規模は、直径0.3～0.4mのほぼ円形を呈し、残存の深さは0.12～0.45mを測る。埋土は掘立柱建物１と同様である。建物の主軸は掘立柱

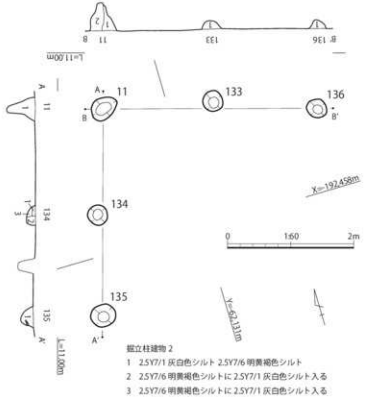


図９　掘立柱建物２実測図

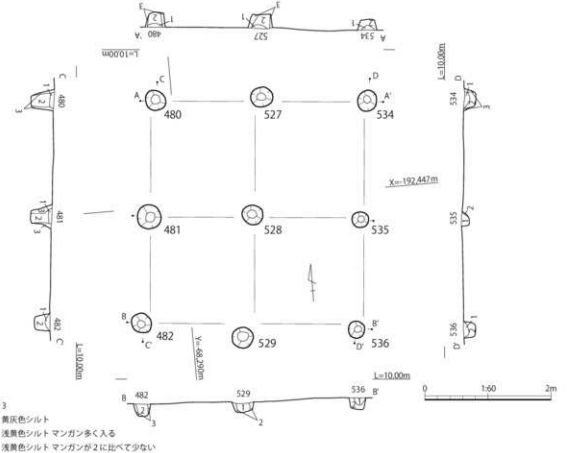


図10　掘立柱建物３実測図

建物１と同方向を示す。また、建物の北西隅の柱穴から瓦器椀、土師器皿、土師器鍋の破片が出土した。建物の主軸方向や出土遺物から掘立柱建物１と同時期と考えられる。

掘立柱建物３（図10、写真図版３）　調査区の西端で検出した掘立柱建物である。この周辺には柱穴が密集していたが、建物を復元できたのはこの１棟のみであった。

規模は、桁行（南北）２間、梁行（東西）２間である。桁行の間尺は芯々間で北から1.80m、1.70m、梁行は東から芯々間1.80m、1.65mを測る。柱穴の掘形の規模は径0.3～0.38mで、平面形状は円形を呈する。残存の深さは0.11～0.36mを測る。埋土は２層ないし３層に分層でき、上層（１層）は黄灰シルトで覆われ、柱当たりとなる中心部分（２層）はマンガン粒を多く含む浅黄シルト、その両側には２層と酷似する３層（２層よりマンガン粒が少ない）が堆積する。

柱列１（図11）　２－２区の東側、東西方向の堀の北で検出した南北方向に延びる４間の柱列である。南の３間分については、間尺は約2.1mを測り、７尺を意図していたものと考えられる。柱穴の掘形は直径0.25～0.3mの円形で、残存の深さは0.17～0.28mを測る。この柱列の周辺では他に多数の柱穴を検出し、東西方向、南北方向に通る列もある。この様な状況から、建物が建っていた可能性が大きい。また、この柱列は東西方向の堀跡に直交しているため東城に関連するものと思われる。

柵　１－１区の西端で検出した杭列である。直径0.05～0.08mの杭跡を0.8～0.9mの間尺で12.5m分検出した。杭列は、145～148溝とほぼ平行に打設されていることから、護岸として打たれた可能性が大きい。

１井戸（図12・44、写真図版４）　１－２区の東端で検出した土坑である。土坑の東側は調査区外に延びているため全容は不明である。平面形状は、遺存形状から推量すれば一辺2.2m程度の方形を呈するものと思われる。残存の深さは1.75mを測り、平面形状と深さから井戸と判断できる遺構であるが、石積や木枠あるいは井戸底の曲物などの痕跡を確認

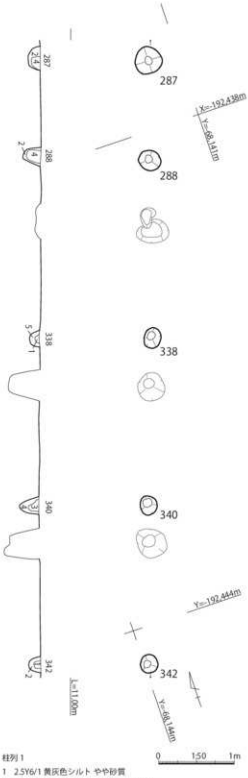


図 11　柱列１実測図

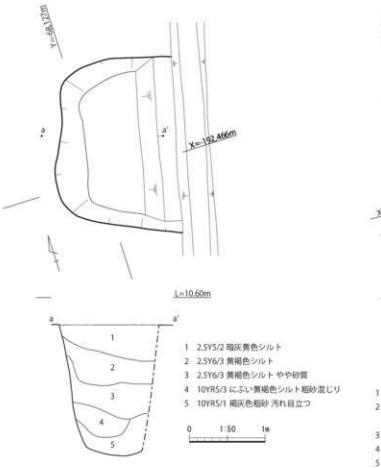


図 12　1 井戸実測図

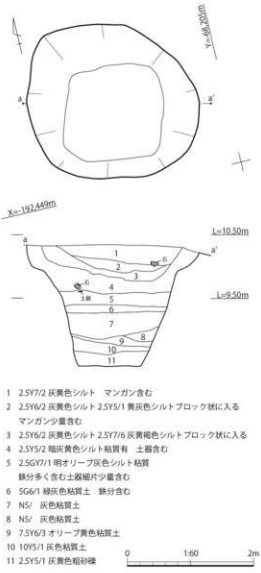


図 13　358 井戸実測図

するに至らなかった。埋土は５層に分層でき、色調や土質から大きく３層に分けられる。上層（１層）は暗灰黄シルト、中層（２層～４層）は黄褐色系シルト、下層（５層）は褐灰色粗砂層となる。この遺構からは、瓦器椀、土師器皿、土師器鍋・土釜、東播系捏ね鉢の破片が出土した。（１～３）は12世紀前半～後半に帰属する瓦器椀で（１・２）は内面に細かい磨き、見込みに螺旋状の暗文を施す。東播系捏鉢（４）の口縁部の形状から12世紀代に帰属するものと思われる。

358井戸（図13、写真図版５）　２－２区の西端で検出した遺構である。平面形状は角の取れた正方形を呈し、規模は東西約2.7m、南北約2.5mを測る。残存の深さは約1.95mを測り、底は平らで、断面形状は逆台形を呈する。埋土は11層に分けることができるが、堆積状況及び土質から大きく上層、中層、下層の３層に分けることができる。検出面から下に約0.75mまでは、灰黄色系のシルト層（１層～４層）がレンズ状の堆積を呈し、それより下には厚み0.95mの灰色系の粘質土（５層～10層）がほぼ水平堆積となる。更に、下層（11層）には厚み0.25mの灰黄色粗砂層が水平に堆積する。この遺構の規模や形状から井戸と判断できる遺構である。なお、井戸枠や曲物は確認できなかったことから素掘り井戸である。下層は井戸の使用時の堆積土と考えられ、中層は廃棄時以降の細かい粒子の自然堆積層で、上層にはブロック状に他の土が混ざっていること

から意図的に埋められた可能性が高い。遺物は、多量の庄内式併行期後半と思われる土器細片が出土した。また、中世遺物として瓦器椀が１片のみ出土している。

３土坑（図44、写真図版４）　１－２区の東端寄りで検出した土坑である。平面形状はほぼ四角形で、南北約2.5m、東西約2.0mを測る。残存の深さは、底面の平坦面で0.13～0.15mを測り、埋土は単一層のにぶい黄褐シルトである。遺物は瓦器椀（５・６）や土師器鍋（７）が出土した。鎌倉時代に帰属する遺構である。

15土坑（写真図版４）　３土坑の南側で検出した土坑である。この遺構の南側は調査区外に延びているため全容は不明である。平面形状は、検出した形状から推測すれば不定形と思われ、規模は東西約3.0m以上、南北約2.0m以上を測る。残存の深さは0.23mを測り、埋土はにぶい黄シルトの単一層である。遺物は古墳時代のものもあるが、瓦器片や土師器皿片、土師器鍋か釜片もあることから中世の遺構と考えられる。細片であるため図示はしていない。

図14　78土坑実測図

78土坑（図14、写真図版５）　１－２区の中央東寄りで検出した土坑である。形状はほぼ長方形を呈し、主軸を南北方向とする。規模は南北方向約2.1m、東西方向1.06mを測る。肩部は２段落ちとなり、内側に一回り小さい南北方向1.65m、東西方向0.8mの穴を掘削していた。残存の深さは0.26mを測る。埋土は明黄褐色シルトの単一層で、径0.1m大の礫や微細な土器片が含まれていた。遺物は、土師器皿や瓦器椀の細片が少量出土した。規模や掘形の形状から、土壙墓の可能性が高い。

50土坑（図15）　１－２区中央やや西寄りで検出した。平面形状は長方形を呈し、規模は長さ約3.0、幅0.35m、残存の深さは0.4mを測る。埋土は黄褐色系のシルトが２層に堆積する。

300土坑（図15・44、写真図版６）　２－２区の中央北側で検出した土坑である。長軸方向はほぼ南北方向を呈する。北側は調査区外に延びる。検出長は6.2m、幅は0.95～1.4m、残存の深さは0.04～0.1mを測り、西側に深くなる。遺物は土師器鍋（10・12）、瓦質擂鉢の口縁部（９）、

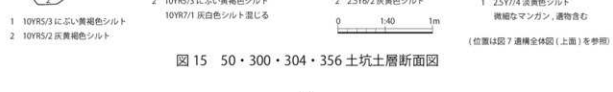


図15　50・300・304・356土坑土層断面図

同じく瓦質土器擂鉢の底部（11）が出土するが器面の摩耗が著しい。他に瓦器椀片、土師器皿片が微量出土した。

304土坑（図15）　2－2区中央やや西寄りで検出した土坑である。平面形状は長楕円形である。規模は南北長約2.6m、東西長0.35～0.65mで、残存の深さは0.1mを測る。埋土はレンズ状の堆積を呈し、酷似する浅黄シルトが上・下層の2層に分層できる。

356土坑（図15・44、写真図版5）　2－2区の西寄りで検出した土坑である。平面形状は長方形を呈し、主軸を南北方向とする。規模は南北長約1.80m、東西長約0.8mを測る。断面形状は台形を呈し、底は凸凹している。残存深さは、最も深い箇所で0.18mを測り、埋土は淡黄シルトの単一層である。遺物は、土師器皿や土師器鍋の破片が数片と中国製白磁碗1片、（15）の鉄刀片が1点出土している。なお、鉄刀片は専門業者に委託して保存処理を行った。土坑の形状や規模及び出土遺物などから土壙墓の可能性が高い。

71溝（図44、写真図版6）　1－2区の西端で検出した溝状遺構である。軸方向は南北で、底面の高さから北から南へ流れる。検出長は約9.0m、幅は2.2m、残存の深さは0.42mを測る。断面の形状は舟底状を呈する。埋土は3層に分層でき、レンズ上の体積を成す。埋土の色調と土質は全体的に黄色系のシルトである。出土遺物には白磁皿（16）、土師器土釜（17～19）、土師器甕（20）、管状土錘（21）、土師器皿（22）等がある。

73溝　1－2区の西端で検出した南北方向に延びる溝状遺構である。当該溝の西側は調査区外のため全容は不明である。検出長は約12.0mを測り、幅は0.8m以上である。残存の深さは0.25mを測り、埋土は4層に分層でき、浅黄～にぶい黄褐色シルトのレンズ状の体積を呈する。遺物は土師器皿、土師器鍋の破片が微量出土した。

105・108・119溝（図16、写真図版10）　3条の105・108・119溝は、2－1区の東端で検出した。これらの溝は重複し、3条の前後関係が明白で、古い順に遺構108、105、119である。

105溝　北西方向から南東方向に流れていたものと思われる。北側は202自然流路と重複しているため不明で、南側は調査区外に延びる。検出長は約14.0m、幅は0.55～0.65mを測る。断面形状は半月状となり、中央部の最も深い箇所で0.15mを測る。埋土は灰黄褐シルトに黄色のブロックが入る単一層である。遺物には図示できるものはないが、布留式併行期の土器片が数十片出土している。

108溝　ほぼ南北に延びる溝状遺構である。南側は調査区外に延び、北側は途中で削平されたことから終息している。検出長は約16.0m、幅は0.55～0.6m、残存の深さは0.16mを測る。断面形状は舟底状を呈し、埋土は2層に分層でき、殆どは上層の灰黄褐シルトとなり、東側の肩口から底部にかけてにぶい黄褐シルトが堆積する。底の標高から北から南に流れていたものと思われ

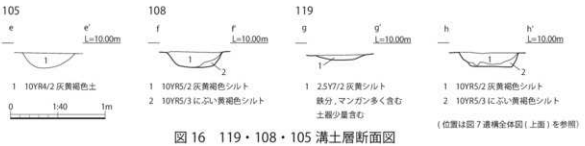


図16　119・108・105溝土層断面図

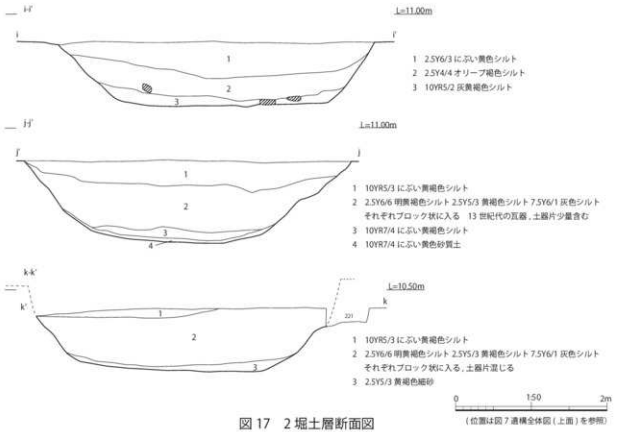


図 17　2 堀土層断面図

る。遺物は布留式併行期の土器片が少量出土しているが、下面遺構である竪穴建物6（遺構118）の遺物が混入している可能性が高い。

119溝　2－1区の北東隅からほぼ直線的に南西方向に流れる。北方向は調査区外に延び、南方向は現有の用水路で撹乱され、その先は不明である。検出長は約30m、幅は0.45～0.85mを測る。残存の深さは約0.15mを測り、両肩は斜め上方に直線的に立ち上がる。埋土は2層に分層でき、上層は灰黄褐シルト、下層はにぶい黄褐シルトとなる。出土遺物には土師器壺底部甕の底部の他、十数片が出土した。なお、これらの土器片は、下層遺構の竪穴建物5（遺構111）に帰属する可能性が高い。

2堀（図17・44、写真図版7・8）　調査区の東側で検出した堀と考えられる遺構である。この遺構の東側と南側は調査区外に延びているため、規模については不明である。検出長は東西長約38m、南北長約20mである。両者はほぼ直角に交わり隅部を構成することから、方形ないし長方形を呈する区画を囲繞する堀と思われる。堀の幅は4.0～5.0mを測り、残存の深さは0.85～1.10mを測る。本調査では、この堀の北西隅を含む一部を検出したと言えるが、規模については、検出した幅や深さから推し量るには難がある。また、この堀の軸方位は先に述べた掘立柱建物1や掘立柱建物2と同方位で約16度東偏する。堀の埋土は、地点により若干の差異は認められるものの、ブロック状の土を多量に含んでいることから、周辺の土により一気に埋められた状況を呈しており、長い時間をかけて自然に埋没した状況は認められない。また、堀の底部にも長期にわたる滞水を思わせるようなグライ化した土の堆積は認められなかったことから空堀であった可能性が高い。堀埋土からの出土遺物は、堀の掘削体積からすると極めて少ない。出土遺物には瓦器椀（25・27）、土師器皿（24）、土師器土釜（28）、東播系捏鉢（26・29）がある。これらの出土

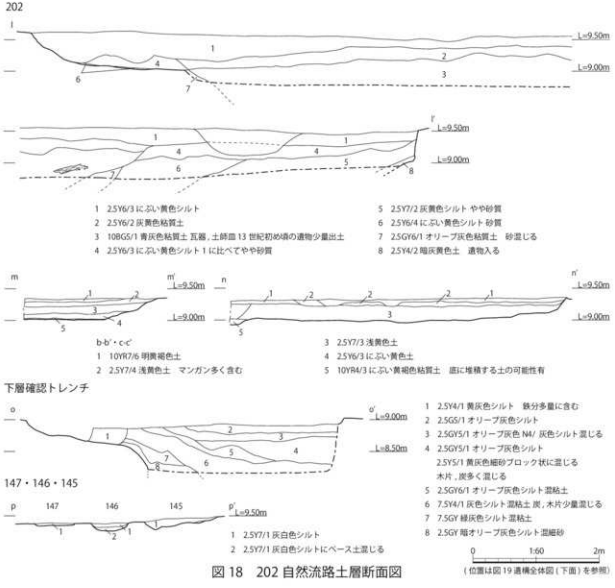


図 18　202 自然流路土層断面図

遺物から12世紀末から13世紀初頭に帰属する遺構と考えられる。なお、この堀については直接的に東城に関するものと断定する資料を得ていないが、出土した遺物の時期や規模などから、東城と呼ばれてきた居館に伴う堀であると考えるのが妥当と思われる。

202自然流路（図18・45、写真図版９）　調査区の西側で検出した自然流路である。遺構ではないが、集落（竪穴建物群）の西限を画すると考えられる流路であるので記述の対象とする。流路の方向は、底の高さから北東方向から南西方向に流れていたと考えられ、最大幅で30m以上を測る箇所もある。深さは最深部まで確認することはできなかったが、約1.2m以上を測る。埋土は、中央部分に上層とした青灰粘質土がレンズ状の堆積を呈し、その脇に中層のにぶい黄シルト、下層オリーブ灰粘質土やにぶい黄及び灰黄シルト、などが堆積する。中層、下層も底までは確認していないが、レンズ状の堆積を呈する。出土遺物は、上層から鎌倉時代に帰属する土師器皿や瓦器椀が出土していることから、この自然流路は、最終の埋没時期は中世段階（13世紀）と判断できる。この様に、レンズ状の堆積を呈することから、何時期かに渡り自然に埋没したと思われる。また、202自然流路の西側で鎌倉時代の掘立柱の柱穴を多数検出していることは最終埋没の証

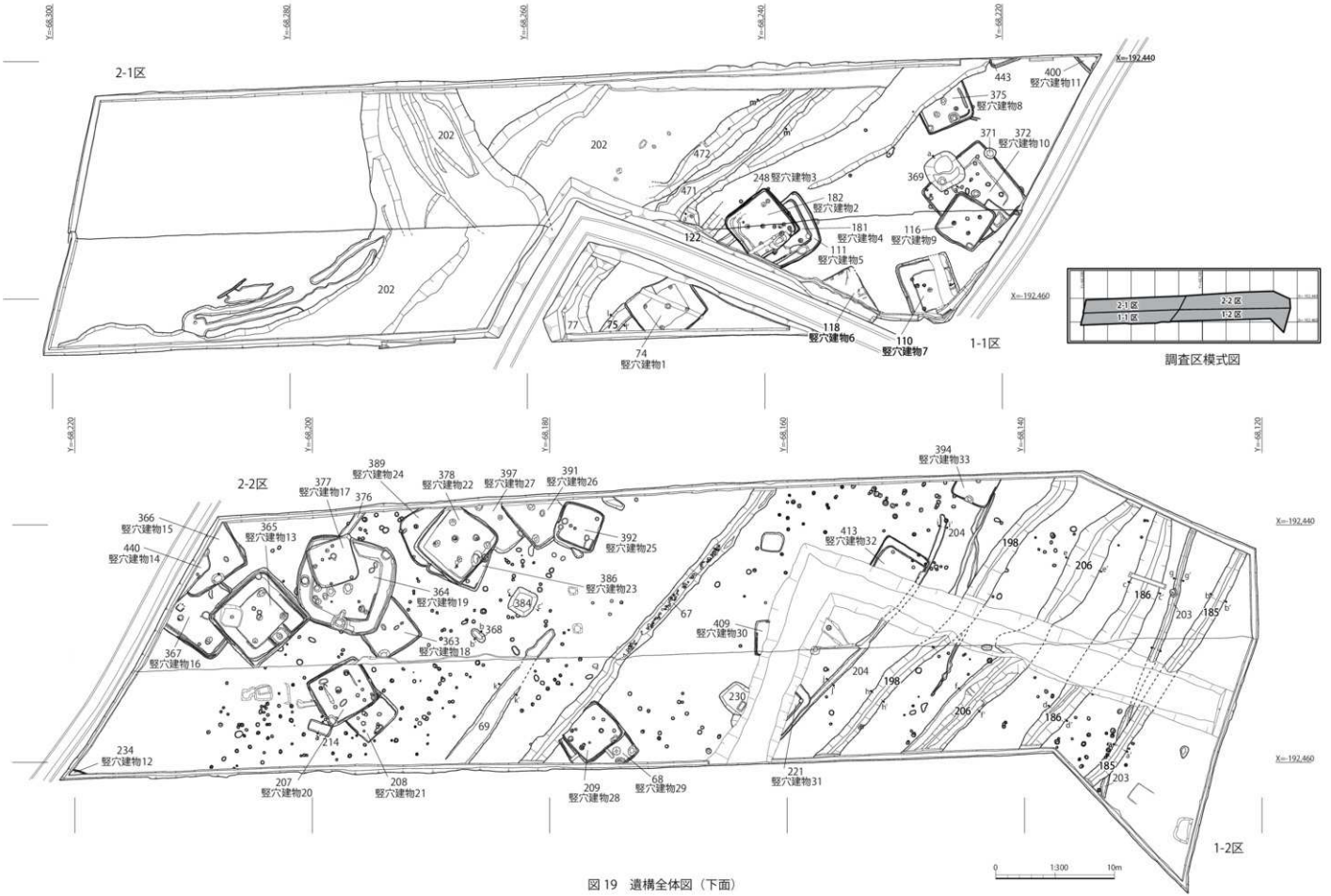

2-1区
1-1区
2-2区
1-2区
X=-192,440
X=-192,460
Y=-68,300
Y=-68,280
Y=-68,260
Y=-68,240
Y=-68,220
Y=-68,200
Y=-68,180
Y=-68,160
Y=-68,140
Y=-68,120
調査区模式図
0 1:300 10m

図 19　遺構全体図（下面）

左であるといえる。竪穴建物等の古墳時代の遺構については全く確認できなかったことから、自然流路202が弥生時代末～古墳時代前期の集落の西限を画するものであったと判断できる。

上層から瓦器椀（38～43）、瓦器皿（31・33・35・37）、土師器皿（30・32・34・36）、土師器土釜（46）などの中世遺物が出土しているが、古墳時代の遺物（45・47）も一定量出土した。

77溝　1－1区の中央付近で検出した。溝の南側は調査区外に延びる。検出長は約35.0mを測る。検出状況及び出土遺物から判断して、202自然流路の埋没直前の東肩の一部と考えられる。上層は4層に分層でき、遺物は瓦器椀、中国製白磁皿、土師器皿の細片が少量出土している。

145～148溝（写真図版9）　調査区の西端で検出した溝状遺構4条である。これら全ての溝状遺構は、方向が同一で、底の高さから北東から南西方向に向かって延びる。

145溝　検出長約4.0m、幅約1.15m、残存の深さは0.04～0.14mを測る。埋土は灰白シルトの単層となる。出土遺物は皆無であった。

146溝　北側には、方向性を一にする遺構148があり、同一の溝状遺構と考えられる。検出長は遺構148を入れると約18.0mで、幅約0.6m、残存の深さは0.06mでる。断面形状は舟底状となる。埋土は単層の灰白シルトとなる。出土遺物は皆無である。

147溝　規模は、検出長約16.0m、幅0.42m、残存の深さは0.02～0.05mと非常に浅い。埋土は灰白シルトの単層となる。遺物は、須恵器甕片が1片出土した。4条の溝の方向性や検出状況から判断して、これらの東側を流れる202自然流路の西肩辺りの深い箇所が、一定方向の流れの基道を踏襲し、短い歳月の中で若干、道筋を変化させ溝状の流道を作ったものと考えられる。なお、147溝から出土した須恵器片は、202自然流路が埋没する過程で埋まった遺物と考えられる。

（2）弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

下面では弥生時代終末期から古墳時代の遺構を検出した。検出した遺構には竪穴建物、土坑、溝状遺構、自然流路がある。調査区のほぼ中央部で竪穴建物を33棟検出し、複雑な重複や建替えが認められた。また、溝状遺構については、調査区の東端で、北東方向から南東方向に流れる同方向のものを6条検出した。これらの溝を検出した付近は、調査地の中でも最も高い箇所であり、付近の竪穴建物が削平され、壁が残存しない状況からも、後世にかなりの削平を受けたと考えられ、検出した以上に幅、深さを有していたものと思われる。また、調査区の西側では弥生時代終末期から中世にかけての自然流路を検出した。以下、検出した主要な遺構について記述する。

竪穴建物1（遺構74）（図20・46、写真図版12）　1－1区の中央部で検出した竪穴建物である。北側の隅は現有水路で、南側の隅は調査区外で不明であるため全容を確認することはできなかった。平面形状はやや長方形を呈し、規模は5.6m×4.8mを測る。残存の深さは0.20～0.25mを測り、埋土は3層に分層でき水平堆積を成す。埋土の上層から1・2層は、灰黄シルトで、下層の3層は固く締まった明黄褐シルトである。壁の内側には1辺（北西～北東）を除いて壁溝が巡る。壁溝の幅は0.10～0.13mで、深さは0.08～0.12mを測る。壁溝の埋土は、暗灰黄シルトの単層である。主柱穴は4本で、ベッド状遺構のコーナー付近で検出した。柱間は、長辺では約2.7m、短辺では2.3mを測る。柱穴掘形の規模は直径0.27～0.34mの円形を呈し、深さは0.44m測る。埋土は、柱痕部分と思われる中心部には暗灰黄シルト、その両脇にはにぶい黄シルトとなる。93柱穴には微量の焼土が混ざる。91炉は建物の中央に位置し、南側の一部が焼けている。規

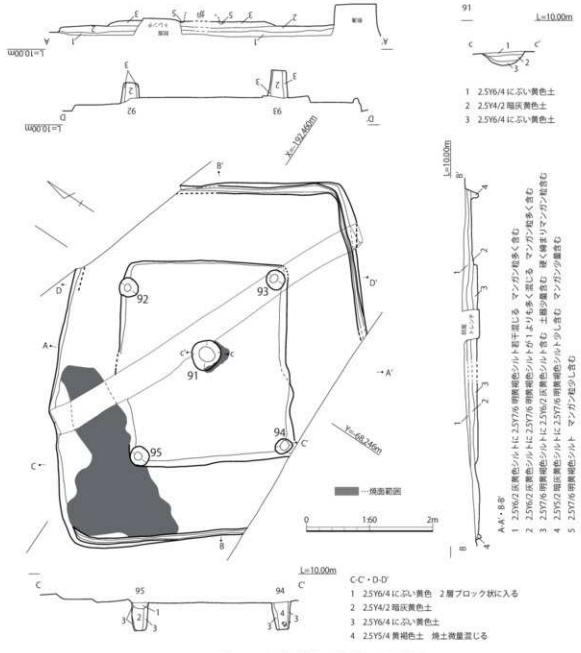


図 20　竪穴建物 1(遺構74) 実測図

模は直径0.45mで、ほぼ円形を呈する。深さは0.13mで、断面形状は舟底状を成す。埋土にはにぶい黄と暗灰黄シルトがサンドイッチ状に堆積する。建物中央は一段低く、周囲にはベッド状遺構が形成されている。ベッド状遺構は地山を削り出したもので、幅0.7～1.0mで、高さ0.07mを測る。また、南西隅のベッド状遺構上面が焼けている。遺物は椀形を呈する鉢（49）が出土している。底部は上げ底で端部は外方に突出する。帰属時期は、庄内式併行期前半から中頃と考えられる。

竪穴建物２～５（遺構182・248・181・111）（図21・22、写真図版12・13）　１－１区から２－１区の東寄りで検出した重複する４棟の竪穴建物である。古い順に、竪穴建物２（遺構182）、竪穴建物３（遺構248）竪穴建物４（遺構181）、竪穴建物５（遺構111）である。

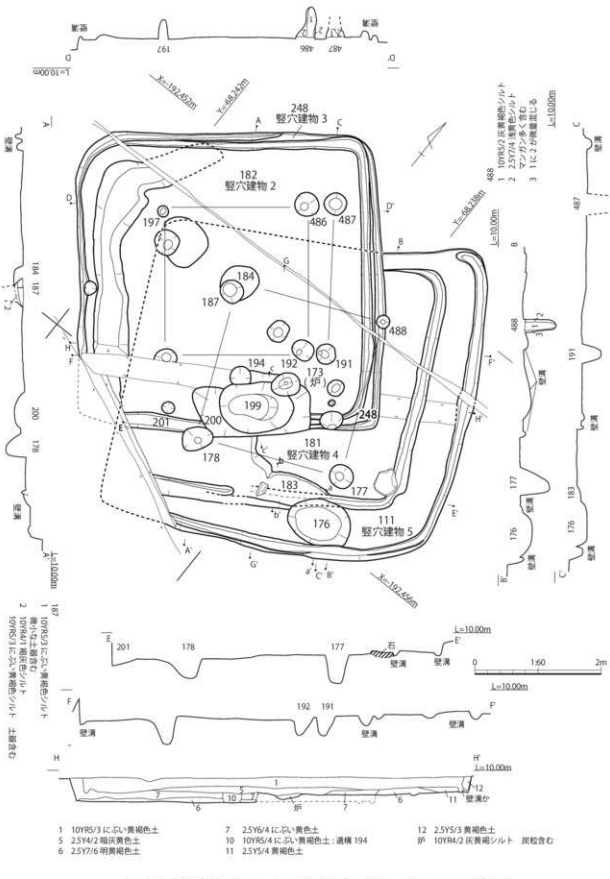


図 21　竪穴建物 2・3・4・5(遺構182・248・181・111) 実測図

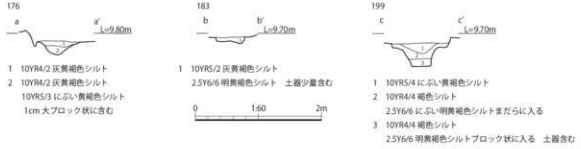


図 22　竪穴建物 2・4・5内貯蔵穴土層断面図

竪穴建物２（遺構182）（図46）　平面規模及び形状は、一辺約4.6mを測る隅丸方形である。壁際には幅0.12～0.16m壁溝が巡る。壁の残存の深さは、0.16mを測り、埋土は２層に分層でき、上層はにぶい黄シルト、下層は明黄褐シルトが水平堆積を成す。炉（遺構184）は建物の中央に位置し、0.55m×0.65mの楕円形を呈しする。主柱穴は４本で、柱間は南北2.25m、東西2.15～2.20mを測る。建物の南辺には壁に接して貯蔵穴を設け、平面形状は楕円形で、南北約0.75m、東西約1.15mを測る。深さは0.37mを測り、埋土は褐色系のシルトが３層に分層でき、中層と下層にはブロック状に明黄褐シルトが混ざる。出土遺物には器台（50）やの壺の底部（51）がある。201壁溝から出土した甕の底部（52）は庄内式併行期と思われるが、他の出土遺物から帰属時期は、布留式併行期前半と考えられる。

竪穴建物３（遺構248）　竪穴建物２から継続する建物と考えられる。竪穴建物2とほぼ同位置で、東側へ約0.2m、北側へ0.12m、南側へ0.15m拡張している。検出時の平面規模は、東西約4.8m、南北約4.85mのほぼ正方形の隅丸方形を呈する。炉及び貯蔵穴はそのまま使用したと思われ、他に検出できなかった。主柱穴は、東側の２本については新たに0.4～0.5m東寄りに移動している。柱間は東西方向2.55～2.7m、南北方向は竪穴建物２と同じである。遺物は、明らかに竪穴建物３として取り上げられたものはないが、検出状況からも竪穴建物２の遺物として取り上げたものに当建物の遺物が混在している可能性が考えられる。帰属時期は、竪穴建物２よりも新しい。

竪穴建物４（遺構181）（図46）　平面形状は隅丸方形を呈し、規模は東辺3.95mを測り、南辺は土層確認から約5.0mを測る。従って東西に長い長方形となる。残存の深さは0.25mを測る。出土遺物は土器細片が微量で、貯蔵穴（遺構183）から砂岩製の砥石が出土した。建物の帰属時期は重複関係から判断して、竪穴建物２・３より後出する時期で、布留式併行期前半で納まるものと思われる。

竪穴建物５（遺構111）（図46）　南側は若干現有水路で欠損していた。規模は東辺約5.0m、南辺4.5m以上を測る。形状は隅丸長方形を呈しており、残存の深さは約0.25mを測る。建物内には幅約2.0m、高さ0.08mの黄褐色系シルトを貼土したベッド状遺構が巡る。主柱穴は４本で、柱間は約2.5mを測る。建物の中央には173炉が築かれ、規模は0.35m×0.45mの楕円形を呈し、深さは約0.06mと極端に浅いものであった。建物の埋土は２層に分層でき、上層はにぶい黄褐シルトで、下層は暗灰黄シルトが水平堆積する。当該建物は、竪穴建物４を拡張して建替えた可能性が高い。当該建物跡から甕（54・55）、砂岩製の石皿（56）が出土した。石皿は床面に据え置かれた状態で出土した。帰属時期は布留式併行期前半と考えられる。

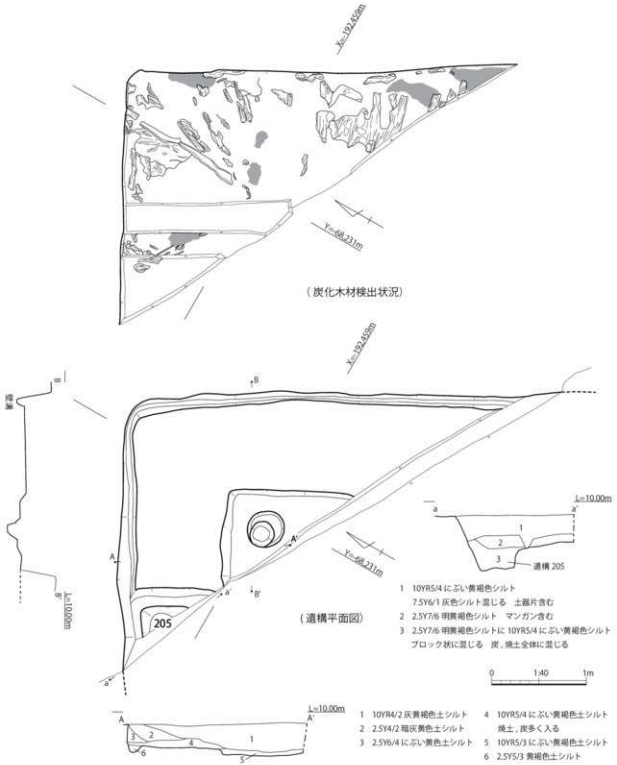


図 23　竪穴建物 6(遺構118) 実測図

竪穴建物６（遺構118）（図23、写真図版13）　１－１区の東側で検出した焼失家屋である。建物の南側の殆どは現有水路で撹乱されて全容は不明である。平面形は方形を呈し、規模は東西長2.7m以上、南北長4.1m以上を測る。残存の深さは0.24～0.35mを測る。建物内の周りには、地山掘り残しのベッド状遺構が約0.9mの幅で巡り、高さは約0.06mを測る。埋土は上層に灰黄褐シルトが0.25m内外の厚さで堆積し、床面直情の埋土には炭片や焼土が混ざる厚み0.04～0.08mのに

ぶい黄褐シルトが堆積する。また、この層の上面には炭化して細片となった建築部材が一面に出土した。壁溝は、幅0.14m、深さ0.08mを測り、埋土は明黄褐シルトの単一層である。主柱穴はベッド状遺構北西の内側で１基のみ検出した。主柱穴の位置から４本柱と推測できる。建物西辺のほぼ中央と思われる位置で貯蔵穴と考えられる205土坑を西壁に接し検出した。この土坑は南半部が撹乱されていたため全容は不明で、検出状況から一辺0.55mの正方形と考えられ、深さは約0.2mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は明黄褐シルトに炭片や焼土が混ざる。遺物は一定量の土器破片が出土したが、図示できるものがなかった。帰属時期については一概には言えないが隣接する竪穴建物５と方向が酷似していることなどから布留式併行期前半と考えられる。

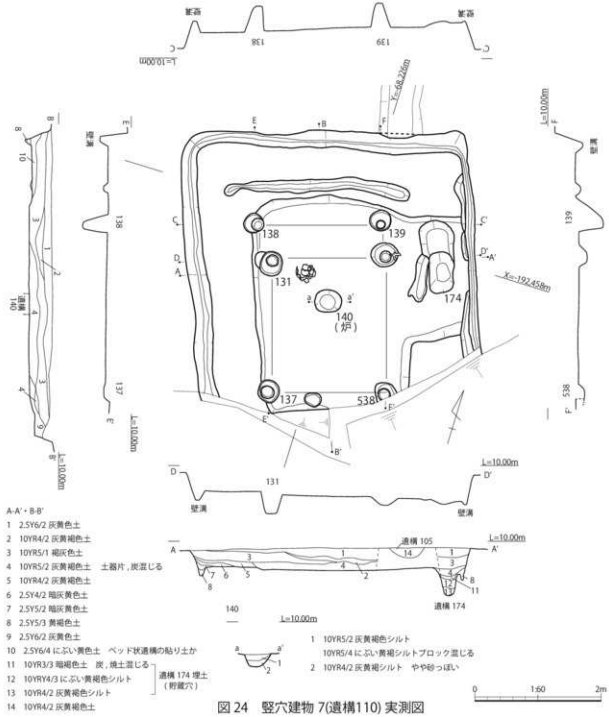


図 24　竪穴建物 7(遺構110) 実測図

竪穴建物7（遺構110）（図24・46、写真図版14）　１－１区の南東隅で検出した。この建物の南側は、調査区外となり全容は把握できなかった。確認した規模は、東西4.5m、南北4.5m以上を測る。埋土は灰黄や灰黄褐のシルトが薄くレンズ状に堆積する。建物の壁の内側には幅0.10～0.14m、深さ0.08～0.15mの壁溝が巡り、壁溝の内側には東側の一部を除き幅0.8～0.9mの地山掘り残しのベッド状遺構が巡る。ベッド状遺構の高さは0.03～0.04mと非常に低い。主柱穴はベッド状遺構の内側に接して位置する。掘形の規模は、直径0.32mの円形を呈する。柱間は東西方向で約2.0m、南北方向で約2.7mを測る。この主柱穴の柱間距離から推し量るに、建物の平面形状はやや南北に長い長方形を呈すると思われる。炉は中央に位置し、直径0.42mの円形を呈する。深さは0.18mを測り、灰黄褐色系の埋土が上・下２層に分層できる。また、建物の東壁内側のベッド状遺構が切れた北側で、貯蔵穴と思われる土坑（遺構174）を検出した。平面形状は長楕円形を呈し、東西方向0.40m、南北方向0.65m、深さは約0.3mを測る。埋土は３層に分層でき、上層の暗褐シルトには炭や焼土が混ざる。この建物跡からは甕（57）、高坏（61・62）、小型丸底土器（58）、台付鉢（60）の小型の鉢（59）が出土している。竪穴建物の帰属時期は庄内式併行期後半から布留式併行期初頭と考えられる。

竪穴建物８（遺構375）（図25、写真図版14）　２－１区の東端で検出した建物である。この建物の北側は自然流路と重複し不明である。形状は、南側の残存状況から隅丸方形を呈するものと思われ、規模は東西長4.4m、南北長3.2m以上を測る。残存の深さは0.15mを測り、埋土はにぶい黄橙色のシルトが２層水平堆積を成す。主柱穴は４本と思われ、そのうちの２本を遺存している南側で検出した。掘形の規模は0.35m～0.50mの円形を呈し、深さは約0.30mを測る。間尺は東西約1.70mを測る。473炉は建物の中央に位置すると思われ、0.50m×0.55mのほぼ円形を呈

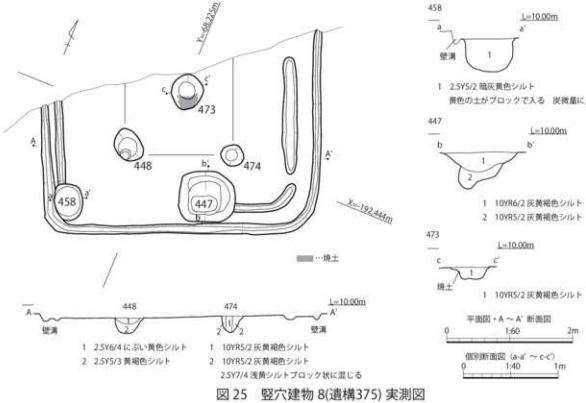


図 25　竪穴建物 8(遺構375) 実測図

し、深さは0.12mを測る。埋土は灰黄褐シルトの単一層で、肩際には焼けた面が遺存する。貯蔵穴は、南西隅458貯蔵穴と南壁ほど中央447貯蔵穴の２箇所で検出した。458貯蔵穴は0.45m×0.60mの南北に長い楕円形で、断面形状は袋状を呈する。深さは約0.35mを測り、埋土は暗灰黄シルトの単一層である。447貯蔵穴は0.8m×0.9mの東西に長い楕円形で、断面は２段落ちとなる。深さは0.4mを測り、埋土は、段を境に色調差のある灰黄褐シルトが堆積する。壁溝の幅は0.14～0.18m、深さ0.06mを測る。更に、壁溝の内側で壁溝と考えられる遺構を検出した。この遺構は、２基の貯蔵穴と重複し、貯蔵穴が後出している状況から本建物は建て替えがなされた可能性が大きい。遺物は、古墳時代と考えられる土師器の細片が少量出土したに留まり図示できるものはなかった。

竪穴建物９・10（遺構116・372）（図26、写真図版15）　１－１区及び２－１区の東端で検出した建物２棟である。これらの建物は重複し、竪穴建物9の方が後出する。また、竪穴建物10は北側でも369土坑と重複し、369土坑の方が後出する。

竪穴建物９（遺構116）（図46）　平面形状は隅丸方形を呈し、規模は東西長4.05m、南北長4.0mのほぼ正方形を呈する。残存の深さは、0.11～0.16mを測る。埋土は水平堆積を成し、２層に分層できる。主柱穴は４本で、掘形の直径は0.35mを測る。間尺は東西長1.65m、南北長1.45mを測る。141炉は中央よりやや東寄りに設けられ、平面形状は楕円形で、規模は0.32×0.37mを測る。深さは0.05mを測り、底は被熱し変色している。171貯蔵穴は、建物の南西隅の壁に接して設けられ、南北に長い楕円形を呈する。規模は0.65×0.80mで、深さは0.18mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は黄灰褐シルトの単一層である。壁溝は貯蔵穴の箇所以外は壁に接して巡る。出土遺物には甕（63～67）、高坏（69～71）、小型丸底土器（68）がある。建物の帰属時期は布留式併行期初頭から前半と考えられる。

竪穴建物10（遺構372）（図47）　規模は東西方向約6.7m、南北方向約6.9mを測り、形状は隅丸方形を呈する。壁溝は幅0.13m、深さ0.05mを測り、南壁に掛かる貯蔵穴の範囲で途切れるが、それ以外では巡っており、埋土はにぶい黄褐シルトの単一層である。残存の深さは0.09～0.11mを測る。ベッド状遺構は高さ0.1m、幅は東側では約0.9m、西側では約2.0mを測る。主柱穴は４本で、間尺は3.4～3.5mを測る。掘形は直径0.3～0.45mのほぼ円形を呈し、深さは0.35～0.50mを測り、柱当たりの直径は0.15mである。457炉は建物の中央に設けられ、約0.6m×0.8mの楕円形を呈し、深さは0.17mを測る。炉の埋土は、にぶい黄褐シルトの単一層である。180貯蔵穴は南壁に接して設けられ、平面形状は長方形を呈し、東西長0.95m、南北長0.70mを測る。深さは最も深い中央部で約0.4mを測り、埋土はレンズ状に灰黄褐シルトが３層堆積する。遺物は甕（72～74）、壺（75）、椀形高坏（76）、製塩土器底部（77）が出土している。叩石（78）は先端に敲打痕が認められる。建物の帰属時期は庄内式併行期後半から布留式併行期初頭と考えられる。

竪穴建物11（遺構400）（図47）　２-１区の北東隅で検出した。調査区内に僅かにかかり、遺構の殆どが調査区外に延びる。建物を検出した位置から竪穴建物14・15と重複していたと考えられるが、調査区内では前後関係が確認できなかった。建物の南壁中央と判断できる位置の約2.0mの長さを検出した。南壁から約1.1m内側には0.03mの段が付き低くなることから、ベッド状遺構が巡るものと思われる。残存の深さは0.18mを測り、埋土は上下に２層の水平堆積を呈する。上層の１層は厚み0.04mのにぶい黄褐シルトで、下層の２層は厚み約0.14mのにぶい黄橙シルトで

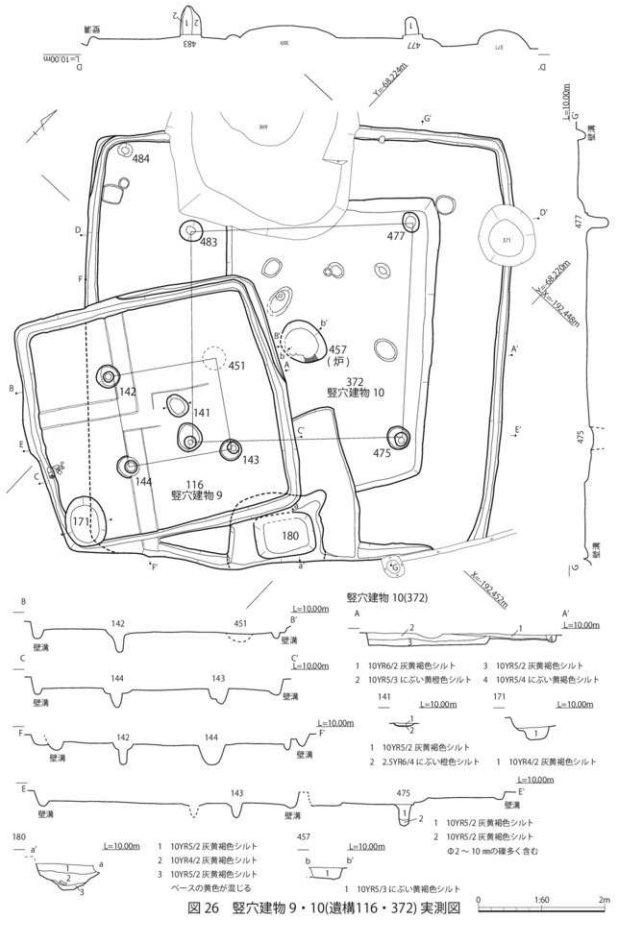


図 26　竪穴建物 9・10(遺構116・372) 実測図

ある。壁溝の幅は0.2～0.26m、深さは0.18mを測り、埋土はにぶい黄褐シルトである。遺物は、甕あるいは鉢などの底部（79・80）が出土した。帰属時期は、庄内式併行期と思われる。

竪穴建物12（遺構234）（図47）　1－2区の南西隅で検出した。建物の殆どは調査区外に延び、僅かに建物の1.2m分の北壁を検出したに留まった。竪穴建物と判断できたのは、壁溝が認められたためであった。主柱穴及び貯蔵穴や炉などの床面上の遺構は調査区外である。図示できた出土遺物には広口壺（81）の口縁から胴部上半の破片があるが、帰属時期はこの1点だけでは判断し難い。

竪穴建物13～16（遺構365・440・366・367）（図27・28、写真図版17～19）　竪穴建物13～16は2－2区の西端で検出した。建物の新旧関係は、重複状況から古い順に竪穴建物16、15、14となり、13は14及び15と重複していないため新旧関係は不明であるが、出土遺物から13と15は間隔から並立して建っていたのではないが、庄内新段階から布留古段階の遺物が出土しているためほぼ時期差のないものと思われる。

竪穴建物13（遺構365）（図47）　規模は、6.45m×6.15mで、平面形状はほぼ正方形を呈する。壁溝の内側には旧の2条の壁溝が巡り、2回の建替えが行われたと考えられる。残存の深さは0.38～0.46mを測り、埋土（1～3層）は灰黄褐シルトとにぶい黄橙シルトがレンズ状の堆積を呈する。埋土（1～3層）下の床面には厚み0.04mの浅黄シルトで貼床（6層）が施される。また、壁溝から内側にベッド状遺構を1.0～1.1mの幅で構築し、厚さ0.1～0.14mの黄橙色系シルトの貼土が施される。主柱穴はベッド状遺構の内側で3本検出した。配置状況から4本柱と考えられる。これら柱穴の掘形は直径0.45～0.6mの円形である。深さは0.4～0.65mを測り、柱当たりは直径0.2m内外の円形を呈する。柱穴の埋土は、柱当たりが灰黄シルトで、側はにぶい黄橙シルトである。また、2方の間尺は2.5mと3.15mを測り、かなりの差がある。建物の平面形状はほぼ正方形であるのに対し、主柱穴は長方形となる。382炉は4本の主柱穴のほぼ中央に位置し、形状は0.65m×0.72mの若干楕円形を呈し、深さは0.06mと浅い。また、埋土は黄色系のシルトで、肩口の底面は赤く焼けており、炭片が認められる。貯蔵穴は南壁の中央部に設けられ、規模は1.08m×1.32mのやや東西方向に長い長方形を呈し、深さは0.6mを測る。埋土はレンズ状の堆積を呈し、5層に分層できる。また、断面形状は側面が階段状となる。貯蔵穴の両サイドには壁溝から直角に溝が延び、間仕切りとして板材等を立てていたと推測される。なお、この建物は2回の拡張に伴う建替えを行っているが、旧の主柱穴は他に検出できないことから、当初の位置を踏襲しているものと考えられる。旧の炉の位置もほぼ同位置で検出した。遺物は壺（82～86）、甕（87～89）、高杯（90）、器台（91）が出土している。建物の帰属時期は、庄内式併行期後半～布留式併行期初頭と思われる。

竪穴建物14（遺構440）（図47）　竪穴建物15（遺構366）及び竪穴建物16（遺構367）と重複し、この2棟の建物より後出する。検出したのは東側の一部分で、西側の殆どは調査区外へと延びる。規模は東西長1.0m以上、南北長5.2m以上を測る。残存の深さは約0.3mを測り、3層に分層できる黄色系のシルトが水平堆積を成す。遺物は甕（92）、壺（93）、鉢の底部破片（94・95）が出土した。（95）は焼成後底部に円孔を穿つ。この内（92・94・95）は貯蔵穴と考えられる遺構533から出土した。帰属時期は布留式併行期前半と考えられる。

竪穴建物15（遺構366）（図47・48）　西側は調査区外に延び、全体の約1/3を検出したに留まっ

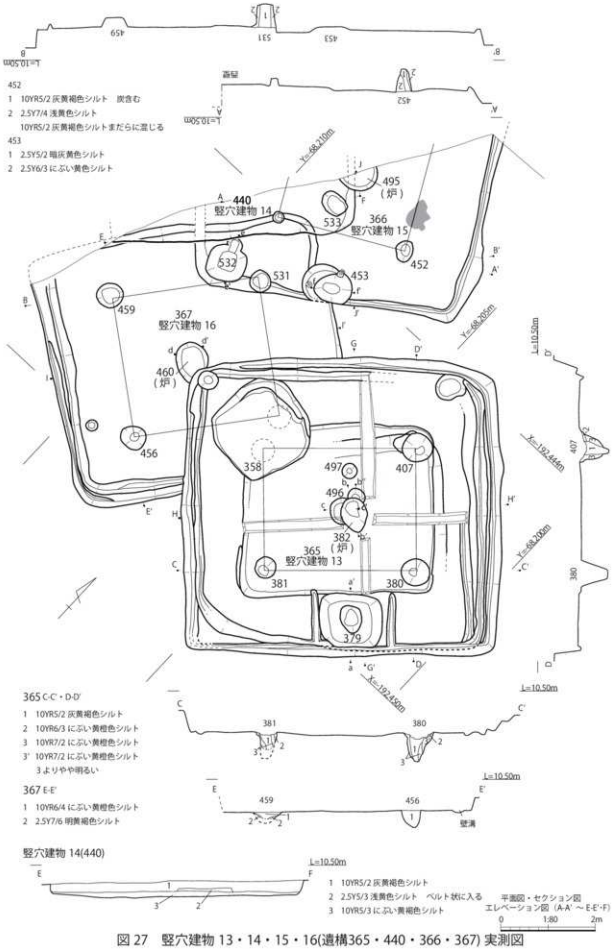


図 27　竪穴建物 13・14・15・16(遺構365・440・366・367) 実測図

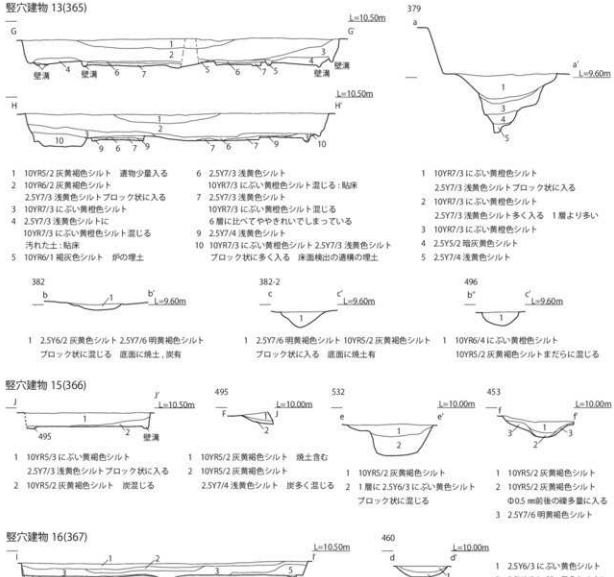


図 28　竪穴建物 13・14・15・16(遺構365・440・366・367) 土層断面図

た。検出した規模は東西長約4.0m以上、南北長約6.0mを測る。残存の深さは0.3mをはかり、埋土は２層に分層でき、埋土の殆どを占める上層の１層には、にぶい黄褐シルトに浅黄シルトのブロックが混入する土が入る。下層の２層は、炭混じりの灰黄褐シルトが床面直上に堆積し、壁溝付近の床面には火を受けた痕跡が確認された。主柱穴は遺存している２本の柱穴の位置から４本柱と考えられ、掘形は直径0.45mのほぼ円形を呈し、深さは約0.5mを測る。また、柱穴の柱当たりの埋土には炭の細粒が混ざる。検出した２本の柱穴の間尺は2.75mを測る。495炉は全体の約1/2の検出に留まったが、建物の中心に位置すると思われ、直径約0.8mの円形ないしは楕円形と復元できる。深さは中心で0.17mを測り、埋土には灰黄褐シルトが堆積し、上部には焼土、下部には炭片が多量に混じる。532貯蔵穴は南西のコーナー部で検出した。規模は0.8m×0.8mの

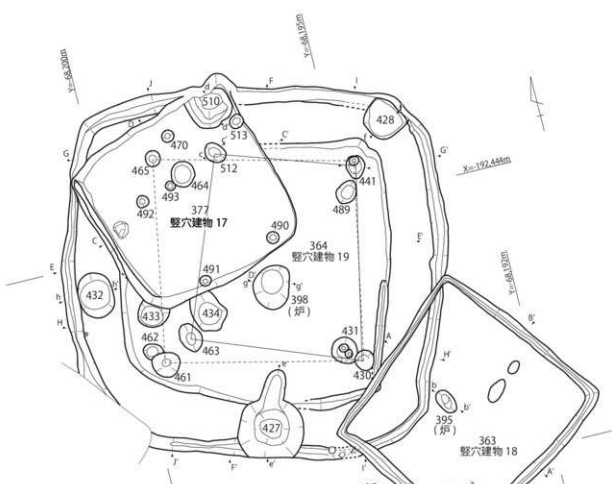
正方形を呈し、深さは0.33mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は２層に分層できるが、全体的に灰黄褐シルトの堆積となる。また、東壁の中央部において土坑（遺構453）を検出した。規模は0.7m×1.0mで、深さは0.17mを測る。底の２層には、灰黄褐シルトに混じり0.5㎜前後の礫が多量に入る。この遺構も貯蔵穴と考えられる土坑であるが少し浅い感がある。壁溝は幅0.12～0.17m、深さ0.05m前後で２基の貯蔵穴の範囲以外を巡る。この建物は、埋土の２層の状況や床面の状況から焼失家屋の可能性も考えられる。この建物跡からは壺（96～98・100・101・104）、甕（99・102・103）、高杯（105・106）、鉢（107・108）が出土した。帰属時期は庄内式併行期後半～布留式併行期初頭と考えられる。

竪穴建物16（遺構367）（図48）　４棟重複している建物で最も古いものである。平面形状はやや南北に長い隅丸方形を呈し、規模は約6.1m×5.7mを測る。残存の深さは0.25～0.3mを測り、埋土はレンズ状の堆積を呈し、炉の周辺の床面直上には0.01～0.03mの厚みで４層が堆積する。主柱穴は３本（遺構531・456・459）を検出した。これらの配置状況から主柱穴は４本柱と考えられる。他の１本は中世の358井戸の底で変色している範囲の痕跡を確認した。柱穴の掘形の規模は直径0.45～0.55mの円形を呈し、深さは約0.5mを測るが、遺構459は0.15mと極端に浅い。間尺は東西3.0m、南北3.15mを測る。460炉は建物の中央に設置し、平面形状は楕円形を呈し、規模は0.68m×0.55mを測る。深さは中央部で0.12mを測り、埋土はにぶい黄シルトが基本となるが、２層とした下層には多量の炭片と少量の焼土が混ざる。なお、貯蔵穴は確認できなかった。壁溝は0.1～0.18mの幅で南側のコーナー部で確認できが、建物の壁から内側約0.2mの箇所で幅0.16～0.24mの溝が更に１条巡る。このことから、主柱穴と炉の位置を踏襲した拡張に伴う建替えを行っていると考えられる。遺物は壺（110～113）、把手（114）が出土している。（113）はミニチュア壺である。把手（114）は壺になる可能性がある。建物の帰属時期は、大きな時期枠ではあるが庄内式併行期の範疇であると考えられる。

竪穴建物17～19（遺構377・363・364）（図29・30、写真図版19～21）　２－２区の西側で検出した３棟の竪穴建物である。竪穴建物19（遺構364）上に竪穴建物17（遺構377）と竪穴建物18（遺構363）が重複する。従って、竪穴建物17と竪穴建物18は竪穴建物19より後出する。

竪穴建物17（遺構377）（図48）　竪穴建物19の北側で重複して検出した建物である。平面形状は隅丸方形を呈し、規模は東西、南北ともに3.85mを測る。残存の深さは0.28～0.32mを測り、埋土は４層に細分でき、水平堆積を成す。上層の１・２層はにぶい黄褐シルトで、下層の３・４層は灰黄褐シルトが堆積する。主柱穴は検出できなかった。遺構464炉は床面の中央からやや北寄りに設けられ、直径約0.48mのほぼ円形を呈する。深さは0.08mを測り、埋土は灰黄褐シルトの単一層が堆積する。510貯蔵穴は北側のコーナー部に設けられ、平面形状は丸みを帯びた方形を呈し、北壁に取付く。規模は東西長0.9m、南北長約0.7mで、深さは約0.3mを測る。断面形状は逆台形を呈し、レンズ状に堆積した埋土が４層に分層できる。遺物は二重口縁壺（115）、甕（116）、有稜高杯（117）、鉢（118・119・121）、製塩土器（120）が出土した。帰属時期は布留式併行期前半である。

竪穴建物18（遺構363）（図48）　平面形状はほぼ正方形を呈し、規模は東西長4.1m、南北長約4.0mを測る。残存の深さは0.06～0.09mを測り、にぶい黄シルトが堆積する。395炉の位置は床面中央やや北に位置する。平面形状は楕円形を呈し、規模は0.35m×0.5m、深さは0.12mを測



竪穴建物 18(363)

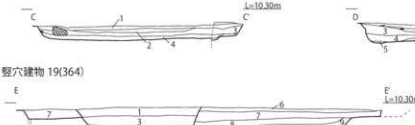
1 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト　3 10YR5/2 灰黄褐色シルト：遺構の埋土
2 2.5Y5/1 黄灰黄色シルト　4 2.5Y7/6 明黄褐色シルト

1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
2 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト

1 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト

竪穴建物 17(377)

竪穴建物 19(364)



C-C' ～ F-F'
1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
炭微量混じる
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト　土器片多く含む
4 10YR5/2 灰黄褐色シルト
2.5Y7/3 浅黄色シルトブロック状に入る
5 2.5Y7/6 明黄褐色シルト
6 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
7 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
8 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
9 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
2.5Y7/3 浅黄色シルトブロック状に入る

平面図・断面図（A-A'～F-F'）
0　1:80　2m

図 29　竪穴建物 17・18・19(遺構377・363・364) 実測図

る。埋土ははにぶい褐シルトの単一層である。南のコーナー部には388貯蔵穴が設けられ、平面形状は楕円形を呈し、規模は0.55m×0.95m、深さは約0.3mを測る。埋土は上、下層の2層に分層できるが、全体がにぶい黄褐シルトが堆積する。壁溝は貯蔵穴の範囲以外に巡り、幅は0.13～0.23m、深さは0.04～0.08mを測り、埋土は暗灰黄シルトが堆積する。なお、主柱穴は不明である。遺物は壺（124）、甕（122・125・126）、高坏（123）がある。石製品では緑色凝灰岩製の管玉（127）、泥岩製砥石（128）、砂岩製の叩石（129）が出土した。叩石（129）には敲打痕が残る。（122・128・129）は388貯蔵穴から出土した。建物の帰属時期は布留式併行期前半と考えられる。

竪穴建物19（遺構364）（図48・49）　西側で検出した竪穴建物13（遺構365）と重複し、竪穴建物13の方が後出する。平面形状は隅丸方形である。規模は東西長8.15m、南北長約7.9mを測る大

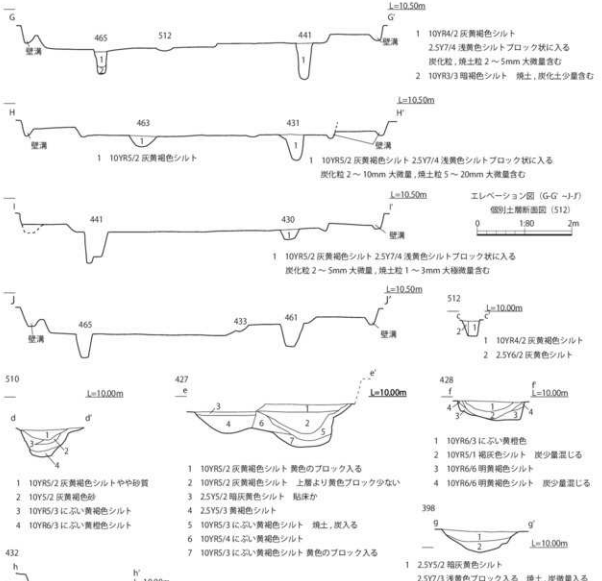
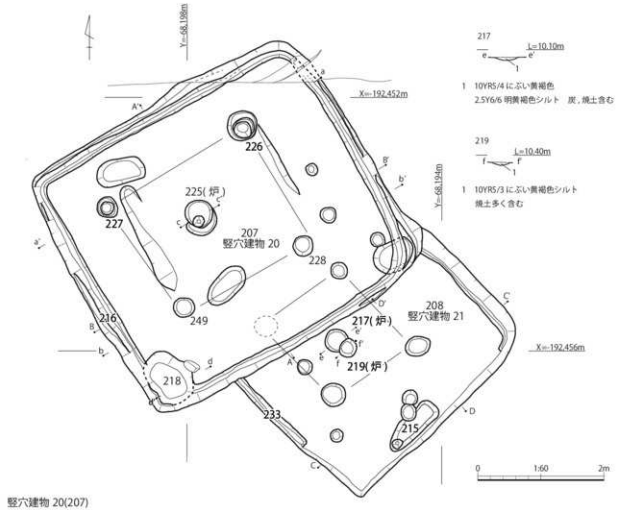


図 30　竪穴建物 17・18・19(遺構377・363・364) 土層断面図

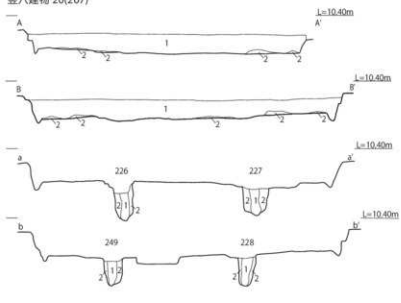
型建物である。残存の深さは0.4～0.45mを測り、埋土は４層に細分でき、上層の６・７層はにぶい黄橙シルト、下層の８・９層はにぶい黄褐シルトが水平堆積を成す。また、四周の壁の内側には、幅約0.8mの地山掘残しのベッド状遺構が巡り、高さは0.12～0.16mを測る。398炉は床面のほぼ中央に位置し、平面形状は0.72m×0.92mの楕円形を呈し、深さは0.22mを測る。埋土の下層（２層）には炭と焼土が多量に入る。主柱穴は４本で、整然とした配置ではないが、ベッド状遺構の内側に設けられている。東西方向（遺構441－遺構465）の柱間は約4.2m、南北方向（遺構465－遺構461）の柱間は約4.4mを測り、深さは0.8～1.0mを測る。柱穴の埋土は灰黄褐シルトに炭と焼土が混ざる。貯蔵穴と考えられる土坑を壁の内側に接して３基（遺構427・428・432）検出した。南壁中央で検出した遺構427は、一辺1.35mの方形を呈し、北側に舌状の掘込み（３・４層）が延びている。埋土はレンズ状の堆積を成し、５層とした層には黄褐シルトに焼土及び炭が混ざる。北東コーナー部の壁に接して検出した遺構428は、一辺約0.7mの正方形を呈し、深さは0.2mを測る。埋土はレンズ状に堆積し２層と４層には少量の炭が混ざる。西壁中央部の壁溝内側で検出した遺構432は、0.72m×0.92mの楕円形を呈し、深さは0.6mを測る。断面形状は四角形を呈し、埋土は全体的に灰黄褐シルトであるが、１・２層とした上層には焼土及び炭が混ざる。この遺構432は、３基検出した貯蔵穴と考えられる土坑の中では最もそれらしい形状を成している。壁溝は１条で、遺構427・428の２基の範囲以外を幅0.3m、深さ約0.1mで巡る。竪穴建物19は、柱穴や貯蔵穴の埋土に炭や焼土が混入していることや、柱穴を10基以上、貯蔵穴と思われる土坑を３基検出した状況から判断して焼失による建替えの可能性が大きい。また、壁溝や炉については１条あるいは1基で、建替えの痕跡がないことから、位置を踏襲して同規模の建替えを行ったと思われる。遺物は広口壺（130）、甕（131・133）、鉢（132・134・135）、高杯（136～138）、器台（139・140）が出土した。この内、土坑（遺構427）からは（138・135・140）が出土している。建物の帰属時期は布留式併行期初頭と考えられる。

竪穴建物20（遺構207）（図31・49、写真図版21）　１－２区の西寄りで検出した。竪穴建物21（遺構208）と重複し、当該建物の方が後出する。平面形状は隅丸方形を呈し、規模は東西長約4.9m、南北長約4.5mの長方形となる。残存の深さは0.25～0.3mを測り、埋土は、にぶい黄褐シルトがほぼ床面まで堆積し、床面直上には部分的ににぶい黄橙シルトが薄く堆積する。壁溝は0.18～0.27mの幅でほぼ全周する。深さは0.07～0.09mを測る。また、埋土は建物の堆積土と同じである。225炉は、やや中央から北西に寄ったところに位置し、平面形状は直径約0.40mの円形を呈する。深さは0.07mで、埋土は２層に分層でき、上層はにぶい黄シルト、下層は焼土や炭化物が混ざるにぶい黄シルトである。主柱穴は４本で、直径約0.5mの円形である。柱間は東西2.0～2.5m、南北2.0mで、深さは0.45～0.6mを測る。柱当たりの埋土には黄褐シルトに黄橙シルトがブロック状に混ざる。218貯蔵穴は、南西隅で壁に接して検出した。規模は南北約0.9m、東西約0.75mを測り、楕円形を呈する。深さは0.22～0.27mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は全体的に褐灰シルトで、壁の中位から底にかけての２層には土器片を含み、灰白シルトが混ざる。遺物は壺（141・142）、甕（143）、鉢（146・147）、高坏（144・145）、叩石（148）が出土している。帰属時期は布留式併行期初頭と考えられる。

竪穴建物21（遺構208）（図31・49、写真図版21・22）　竪穴建物20（遺構207）と重複する建物である。北側の約１/３は竪穴建物20と重複しているため不明である。規模は東西3.9m、南北2.9



竪穴建物 20(207)



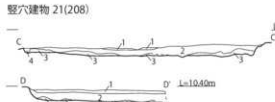
A-A'・B-B'
1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック状に混じる
2 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト

a-a'・b-b'
1 2.5Y5/4 黄褐色シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルト,
2.5Y7/4 浅黄色シルトブロック状に混じる
2 2.5Y5/4 黄褐色シルト

1 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト
2 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト
2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 炭化物, 焼土含む

1 10YR4/1 褐灰シルト 土器片含む
2 10YR4/1 褐灰シルト
7.5Y7/2 灰白シルト 土器含む

竪穴建物 21(208)



C-C'・D-D'
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト 炭, 焼土混じる
2 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック状に混じる
3 10YR7/4 黄橙色シルト
4 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック状に混じる

図 31　竪穴建物 20・21(遺構207・208) 実測図

m以上を測る。残存の深さは、0.1～0.2mを測り、埋土は3層に分層できる。1層の灰黄褐シルトには炭片や焼土が混ざり、2層はにぶい黄橙シルトが厚く堆積し、3層は黄橙シルトが建物の壁から流れ込むような堆積を成す。炉の位置から、形状はほぼ正方形を呈するものと思われる。建物の中央辺りに炉を2基（217・219）検出した。造り替えと考えられる。217炉（古）は直径0.38mの円形で、深さは0.04mを測る。219炉（新）は、直径0.3mの円形で、深さは約0.3mを測る。主柱穴は4本と思われ、掘形は直径約0.35mの円形を呈する。柱間は東西1.5m、南北1.65mを測る。遺物は、竪穴建物の埋土から古墳時代と思われる少量の土師器の破片が出土している他、215貯蔵穴から椀形高坏（149）が出土した。帰属時期は、竪穴建物20より先行することから庄内式併行期後半と考えられる。

竪穴建物22～27（遺構378・386・389・392・391・397）（図32・33、写真図版22～25） 2－2区の中央西寄りの北側で検出した6棟の建物で、それぞれが重複する関係にある。

竪穴建物22（遺構378）（図49） 西側で3棟重複した建物の中で最も後出するものである。平面形状は方形を呈し、規模は東西長5.4m、南北長5.65mを測る。残存の深さは0.32～0.42mを測り、埋土は黄褐色系のシルトが4層に分層できる。3層には炭片や焼土が少量混ざり、4層とした床面直上の埋土には多量の炭片が混じり、焼失家屋であることが窺われる。主柱穴は4本で、掘形の規模は0.5～0.6mの円形ないしは長方形を呈する。深さは0.32～0.35mを測り、403柱穴の埋土には炭片や焼土が混ざる。柱間は全て約4.3mを測り、ほぼ正方形を成す。402炉は床面のやや西側に位置し、直径0.5mの円形を呈す。深さは0.08mを測り、埋土はレンズ状に2層が堆積する。上層の1層は、にぶい黄シルトに炭片が少量混ざり、下層の2層は、厚み3ないし4㎝の炭層となる。床面は熱を受け赤色化する。405貯蔵穴は東壁中央部で検出した。規模は0.75m×1.5mの楕円形を呈し、深さは0.28mを測る。埋土は6層に分層でき、3～6㎝の厚さでレンズ状の堆積をする。上層の1・2層には炭片や焼土が少量混ざる。壁溝は幅0.2～0.3m、深さ0.07mで全周する。また、壁の内側0.3～0.4m隔てた位置で幅0.15m、深さ0.05mの溝を検出しており、前身の建物の壁溝と考えられる。このことから拡幅を伴う建替えが行われたと判断できる。範囲で、この建物の前身の建物に伴うと判断できる壁溝の一部を検出した。よって、この建物は、建替えが行われたものと考えられる。遺物は壺（150・153・155・156）、甕（154）、高杯（157～159）、器台（160）が出土した。また、床面から碧玉製の琴柱形石製品（161）が出土した。建物跡の帰属時期は、二重口縁壺（150）の庄内式併行期後半と考えられる遺物も出土しているが、全体の出土遺物から総合的に判断すると布留式併行期前半と考えられる。

竪穴建物23（遺構386） 竪穴建物22と24とに重複し、竪穴建物22より先行し、竪穴建物24より後出する。建物の殆どが竪穴建物22と重複しているため、全容は判然としない。平面形状は方形を呈し、規模は東西長4.65m、南北長4.1m以上を測る。残存の深さは0.2～0.25mを測り、埋土はにぶい黄橙シルトである。494貯蔵穴は東壁の中央部で検出した。形状は0.55m×0.7mの南北方向に長い楕円形を呈し、深さは約0.3mを測る。埋土は灰黄褐シルトの単一層である。壁溝は南壁と西壁の一部は検出できたが、東壁については検出できなかった。また、北壁は竪穴建物22と重複しているため不明である。壁溝の幅は0.13～0.22m、深さは0.02～0.04mを測る。遺物は494貯蔵穴から土器片が出土している。帰属時期については建物の重複関係から竪穴建物22より以前と考えられる。

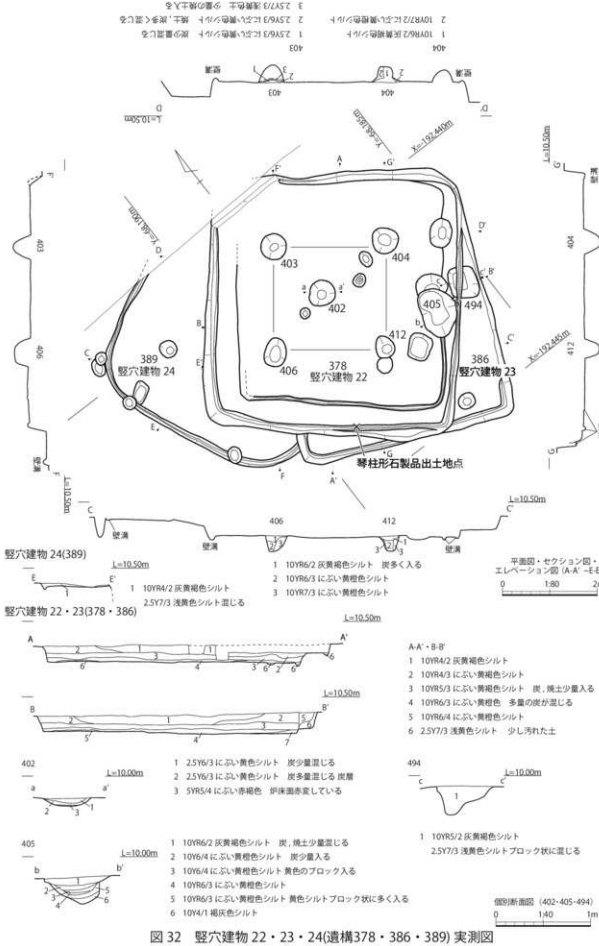


図 32　竪穴建物 22・23・24(遺構378・386・389) 実測図

竪穴建物24（遺構389）　大部分の範囲が竪穴建物22と重複し、北側は調査区外となっているため、全体の約1/3程度の範囲を検出したに留まった。平面形状は隅丸方形を呈し、規模は東西長約4.6m、南北長4.0m以上を測る。残存の深さは、0.02～0.06mとかなり浅い。埋土は床面上に灰黄褐シルトが薄く堆積する。なお壁溝の埋土も同一である。壁溝は検出した範囲の壁内に巡り、幅は0.1～0.2m、深さは0.04～0.08mを測る。床面上の西側で、主柱穴の１本と考えられる柱穴を

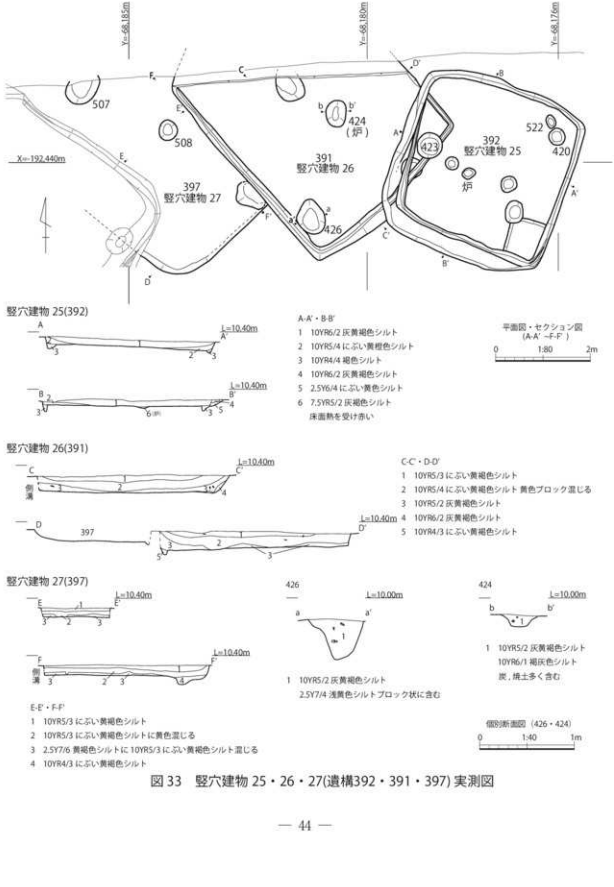


図 33　竪穴建物 25・26・27(遺構392・391・397) 実測図

検出した。掘形の規模は直径0.35m、深さ約0.4mを測る。この柱穴の位置から、主柱穴は４本と考えられる。炉や貯蔵穴は検出できなかった。遺物は、390壁溝から微量の土器片が出土しているのみで、図示できるものはない。帰属時期は建物の重複関係から竪穴建物22・23より以前である。

竪穴建物25（遺構392）（図49）　東側で３棟重複した建物で最も新しいものである。壁溝が２条あることや、南側の壁厚の外側0.4mに壁の立上がりが存在することから、建替えが行われていると判断できる。また、検出時及び掘削時には重複の新旧を明らかにできなかったが、南北土層から判断して内側の建物の方が新しいと言え、建物規模を縮小していることが窺える。内側の新しい方の規模は東西3.65m、南北3.5mで、外側の古い方の規模は東西3.65m、南北3.9mを測る。残存の深さは双方共に0.15mを測り、埋土はレンズ状の堆積を成す。炉はほぼ中央に位置し、直径約0.25m、深さは0.03mと小規模である。埋土は灰褐シルトで、底の面が被熱し赤く変色する。なお、炉の検出は１基のみであったので旧の建物の炉を踏襲したものと考えられる。また、床面では６基の柱穴を検出したが、位置関係から主柱穴とは考え難い。新しい建物に伴う壁溝は幅0.1～0.18m、深さ0.08～0.12mで全周するが、古い建物に伴う壁溝は、北壁と東壁は新しい建物と共有するが、南壁と西壁の一部については検出できなかった。遺物は製塩土器の脚部（162・163）、砂岩製の石杵（164）が出土した。帰属時期は、竪穴建物26との重複関係や製塩土器の特徴から布留式併行期前半以降と考えられる。

竪穴建物26（遺構391）（図49）　竪穴建物25と重複し、建物25より先行する建物である。規模は東西長4.05m、南北長4.8m以上を測り、平面形状は長方形を呈する。残存の深さは0.3～0.35mを測り、埋土は黄褐色系のシルトがレンズ状の堆積を成し、大きく３層に分層できる。424炉は床面中央からやや南寄りに位置し、平面形状は0.38m×0.54mの楕円形を呈し、深さは0.12mを測る。また、埋土には炭や焼土を多量に含む。壁溝は幅0.2～0.3mを測り、建物を確認した範囲で検出した。貯蔵穴と思われる土坑（遺構426）を南のコーナー部で検出した。形状は0.6m×0.7mのやや楕円形を呈し、深さは0.42mを測る。埋土は、土器片を含む灰黄褐シルトの単一層である。柱穴は検出できなかった。遺物は壺（165・167）、甕（166）、製塩土器（168）が出土している。甕（166）は424炉から出土した。この建物の帰属時期は、布留式併行期前半と考えられる。

竪穴建物27（遺構397）　竪穴建物22と26とに重複し、この両者より先行する。規模は東西長2.5m以上、南北長1.05m以上を測る。残存の深さは0.22mを測り、埋土は黄褐色系のシルトが３層に分層でき、水平堆積を成す。508炉は直径約0.4mの円形を呈する。また、貯蔵穴は建物の南壁に接する509土坑と北壁に近接した位置に設けられていたと推測できる507土坑が考えられる。なお、主柱穴は検出できなかった。遺物は図示できるものはなかった。帰属時期は、竪穴建物26との重複関係から布留式併行期前半以前と考えられる。

竪穴建物28（遺構209）（図34・50、写真図版25）　１－２区中央南端で検出した隅丸方形の建物である。この建物は竪穴建物29（遺構68）や67溝と重複し、67溝より後出し、竪穴建物29に先行する。遺構検出時に重複関係が不明瞭で、先に67溝を掘削した為、67溝と重複する範囲は不明である。規模は、一辺約4.2mの正方形を呈する。残存の深さは0.35～0.38mを測る。埋土は３層に水平堆積を成し、何れも灰黄褐シルトで中層と下層には土器片を含む。貯蔵穴は北東隅に設け

られ、平面形状は長楕円形を呈し、規模は0.4m×0.7mを測る。壁溝は全周し、幅は0.1～0.2m、深さ0.05～0.08mを測る。遺物は直口壺（169）、広口壺（170・174・175）、二重口縁壺（171～173・176～178）などの壺類、甕（185～189）、（180）は底部に横からの穿孔を施している。蓋の可能性もある。小型丸底土器の系譜を引く鉢（190～192）、椀形高坏（193）が出土している。他に、（179）は壺の底部と思われる。帰属時期は庄内式併行期から布留式併行期と考えられる。

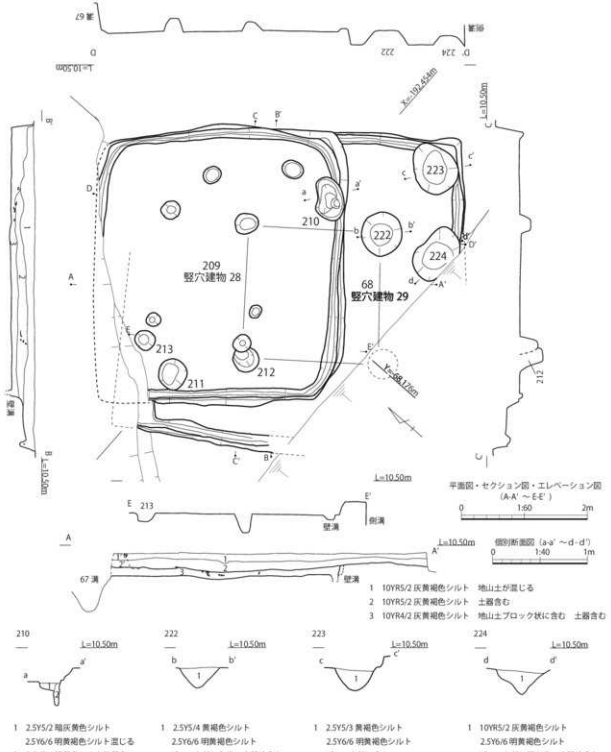


図34　竪穴建物 28・29(遺構209・68) 実測図

竪穴建物29（遺構68）（図34・50、写真図版25）　竪穴建物28（遺構209）と重複し、竪穴建物28より後出する建物である。竪穴建物28と重複することで全容は不明である。規模は、一辺約4.8mを測る。残存の深さは0.14～0.30mを測る。埋土は、灰黄褐系シルトが２層に分層できる。建物内の北東隅には貯蔵穴と考えられる楕円形の223・224土坑が壁に接して２基設けられ、223土坑は東西長0.62m、南北長0.95m、深さは0.32mを測る。埋土は、黄褐シルトの単一層である。224土坑は東西長0.72m、南北長0.9m、深さは0.36mを測る。埋土は、灰黄褐シルトの単一層である。主柱穴は４本と考えられ、竪穴建物28の床面で２基、当該建物の床面で１基（222柱穴）を検出した。222柱穴の規模は0.62m×0.72m、深さ0.5mを測り、埋土は黄褐シルトの単一層である。壁溝の幅は0.12～0.18mで、深さは0.05～0.08mを測る。出土遺物は、調査時に竪穴建物28との重複が不明であったため１棟の竪穴建物として掘り進めていたため竪穴建物28の遺物として取り上げた。このため、当該竪穴建物からの出土した確実な遺物は広口壺（174）１点のみである。帰属時期は竪穴建物28より後出するが、出土遺物から竪穴建物28とほぼ時期差のないものと思われる。

竪穴建物30（遺構409）（図35）　２堀と重複しているため全容は不明で、検出したのは建物の西側の一部分だけである。平面規模は東西長1.2m以上、南北長約3.0mを測る。壁溝は、検出した範囲であるが、北西のコーナー部以外は幅0.15mで巡る。なお、この建物に付随する主柱穴、炉、貯蔵穴は不明である。出土遺物は細片が微量であった為、帰属時期を判断するには至らなかった。

竪穴建物31（遺構221）（図36・50、写真図版26）

１－２区の中央東寄りで検出した竪穴建物である。上面で検出した２堀と重複しているため全容は不明である。東壁と北壁の一部を検出しただけで、北東隅部の形状から、隅丸方形を呈するものと思われる。規模は東西方向1.6m以上、南北方向4.0m以上を測る。残存の深さは約0.3mを測り、埋土は明～暗の黄色系シルトが上・下に水平堆積を成す。また、この建物の内側に沿うように当該建物以外の壁

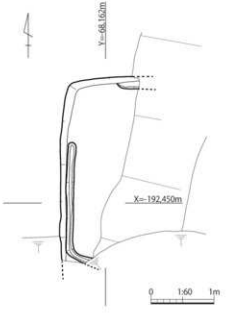


図 35　竪穴建物 30(409) 実測図

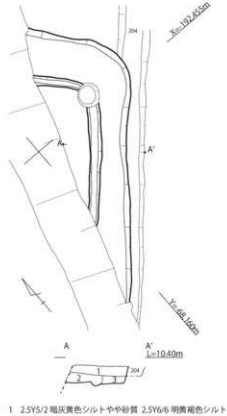


図 36　竪穴建物 31(遺構221) 実測図

溝と考えられる幅約0.2m、深さ約0.08mの溝を検出した。規模は東西方向1.0m以上、南北方向2.2m以上を測る。建て替えの可能性も考えられるが、外側の建物に伴う壁溝が不明である。なお、この建物に付随する炉や貯蔵穴等の施設も不明である。ただ、北東隅部内で検出した柱穴が外側の建物に伴うものと考えられる。遺物は有稜高坏（194）、小型丸底土器（195）が出土した。建物の帰属時期は、布留式併行期前半と考えられる。

竪穴建物32（遺構413）
（図37、写真図版26）

竪穴建物33の南約６mの地点で検出した竪穴建物である。南側半部は中世の２堀と重複しているため全容は不明である。壁溝が二重に巡るため建替えの可能性が考えられ、検出状況から外側の建物の方が後出する。外側の建物の平面形状は隅丸方形で、規模は東西長約4.3m、南北長3.0m以上を測る。残存の深さは、0.03～0.06mと非常に浅く、埋土はにぶい黄シルトが水平堆積する。主柱穴（520・521）は４本と

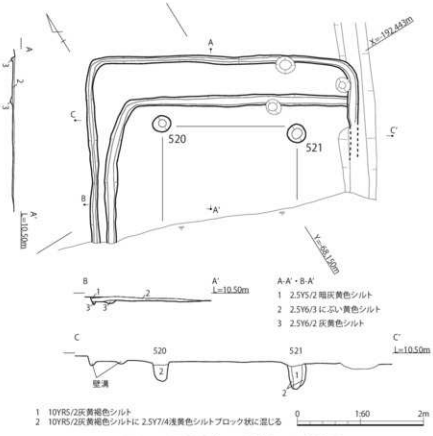


図 37　竪穴建物 32(遺構413) 実測図

図 38　竪穴建物 33(遺構394) 実測図

考えられ、掘形は直径約0.3mの円形を呈し、深さは0.32～0.4mを測る。ただし、これらの柱穴は外側の建物に伴うもので、内側の建物に伴う主柱穴は不明である。外側の建物の壁溝は幅0.08～0.12m、深さは0.05mを測る。内側の建物は壁溝のみの遺存で、壁溝の規模は東西長4.0m以上、南北長2.3m以上で、幅0.12～0.2m、深さ0.05mを測る。また、これらの建物に付随する炉や貯蔵穴は不明である。遺物は古墳時代の土師器片が少量出土したに留まり、図示できる遺物はなかった。

竪穴建物33（遺構394）（図38、写真図版26） 2－2区の北側東寄りで検出した建物である。竪穴建物の北側半部は調査区外のため不明である。平面形状は隅丸方形を呈すると思われ、規模は東西長3.0m、南北長3.0m以上の小振りである。残存の深さは、0.06～0.08mを測り、黄色系の埋土が水平堆積を成す。537炉はほぼ中央に構築され直径約0.4mの円形と考えられ、深さは0.08mを測る。埋土は黄褐シルトの単一層である。南壁のほぼ中央には半円形の502貯蔵穴が取付き、規模は0.8m×0.44mで、深さは0.15mを測る。壁溝は貯蔵穴の範囲を除いて、幅約0.1m、深さ0.08m内外の深さで巡ると思われる。なお、主柱穴は精査を行った結果、検出することができなかった。故に、主柱穴は床面に構築されない竪穴建物と考えられる。出土遺物の状況は、竪穴建物32と同様に、古墳時代の土師器片が少量出土したが図示できるものはなく、帰属時期は不明である。

遺構443 竪穴建物11の西側で検出した遺構443は竪穴建物の可能性が十分考えられる遺構である。竪穴建物とすると、建物の南側の一部を検出したことになり、規模は東西長2.5m以上、南北長0.8m以上を測る。平面形状は、南西隅の形状から判断して隅丸方形と思われる。残存の深さは、0.25mを測る。壁溝の幅は0.15～0.22m、深さは0.14mを測る。なお、検出した範囲では、主柱穴等の附随施設は確認することができなかった。出土遺物は皆無であった。

214土坑（図40、写真図版27） 1－2区の西側で検出した土坑で、竪穴建物20（遺構207）と僅かに重複し、本遺構の方が古い。平面形状は長方形を呈し、規模は東西長2.0m、南北長0.94mを測る。残存の深さは0.05～0.08mと浅く、底は若干凸凹している。埋土は黄褐シルトの単一層である。遺物は古墳時代と考えられる土師器細片が少量出土した。

230土坑（図39、写真図版27） 1－2区のほぼ中央で検出した土坑である。2堀と重複しているため東側は不明である。2堀の方が後出する。規模は東西長2.5m以上、南北長約2.4mを測る。残存の深さは0.34mを測り、断面形状は舟底状を呈し、両肩は斜め上方に直線的に立ち上がる。底は比較的平らである。埋土の堆積状況は、両肩から底に掛けて、厚み0.02～0.04m

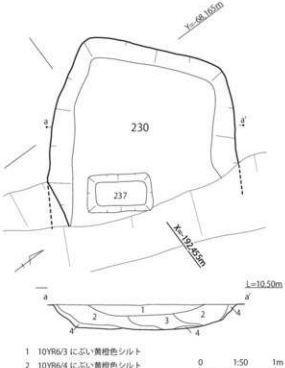


図 39　230 土坑実測図

のにぶい黄橙シルトが堆積し、その後、にぶい黄橙シルトが北から順に堆積していったような状況を呈する。遺物は古墳時代の土師器片と壁土と思われる土塊が数片出土している。

368土坑（図40、写真図版27）　2－2区の中央西寄りで検出した土坑である。平面形状は長楕円形を呈し、主軸は北西から南東である。規模は長軸1.45m、短軸0.65mを測り、残存の深さは0.06～0.08mと極端に浅い。底面は平らで、側壁は斜め上方に直線的に立上る。埋土はレンズ上の体積を成し、2層に分層できる。上層は灰黄褐シルト、下層は上層の埋土に浅黄シルトがブロック状に入る。この土坑は、周辺の竪穴建物と軸を同じくすることから、竪穴建物に関連する遺構の可能性があると思われる。遺物は細片ではあるが、古墳時代に帰属すると考えられる土器片が数十片出土したが、図示のできるものはなかった。

369土坑（図40・50・51、写真図版15）　竪穴建物10（遺構372）と重複する土坑である。竪穴建物10より新しい。平面形状はほぼ正方形を呈し、規模は1辺2.8～2.9mを測る。残存の深さは、最も深い北側で約0.9mを測る。断面形状は舟底状を呈し、北側の肩は直線的にやや垂直気味に立ち上がり、南側は緩く斜め上方に立ち上がる。埋土はレンズ状の堆積を呈し、大きく上（1層）・中（2～11層）・下（12～15層）の3層に分けられ、この層位で遺物を取り上げた。上層は厚み約0.3mの灰黄褐シルトで、土器の細片を含む。中層は0.03～0.15mの厚みの層が互層に堆積し、細かい炭片および焼土塊を含み、一定量の土器片も出土した。下層は黄色系の埋土で、最下層の15層のみが砂質の土質を呈する。遺物は多量の遺物が出土し、壺（196～206）、甕（209・210・212・213）、鉢（211・218・220～221）、高坏（223～226）がある。壺には広口壺（206）、二重口縁壺（197～202）、直口壺（196・205）がある。二重口縁壺は、口縁部側面に加飾を施し、垂下させている。大鉢（218）もある。（220）は鉢状の形態を呈する。（219）は蓋状の器形を呈し、扁平な器壁に2孔を穿つ。（227）は端部を打ち欠いた叩石状の石製品である。以上の出土遺物から、この土坑の帰属時期は、庄内式併行期後半から布留式併行期前半と考えられる。

371土坑（図51、写真図版15）　竪穴建物10の北壁と重複し、本遺構のほうが後出する。平面形状はほぼ円形を呈し、規模は南北0.9m×東西1.0mを測る。残存の深さは中心の最も深い箇所で0.15mを測る。埋土は2層に分層でき、上層は灰黄褐シルト、下層はにぶい黄橙シルトである。遺物は、古墳時代に帰属すると考えられる土器の細片が二十数片出土した。遺物はミニチュア土器の底部（228）が出土した。

384土坑（図40、写真図版27）　2－2区中央やや西寄りで検出した土坑である。平面形状はほぼ正方形を呈し、東西長2.1m、南北長2.15mを測る。残存の深さは0.47mを測り、断面形状は船底状を呈し、底は平坦である。埋土はレンズ状の堆積を呈し、3層に分層できる。埋土の2・3層にはブロック状に異種の土が混入し、人為的に埋められた可能性が高い。遺物は古墳時代の土師器片が少量出土したが図示できるものはない。

471・472溝（図42、写真図版28）　471・472溝は202自然流路の底で検出した。自然流路と方向性を一にするところから、自然流路形成時の初期の流路の一環として考えられる。

471溝（図51）　調査区中央やや東寄りで検出した溝状遺構である。南側は現有の用水路となり、これにより撹乱され不明である。北側は調査区外に延びている。検出できた長さは16.2m、幅は0.8～1.6m、残存の深さは0.16mを測る。断面形状は舟底状を呈し、埋土は鉄分と土器片を

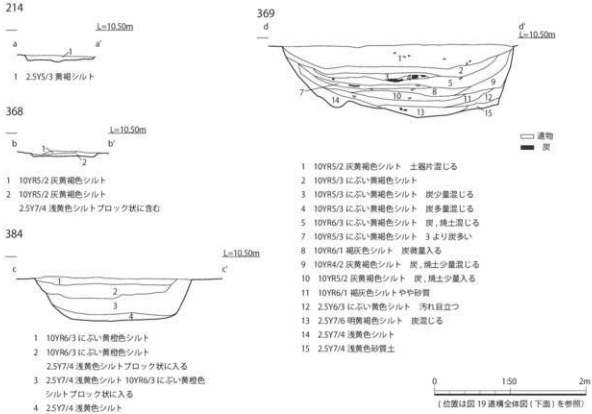


図40　214・368・369・384土坑土層断面図

多く含む灰黄シルトの単一層である。流れの方向は、底の標高から北東から南西に流れていたものと考えられる。遺物は須恵器の甕（230・231）、平底の底部が出土した。

472溝（図51）　471溝の西側に隣接して検出した溝状遺構で、この溝の方向性は、471溝と同一である。471溝と同様に南側は現有の水路で撹乱され、北側は調査区外に延びる。検出長は約14.0m、幅は0.8～2.0mを測り、断面形状は角の取れた逆三角形を呈し、残存の深さは中央の最も深い箇所で0.34mを測る。埋土は鉄分を多量に含む褐灰シルトの単一層である。遺物は壺の口縁端部（232）、甕の破片（233～235）、小型器台の脚部（236）、製塩土器（237）が出土した。帰属時期は庄内式併行期である。

75溝（図42）　1－1区の中央で現有水路を跨ぐ状況で検出した溝状遺構である。75溝状遺構は竪穴建物1と重複し、竪穴建物1の方が後出する。南側は調査区外に延びているため全容を把握できなかったが、現有水路の北側で検出した122溝と同一のものと思われる。検出長は約14.0m、幅は1.25m、残存の深さは最も深い箇所で0.3mを測る。埋土は浅黄シルトの単一層で、炭片や微細な土器片を僅かに含む。遺物は、土器の細片が1点だけ出土した。時期的には、重複関係から竪穴建物1より古い為、庄内式併行期前半に帰属すると考えられる。

376溝　2－2区の北西で検出した溝状遺構である。北側は調査区外に延びているため全容は不明である。竪穴建物17・19と重複する。平面図では当該溝の方が古い状況を呈しているが、376溝を掘削してから竪穴建物19を掘削した。よって、竪穴建物19の方が古い。検出長は6.0m、幅は0.5～0.65mで、残存の深さは0.08～0.12mを測る。底の標高から北から南へ流れていたものと

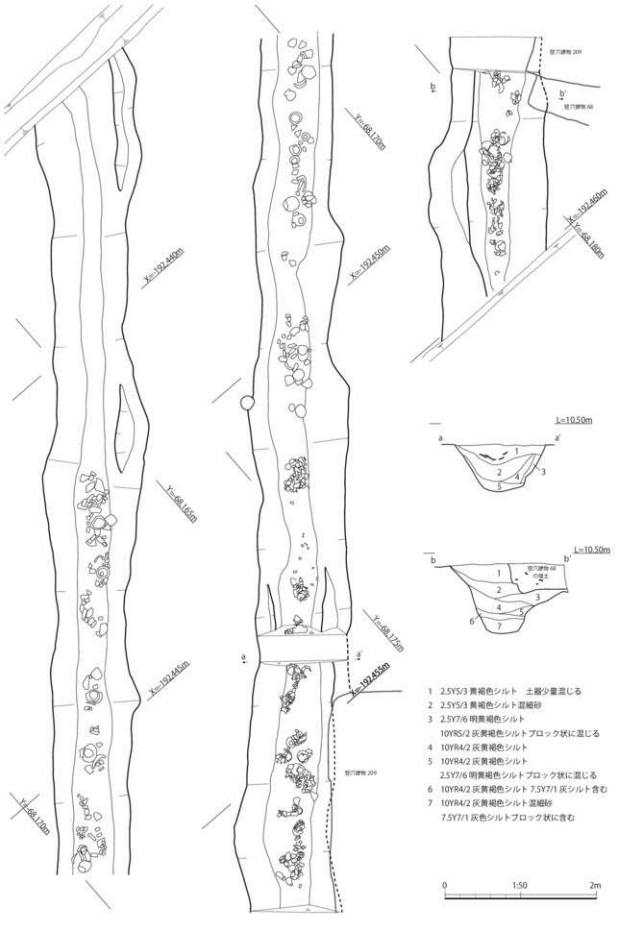
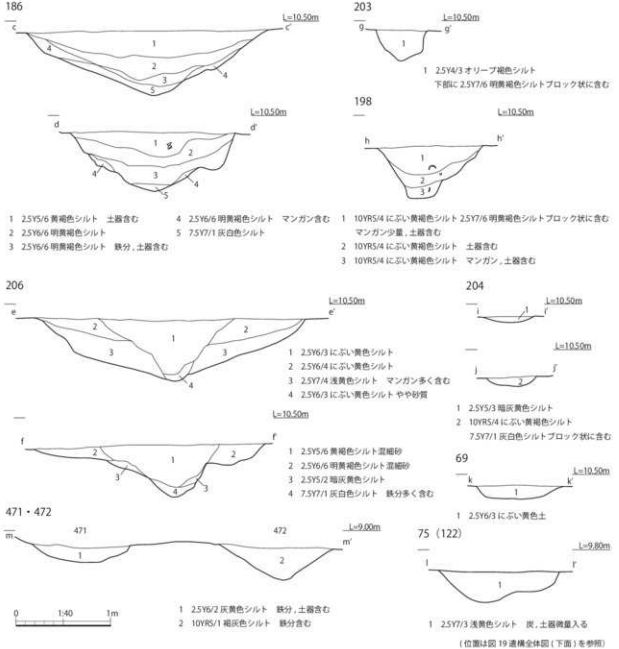

X=192.440m
Y=68.165m
Y=192.445m
Y=68.170m
X=192.450m
Y=68.170m
Y=68.175m
X=192.455m
X=192.460m
Y=68.180m
L=10.50m
L=10.50m
1 2.5Y5/3 黄褐色シルト　土器少量混じる
2 2.5Y5/3 黄褐色シルト混細砂
3 2.5Y7/6 明黄褐色シルト
10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック状に混じる
4 10YR4/2 灰黄褐色シルト
5 10YR4/2 灰黄褐色シルト
2.5Y7/6 明黄褐色シルトブロック状に混じる
6 10YR4/2 灰黄褐色シルト 7.5Y7/1 灰シルト含む
7 10YR4/2 灰黄褐色シルト混細砂
7.5Y7/1 灰色シルトブロック状に含む
0
1:50
2m

図 41　67 溝実測図

思われる。遺物は土師器の細片が数片出土したのみである。重複関係から竪穴建物17より先行する時期で布留式併行期前半より以降と考えられる。

69溝（図42）　２－２区から１－２区にかけて検出した溝状遺構である。南側は調査区外に延び、検出長は15.0m、幅は0.9～1.0mを測る。深さは0.15～0.18mで、底の標高から北から南へ流れていたものと思われる。断面形状は逆台形状を呈し、埋土はにぶい黄シルトの単一層である。

67溝（図41・52・53、写真図版28・29）　調査区の東側で検出した溝状遺構である。北東から南西方向に流れていたと考えられる。検出状況は、２棟（竪穴建物28・29）の竪穴建物と重複し、竪穴建物より古い。検出長は約30mを測り、北と南は調査区の外に延びている。幅は1.2～1.5m、残存の深さは0.9mを測る。断面形状は、逆台形あるいは「Ｖ」字状に近い形状を呈する。



（位置は図 19 遺構全体図（下面）を参照）

図 42　弥生時代～古墳時代の溝土層断面図

埋土は細かく７層に分層できるが、基本的に上・下層の２層に分かれる。上層（１～３層）は黄褐シルト、下層（４～７）は灰黄褐シルトに明黄褐や灰のシルトがブロック状に混ざる。この溝状遺構からは多量の遺物が出土し、とりわけ下層からの遺物が大半で、投棄された状態であった。下層の埋土には、ブロック状に土が混入していることから、投棄時には人為的に埋められた可能性が大きい。出土遺物には壺（238～252・262）、甕（254～261）、鉢（263～267・272）、高坏（268～271・273）がある。（252）の細頸壺の口縁部は沈線の加飾を行っている。（253・266）は有孔鉢である。甕は、弥生甕（254～258）の系統のものが多く見受けられ、高杯（270）は弥生時代後期末から庄内式併行期前半に帰属するものと考えられる。

204溝（図42、写真図版31）　調査区東端で検出した溝状遺構６条の最も西側の遺構である。検出長は約23.0ｍを測り、北側は途中で終息する。竪穴建物２棟（竪穴建物31・32）と重複し、何れも竪穴建物の方が後出する。幅は0.5～0.7ｍ、残存の深さは0.08ｍと非常に浅い。埋土は暗褐黄の単一層である。出土遺物は皆無であった。

198溝（図42・54、写真図版31）　204溝の東側で検出した。調査区の北端から南端にかけて検出し、北と南は調査区外に延びる。幅は1.15～1.95ｍ、残存の深さは0.6ｍを測る。断面形状は逆台形気味となり、東肩

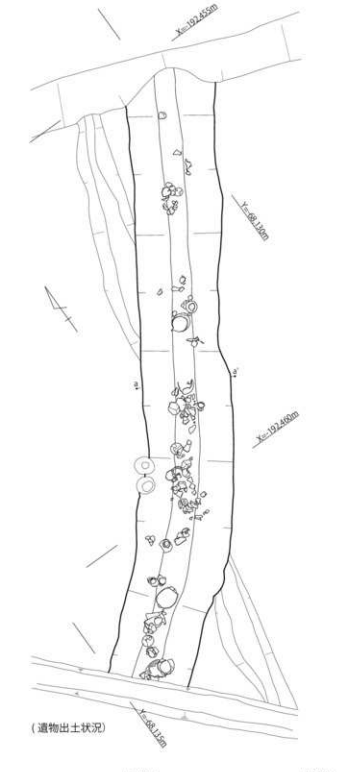


図 43　185 溝実測図

は斜め上方に真直ぐ立ち上がるが、西肩は二段落ちとなる。埋土は全体的に単一色のにぶい黄褐シルトであるが、質や土色、混入土の違いで3層に分層した。遺物は布留式併行期の多量の土器片が出土した。高坏（275・276）、壺（274・282）の他、（279～281）は布留式併行期後半の小型丸底土器である。（277）は土師器把手である。

206溝（図42、写真図版31）　198溝の西側で検出した溝状遺構である。198溝と同様に調査区の北端から南端まで約28.0mを検出した。幅は1.5～2.7m、残存の深さは0.55～0.65mを測る。両肩は2段落ちとなり、断面形は「U」字状となる。埋土は4層に分層でき、上層の3層は黄褐系の色調を呈するシルトで、最下層には灰白系の色調を呈するシルトがレンズ状に堆積する。遺物は少量で図示できるものはないが、サヌカイトの剥片が1片出土している。

186溝（図42・54、写真図版31）　206溝と2.0～4.4m隔てて東側で検出した溝状遺構である。調査区の北端から南端までの約23.0mを検出した。幅は1.7～2.5m、残存の深さは0.6～0.7mを測る。断面形状は緩い「V」字状を呈し、埋土はレンズ状に堆積する。堆積土は5層に分層できるが、1層から4層は、黄褐色系のシルトで若干の色調の差が生じる。最下層（5層）は、厚み5cm程度の灰白系のシルトが堆積する。出土遺物には壺（283～287）、甕（288～295）、鉢（301・302）、高坏（297～300）、手焙り型土器（296）がある。以上の出土遺物から、この溝の帰属時期は庄内式併行期後半と考えられる。小型丸底土器（287）はその形態から若干時期が下り布留式併行期初頭と思われる。

203溝（図42、写真図版31）　185溝と重複する溝状遺構である。185溝より古い。検出長は調査区の北から南までの約23.0mを測る。幅は0.4～0.6m、残存の深さは0.32mを測る。断面形状は「U」字状を呈し、埋土はオリーブ褐シルトの単一層である。出土遺物は細片が数片出土したのみで図示できるものはない。従って、当該遺構の帰属時期は、重複関係から185溝以前と考えられる。

185溝（図43・54・55、写真図版31）　調査区の東端で検出された溝状遺構で、186溝の東側に約4.5m隔てて平行に伸びる。調査区の北から南まで約23.0mを検出した。幅は1.1～1.2m、残存の深さは約0.5mを測る。断面形状は丸みのある「U」字状あるいは「V」字状を呈し、埋土はレンズ状に堆積し、4層に分層できる。上層にはオリーブ褐シルトが堆積し、下層にはにぶい黄シルトが堆積していた。出土遺物は比較的多く、壺（308～314）、甕（320・321・324～327）、鉢（305～307・323）、高坏（317～319）、（315・316）は小型丸底土器である。帰属時期は、出土遺物から庄内式併行期後半から布留式併行期前半と考えられる。

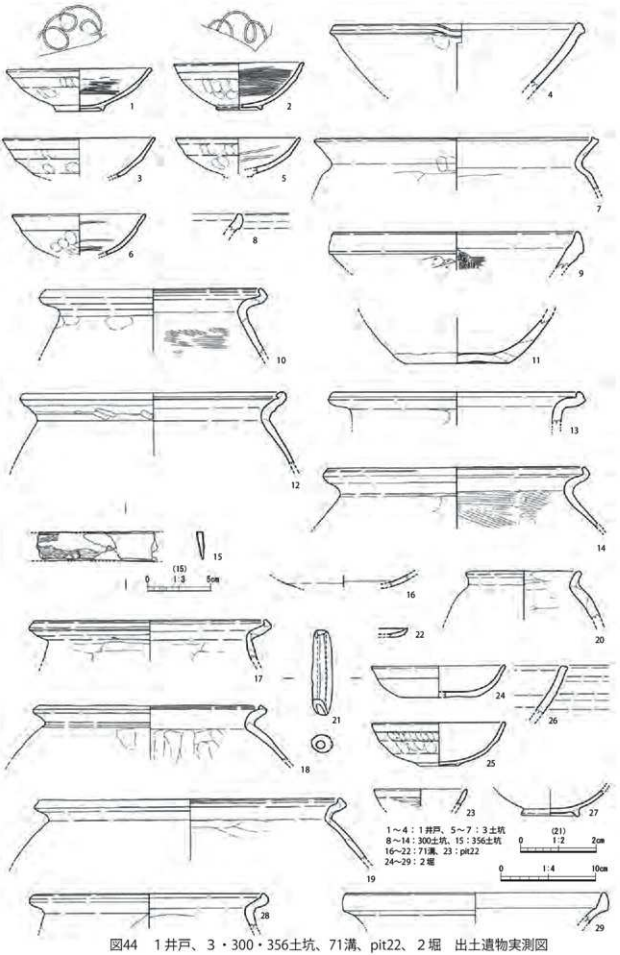


図44　1井戸、3・300・356土坑、71溝、pit22、2堀　出土遺物実測図

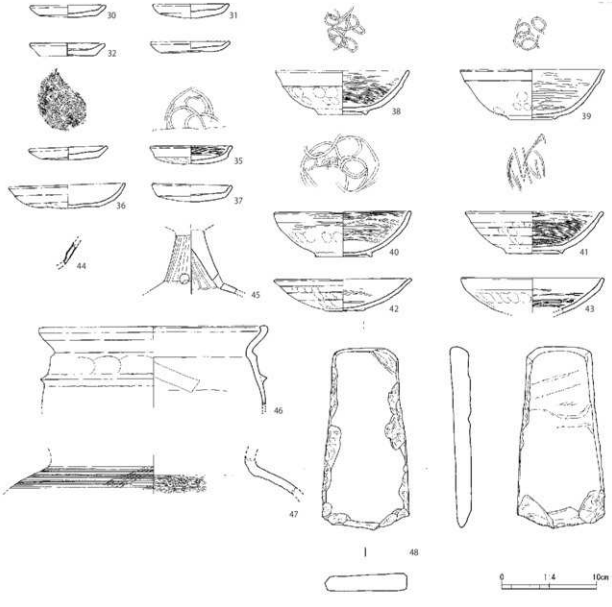


図45　202自然流路　出土遺物実測図

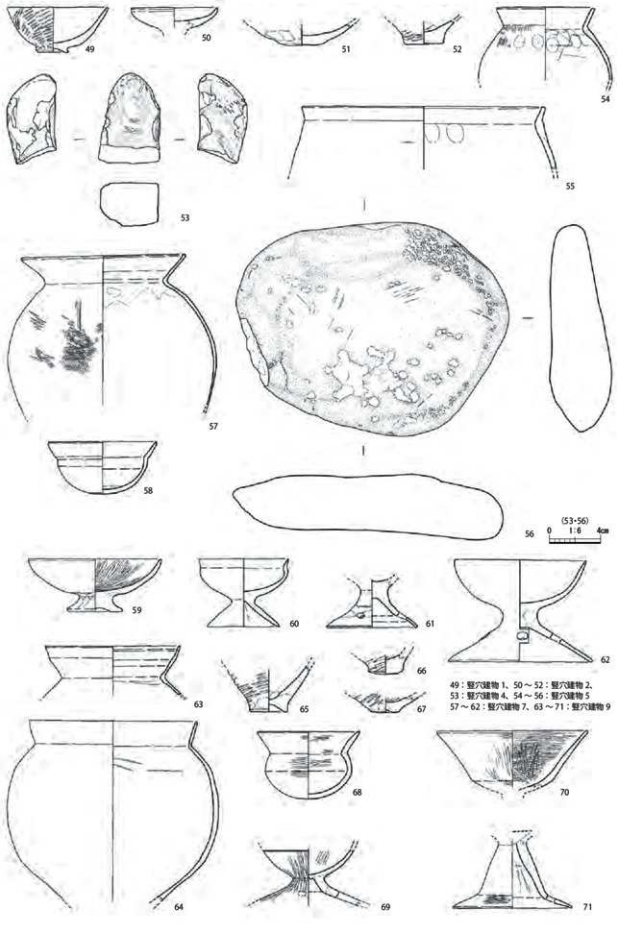


図 46　竪穴建物 1・2・4・5・7・9 出土遺物実測図

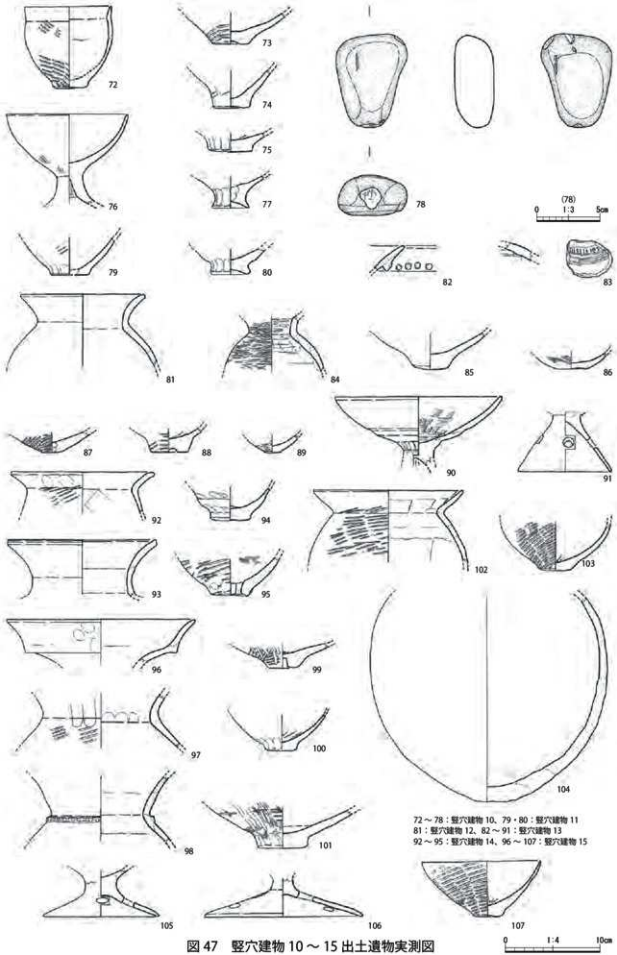
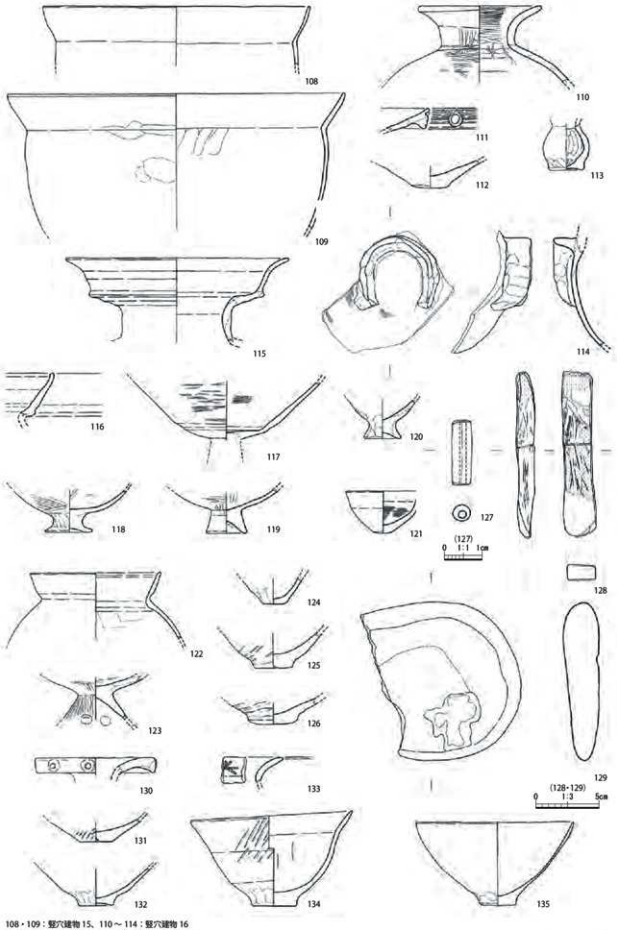


図 47　竪穴建物 10 ～ 15 出土遺物実測図



108・109：竪穴建物 15、110～114：竪穴建物 16
115～121：竪穴建物 17、122～129：竪穴建物 18
130～135：竪穴建物 19

図 48　竪穴建物 15 ～ 19 出土遺物実測図

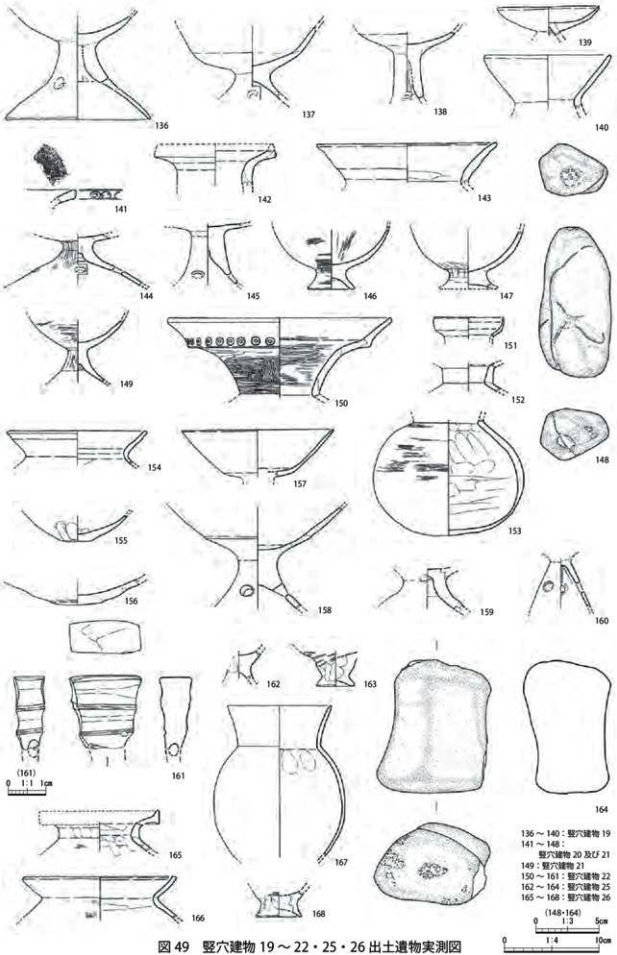


図 49　竪穴建物 19～22・25・26 出土遺物実測図

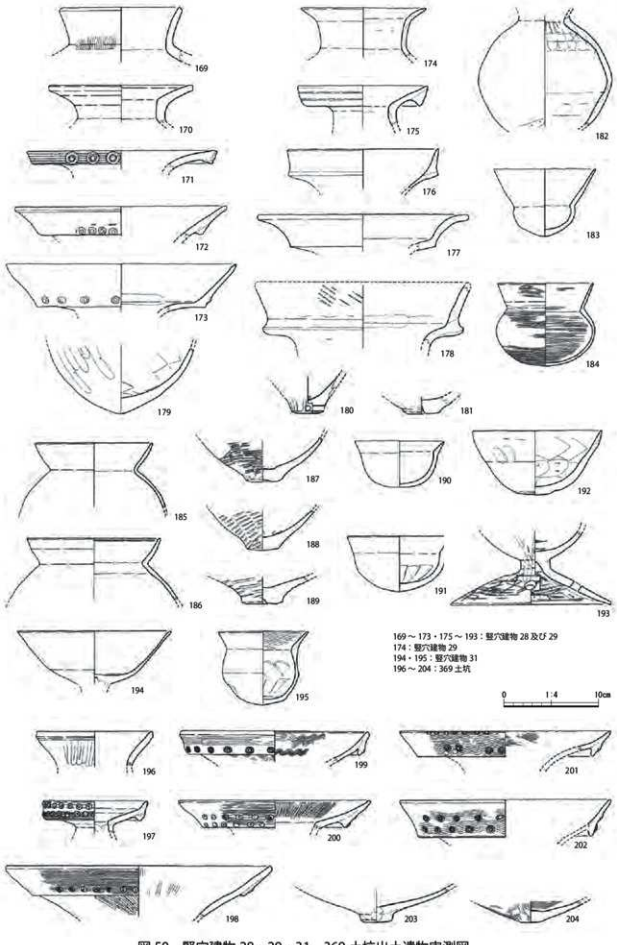


図 50　竪穴建物 28・29・31、369 土坑出土遺物実測図

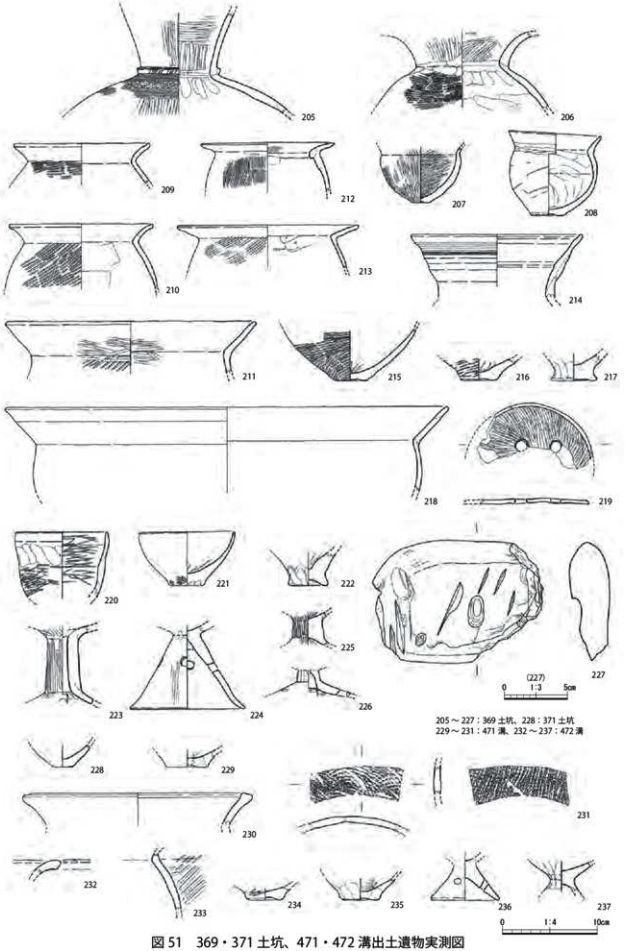


図51　369・371土坑、471・472溝出土遺物実測図

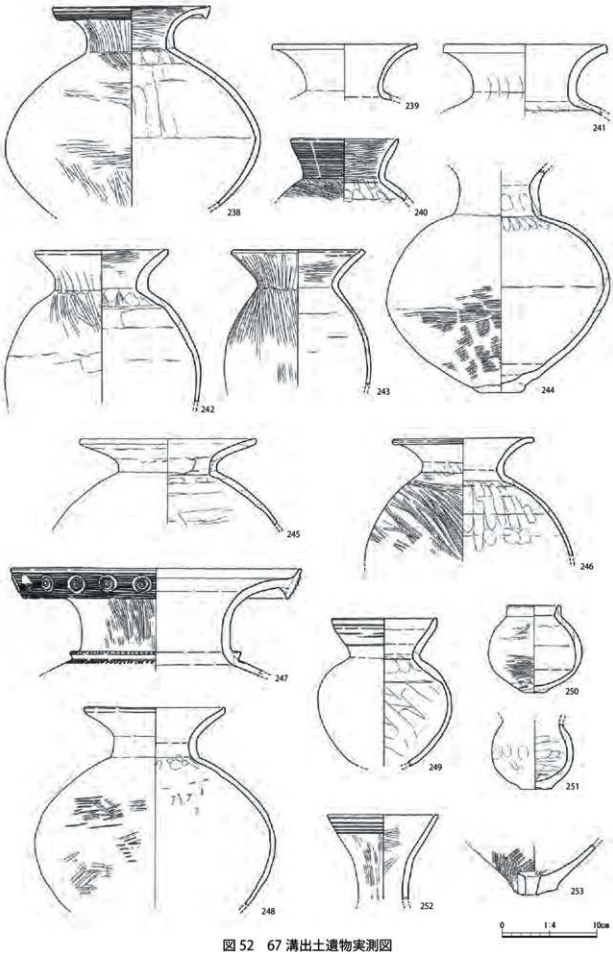


図 52　67 溝出土遺物実測図

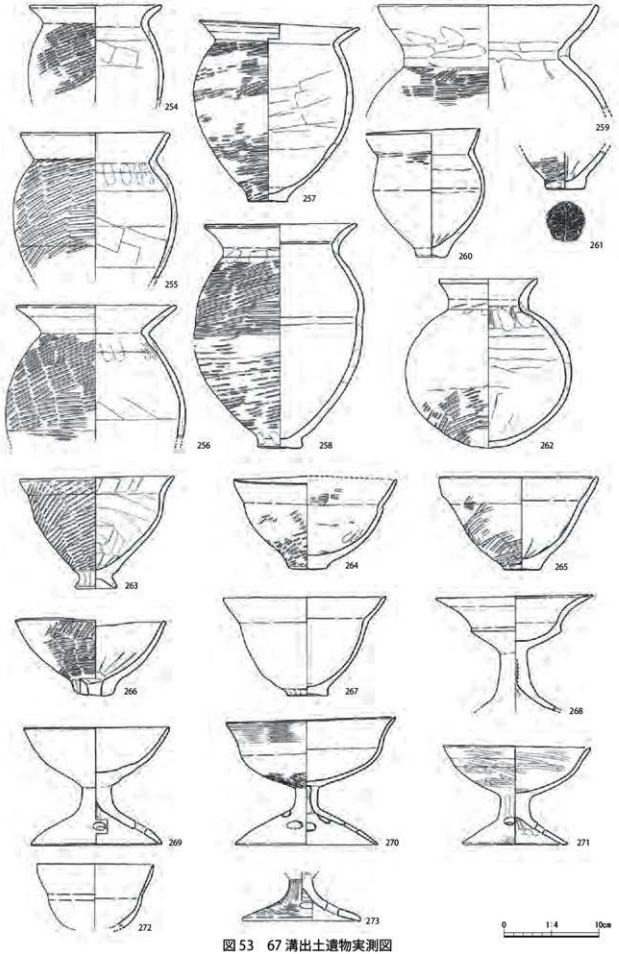
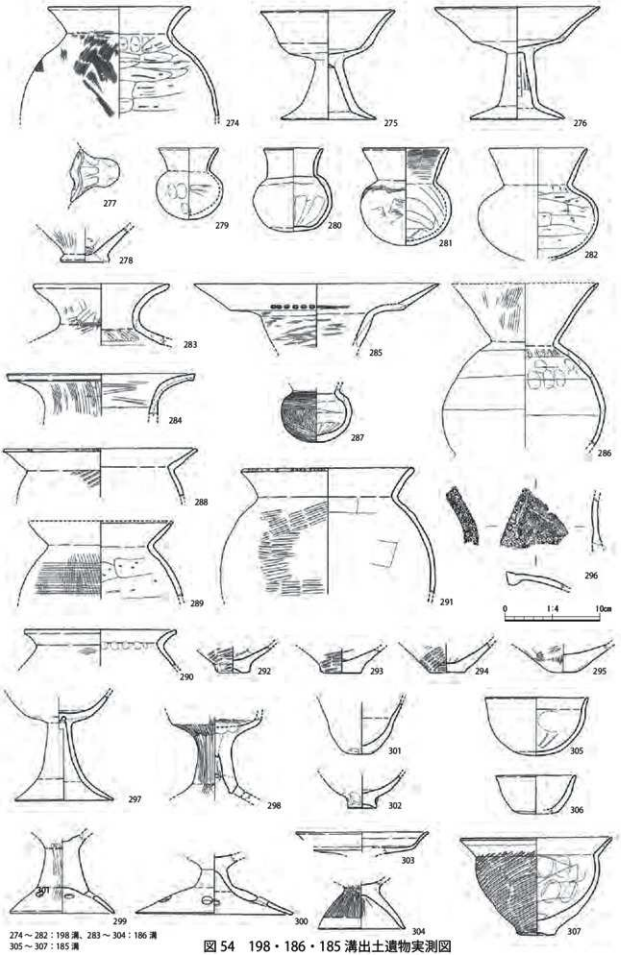


図 53　67 溝出土遺物実測図



274～282：198溝、283～304：186溝
305～307：185溝

図54　198・186・185溝出土遺物実測図

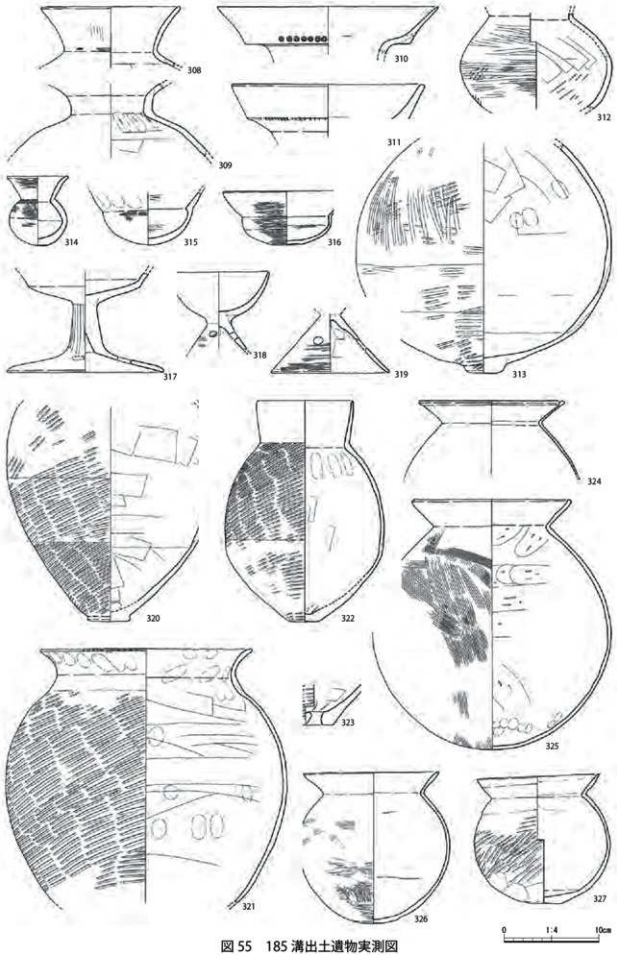


図 55　185 溝出土遺物実測図

第２節　川辺遺跡の調査成果

１．基本層序（図56、写真図版35）

今回の発掘調査地の基本層序は、県教育委員会の試掘確認調査成果を踏襲し、以下のように５層に大別した。なお、東側に隣接する当文化財センターが平成28年度に実施した川辺遺跡第１次発掘調査との層位対応関係は（　）に示した。

第０層：現代遺物を含む現代の盛土である。

第１層：現代の水田耕作土で、灰色を呈する細砂層又は、暗灰黄色を呈するシルト混細砂層である（第１次発掘調査第１層と対応）。

第２層：明黄褐、黄褐、灰オリーブ、黄灰、暗灰黄、オリーブ褐色を呈するシルト混細砂層である。現代の耕作土の床土又は鋤床、もしくは遺物は出土していないが近世の耕作土の可能性もある（第１次発掘調査第２層と対応）。

第４層：灰、黄灰、にぶい黄、黄褐、にぶい黄橙、褐灰、暗灰黄色を呈するシルト混細砂層である。この層からは、瓦器椀とみられる土器片が出土していることから、中世の耕作土とみられる（第１次発掘調査第３層と対応）。

第５層：にぶい黄、褐、黄褐、暗褐色を呈する粗～細砂層又はシルト混細砂層である。今回の発掘調査範囲では、東側から西側に向かって砂質が強くなる傾向にある（第１次発掘調査第６層と対応か）。

なお、いずれの層でも、地震による液状化現象に伴う砂脈が無数に認められる。

２．調査の成果

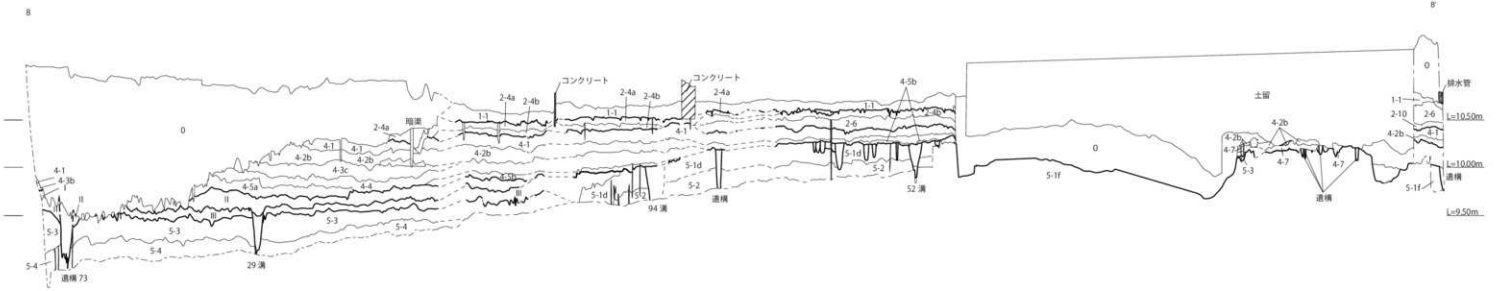
今回の発掘調査では、当文化財センターが２－１区及び２－２区の調査を行い、県教育委員会が２－３区の調査を行った。調査面積計は、2,523.6㎡である。２－１区と２－２区は、排土置き場等の関係から反転して発掘調査を行った。

各調査区の発掘調査前の現況は、２－１区及び２－２区西半は水田であり、２－２区東半及び２－３区は宅地及び私道であった。現況が水田である調査区地盤の標高は、東端で10.80m、西端で10.50mで東から西にむかって緩やかに下る。一方、宅地及び私道である調査区地盤の標高は、東端・西端ともに11.40mと水平である。また、宅地等の範囲については、盛土のため、水田耕作土上面より約0.6m程度高い。

調査の結果、第５層上面で、中世の流路や溝４条、古代の水田１枚、畦畔１条、流路や溝９条、弥生時代から古代の水田の可能性がある遺構１基、古墳時代後期後半の溝５条、古墳時代後期中葉の溝１条、古墳時代後期前半の溝１条、古墳時代中期から後期前半の溝１条、古墳時代とみられる溝３条、庄内式併行期の土器棺墓１基、弥生時代後期後半から庄内式併行期の土坑１基、庄内式併行期以前と推定される区画溝又は周溝墓の一部とみられる溝５条、弥生時代中期後半の溝１条、弥生時代から古墳時代の溝13条・土坑２基・柵１列を検出した。

遺物は、中世の瓦器椀や土師器皿、古代から中世の平瓦・丸瓦、古代の平瓦・須恵器坏身・坏蓋・土師器坏、古墳時代後期後半の須恵器坏身・坏蓋・横瓶、古墳時代後期前半の坏蓋、古墳時代の土師器、庄内式併行期の壺・甕、弥生時代後期後半の甕・鉢、弥生時代中期後半の打製石鏃、その他、緑泥片岩製穂積具や叩石、サヌカイトの剥片等が出土した。

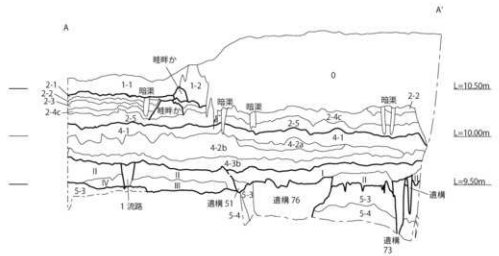
調査区北壁 B-B′

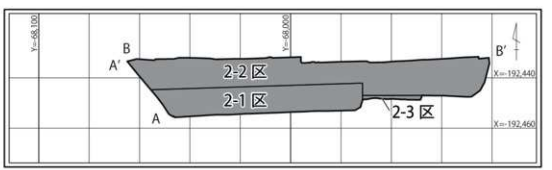


【調査区土層断面土層注記】

0　盛土
1-1　5YS/1 灰褐砂色（現代の耕作土）
1-2　2.5YS/2 暗灰黄色シルト混細砂（5YS/1 灰褐砂を含む）
2-1　10YR6/8 明黄褐色シルト混細砂（現代の耕作土床土か礎床）
2-2　2.5YS/1 黄褐色シルト混細砂（鉄分 15%程度含む）
2-3　10YRS/6 黄褐色シルト混細砂（2.5YS/1 黄灰 シルト混細砂 20% 程度含む）
2-4a　2.5YS/6 黄褐色シルト混じり細砂
2-4b　5YS/3 灰色オリーブ、2.5Y6/1 黄灰色、10YR6/6 明黄褐色、10YRS/6 黄褐色、2.5YS/4 黄褐色、2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト混細砂
2-4c　5YS/2 灰色オリーブシルト混細砂（マンガン粒 10%シルト混細砂、鉄分 20%程度含む）
2-5　2.5YS/2 明黄褐色シルト混細砂（マンガン粒 7% 程度含む）
2-6　2.5YS/2 灰黄褐色シルト混細砂
2-7　2.5YS/4 黄褐色シルト混細砂
2-8　2.5YS/2 暗灰黄色シルト混細砂
2-9　2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト混細砂
2-10　2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト混細砂
4-1　7.5YS/1～7.5Y4/1 灰色、5 G4/1 暗緑灰色、10Y4/1 灰色、2.5Y4/4 オリーブ褐色、2.5YS/2 暗灰黄色、2.5YS/2 暗黄灰色シルト混細砂（マンガン粒 7%程度含む）
4-2a　2.5YS/1 黄灰色シルト（鉄分 20% 程度含む）
4-2b　7.5YS/1 灰色シルト、5Y4/1 灰色、10YS/1 灰色シルト、2.5Y6/2 灰黄色、2.5YS/2 暗灰黄色、5YS/1 灰色、2.5YS/1 黄灰色シルト混細砂（鉄分 20% 程度、マンガン粒 10%程度含む）
4-2c　2.5Y6/3 にぶい黄色、2.5Y6/2 灰黄色、2.5YS/2 暗灰黄色シルト混細砂（マンガン粒 7% 含む）
4-2d　10YR5/6 黄褐色シルト混細砂（マンガン粒 3% 程度含む）
4-3a　2.5Y6/1 黄灰色シルト（鉄分 15% 程度含む）
4-3b　2.5YS/1 黄灰色シルト（鉄分 20% 程度含む）
4-3c　7.5Y6/1～5/1 灰色シルト混細砂
4-3d　10YR6/3 にぶい黄橙色、2.5Y6/2～5/2 灰黄色～暗灰黄色シルト混細砂
4-4　2.5YS/2 暗灰黄色シルト混細砂
4-5a　2.5Y6/1 黄灰色シルト混細砂
4-5b　2.5YS/2 暗灰黄色、10YRS/4 にぶい黄褐色シルト混細砂
4-6　10YRS/3 にぶい黄褐色、2.5Y6/2 灰黄色シルト混細砂
4-7　10YRS/1 褐灰色、2.5Y6/1 黄灰色、10YR4/1 褐灰色シルト混細砂
4-8　2.5YS/2 暗灰黄色シルト混細砂
4-9　2.5YRS/2 暗灰黄色シルト混細砂（遺物細片・炭含む）
5-1a　2.5Y6/4 にぶい黄色～ 2.5YS/4 黄褐色シルト混細砂（鉄分 30% 程度含む）
5-1b　10YR4/6 褐色シルト混細砂（上面硬化）
5-1c　2.5YS/6 黄褐色、10YR4/6～ 5/8 褐色～黄褐色シルト混細砂
5-1d　10YT4/4 褐色シルト混粗砂～細砂
5-1e　10YR4/4 褐色細砂（上面硬化）
5-1f　10YR3/4 暗褐色シルト混細砂
5-2　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂（鉄分 30% 程度含む）
5-3　7.5YS/2 灰オリーブ色～ 10YR6/6 黄褐色、10YR4/6 褐色、5YS/1 シルト混細砂（鉄分 10%程度、マンガン粒 3%程度含む）
5-4　2.5Y6/2 灰黄色～ 2.5Y6/2 灰黄色中砂～シルト混細砂（上面に鉄分沈着）
5-5　10YR4/6 褐色中砂
I　5YS/1 灰色シルト（鉄分 20% 程度含む）
II　5Y4/1 灰色シルト（上面に鉄分沈着）
III　2.5Y4/1 黄灰色シルト（鉄分 10% 程度含む）
IV　5Y4/1 灰色シルト（鉄分 5% 程度含む）
■　地山

調査区西壁 A-A′





調査区模式図

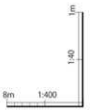
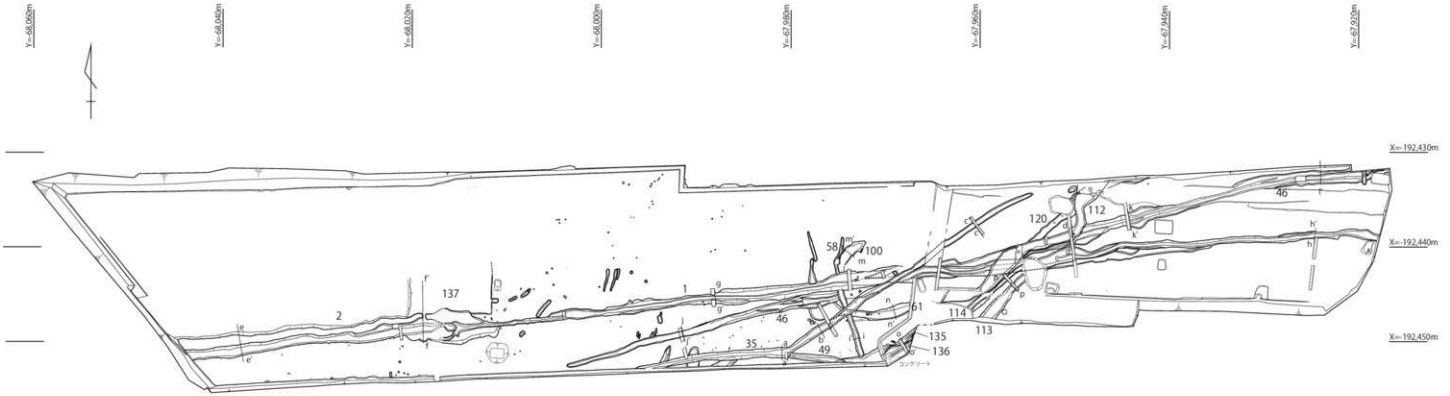
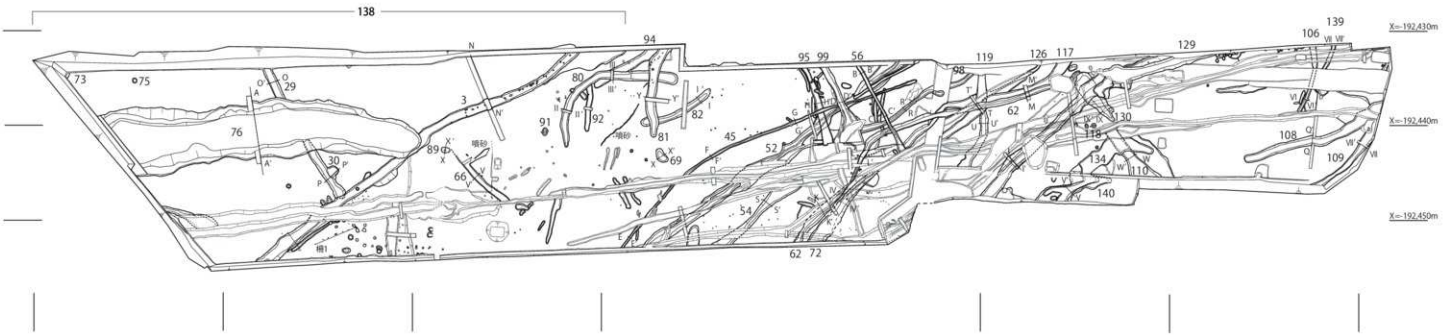


図56　川辺遺跡調査区土層断面図



1　古代～中世の遺構全体図



2　弥生時代～古墳時代の遺構全体図

0　1:400　10m

図57　遺構全体図

以下、検出した主要な遺構、出土した遺物等について詳しく述べる。なお、調査成果としては、すべての調査区をまとめて記述する。

（１）中世の遺構と遺物（図58・64）

中世の遺構は、35溝、49溝、112流路、120溝である。ただし、出土遺物から時期が明確であるのは112流路のみで、その他遺構は、出土遺物が細片かつ少量又は出土していない等、出土遺物から時期を比定することが困難であった。しかしながら、35溝、49溝、120溝の埋土は、112流路埋土と土質が類似し、かつ他遺構との重複関係からみても矛盾しないことから、当該期の遺構と判断している。

35溝　検出長約44.0m、幅1.0m、残存する深さは0.2～0.3mで、東西方向並びに北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は場所により１層又は２層に分けられる。上層は黄褐色を呈するシルト混細砂で、下層は褐灰色を呈するシルト混細砂である。遺物は、出土していない。

49溝　検出長約6.0m、幅約0.7m、残存する深さは約0.3mで、東西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は黄灰色を呈するシルト混細砂単層である。遺物は、出土していない。この溝は、35溝及び135・136溝と重複し、前者より先行するが、後者より後出する。

112流路　検出長約26.4m、幅約1.4m、残存する深さは0.3mで、北東・南西方向に蛇行しながら延びる流路である。断面形は浅い舟底状を呈し、埋土は２層に分かれる。上下層ともに灰色のシルト混細砂で、上層に向かって粒子が細かくなる。また、下層ではラミナが確認でき、流路底には長さ8cm程度の円礫が検出された。遺物は、埋土から完存品に近い鎌倉時代の瓦器椀（328、329）や土師器皿（330）、弥生土器細片等が出土しており、鎌倉時代に機能・埋没したものと考えられる。

120溝　検出長約8.0m、幅約0.9m、残存する深さは約0.1mと浅く、北東・南西方向に延びる溝である。遺構の南側は112流路と重複しており、重複関係から、この溝は112流路より先行する。

（２）古代の遺構と遺物（図58・59・61・64、写真図版35・37・38）

古代の遺構は、137水田、２畦畔、１流路、58溝、46流路、100溝、61溝、136溝、135溝、113溝、114溝、138がある。ただし、出土遺物から時期がある程度限定できるのは１流路、46流路、100溝、61溝、136溝で、その他遺構は、出土遺物が細片かつ少量又は出土していない等、出土遺物から時期を比定することが困難であった。しかしながら、中世の遺構同様、時期が限定できる遺構埋土との土質の類似や他遺構との重複関係からみて、当該期の遺構と判断している。

137水田　検出長約9.0m、幅約4.0m、残存する深さは0.1～0.2mである。遺構東・西端は、中世の耕作土とみられる調査区北壁及び東壁第４層に削平されている。水田の耕作土又は床土とみられる埋土からは、土師器や弥生土器細片が出土した。後述するように、１流路より取り水をしていたと考えられることから、この流路とほぼ同時期のものと推測される。

２畦畔　調査区西側で、１流路の北側に伴う東西方向に延びる畦畔である。検出長約32.0m、幅1.0～1.5m、残存する高さは0.1～0.3mで、調査区西側に向かって低くなる。なお、調査区東側に畦畔が検出されなかったのは、調査区西側から東側にむかって遺構面を形成する地盤が緩やかに

高くなることから、後世の削平を受けたためと考えている。2畦畔は、西端から東側へ約24.5m付近で、検出幅約0.3m、残存する深さ約0.1mの取水口とみられる凹みが確認されており、ここを通して1流路から137水田へ水を供給していたとものと考えられる。

1流路　検出長約126.0m、幅0.9～1.4m、残存する深さは0.5mで、調査区を東西方向に横断する流路である。断面形は舟底状を呈し、流路の埋土は大きく上下2層に分けられる。上層は黄褐色又は褐灰色等のシルト混細砂で、下層は黄褐色又は褐灰色等のシルト混細砂や褐色を呈する細砂で、下層から上層に向かって埋土の粒子が細かくなる。また、f－f'断面では溝の埋没に伴い掘り直された痕跡（第1～5層）が認められ、掘り直し以前に堆積したとみられる粗砂層（第6層）下では、流路肩部で牛や人の足跡が多数確認された。遺物は、埋土上層から弥生土器甕底部片（331）が出土し、下層からTK209型式～飛鳥Ⅱ併行期の須恵器坏身（332）や弥生土器壺片（333）が出土した。時期は、出土遺物及び112流路並びに46流路や61溝、52溝等との重複関係から、奈良時代の遺構と考える。

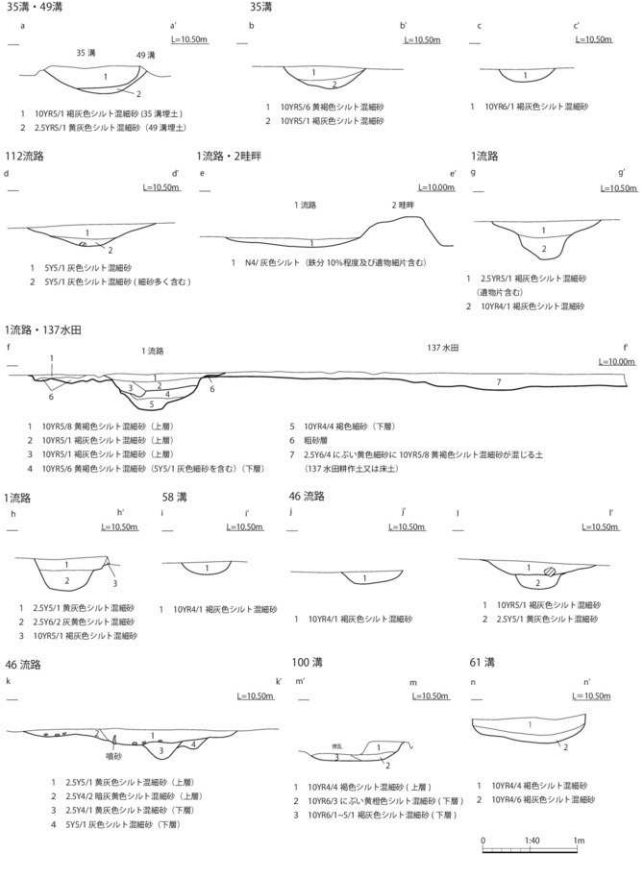
58溝　検出長約13.0m、幅約0.5m、残存する深さは約0.2mで、北西・南東方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は褐灰色のシルト混細砂単層である。遺物は、出土していない。時期は、61溝及び46溝等との重複関係からこれらより後出し、1流路及び35溝より先行する。

46流路　検出長約90.0m、幅約1.1m、残存する深さは0.3mで、北東・南西方向に延びる流路である。断面形は舟底状を呈し、埋土は場所により1層ないし上下2層に分かれ、いずれも褐灰色又は黄灰色のシルト混細砂である。また、i－i'断面であるように下層上面では、長さ10cm程度の小礫がまばらに検出された。遺物は、埋土上層から飛鳥Ⅲ～平城Ⅲ併行期の土師器坏B底部片（334）が出土しており、下層からTK209型式～飛鳥Ⅱ併行期の須恵器坏H蓋（335）が出土した。また、上下埋土いずれから出土したかあいまいであるが、その他に土師器高坏片（336）や砂岩製の叩石（337）等が出土している。出土遺物や埋土の状況から、埋土上層は掘り直された流路のものである可能性がある。時期は、出土遺物や112流路等他の遺構との重複関係からみて、飛鳥時代から奈良時代に掘削され機能した流路であろう。

100溝　検出長約4.0m、幅約1.0m、残存する深さは0.2mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は2層に大別され、上層は褐色のシルト混細砂、下層はにぶい黄橙色又は褐灰色のシルト混細砂である。出土遺物は、溝底からは凹面に布目圧痕をもち凸面に斜格子目タタキをもつ古代の平瓦片（338）が出土した。また、埋土からは土師器や弥生土器細片等が出土している。平瓦の時期から、溝は古代に掘削され機能していたものと考えられる。

61溝　検出長約10.5m、幅約1.2m、残存する深さは0.3mで、東西方向に延びる溝である。溝底には、長さ0.2m程度の角礫が散見される。断面形は舟底状を呈し、埋土は上下2層に分けられ、上層は褐色のシルト混細砂で、下層は褐灰色のシルト混細砂である。溝埋土から、古代から中世とみられる凹面に布目圧痕をもち凸面がナデ調整された丸瓦（339）や平瓦片（340）、須恵器や土師器、弥生土器細片等が出土した。時期は、出土遺物及び46溝や58溝、35溝との重複関係から、古代におさまるものと推定される。

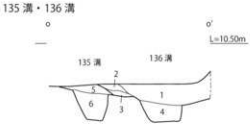
136溝　検出長約2.8m、幅約1.2m、残存する深さは0.5mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形はU字状を呈し、埋土は4層に分かれ、灰黄褐色及び褐灰色のシルト混細砂である。遺物は、凹面に布目圧痕をもち凸面がナデ調整された古代から中世の丸瓦片（341）等が出土した。



（位置は図57遺構全体図（1　古代～中世の遺構全体図）を参照）

図58　35・49・58・100・61溝、112・1・46流路、137水田、2畦畔土層断面図

135 溝・136 溝



1　10YR5/2 灰黄褐色シルト混細砂（136 溝埋土）
2　10YR4/2 灰黄褐色シルト混細砂
（砂質強い）（136 溝埋土）
3　10YR4/1 褐灰色シルト混細砂（136 溝埋土）
4　10YR5/2 灰黄褐色シルト混細砂（136 溝埋土）
5　10YR5/1 褐灰色シルト混細砂（135 溝埋土）
6　10YR4/1 にぶい黄褐色シルト混細砂（135 溝埋土）

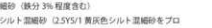
113 溝・114 溝

1　2.5Y4/1 黄灰色シルト混細砂
1　2.5YS/1 黄灰色シルト混細砂

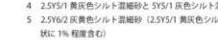
76 溝

1　2.5Y4/1 黄灰色シルト混細砂（鉄分 50% 含む）
2　2.5YS/1 黄灰色シルト混細砂（上面に鉄分沈着）
3　5YS/1 灰色シルト混細砂（2.5YS/1 黄灰色シルト混細砂をブロック状に 3% 程度含む）
4　2.5YS/1 黄灰色シルト混細砂と 5YS/1 灰色シルト混細砂混じる
5　2.5Y6/2 灰黄色シルト混細砂（2.5YS/1 黄灰色シルト混細砂をブロック状に 1% 程度含む）
6　N5/ 灰色シルト混細砂（鉄分 3% 程度含む）
7　5B6/1–5/1 青灰色シルト混細砂（2.5YS/1 黄灰色シルト混細砂をブロック状に 50% 程度含む）
8　5B6/1–5/1 青灰色シルト混細砂

129 溝



56 溝



1　10YR4/3–4/4 にぶい黄褐色 ~ 褐色シルト混細砂

99 溝

1　10YR4/1 褐色シルト混細砂（遺物細片含む）

1　2.5Y4/1 黄灰色シルト混細砂
2　2.5Y3/2 黒褐色シルト混細砂（砂質強い）
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト混細砂

45 溝

1　10YR4/3・10YRS/4 にぶい黄褐シルト混細砂

95 溝

1　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混細砂

（135 溝・136 溝・113 溝・114 溝の 位置は図57遺構全体図（ 1　古代～中世の遺構全体図）を参照）
（76 溝・56 溝・99 溝・95 溝・45 溝・129 溝の 位置は図57遺構全体図（ 2　弥生時代～古墳時代の遺構全体図）を参照）

図59　135・136・113・114・76・56・99・95・45・129溝土層断面図

135溝　検出長約4.1m、幅約0.6m、残存する深さは0.4mで、南西・北東方向に延びる溝である。断面形はU字状を呈し、埋土は上下２層に分かれ、上層は褐灰色を呈するシルト混細砂、下層はにぶい黄褐色を呈するシルト混細砂である。遺物は、出土していない。

113溝　検出長約3.0m、幅約0.7m、残存する深さは0.3mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は黄灰色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土から土師器細片が出土した。113溝は、その方向及び埋土の土質等からみて、136溝につながる可能性がある。

114溝　検出長約4.7m、幅約0.3m、残存する深さは約0.1mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は浅い舟底状を呈し、埋土は黄灰色のシルト混細砂単層である。遺物は、出土していない。ただし、この流路は１流路との重複関係から、後者より後出する。また、114溝は、その方向及び埋土から、135溝につながる可能性がある。

138　検出最大長約60.0m、幅約5.0mで、南北及び西側が調査区外へ延びるため全形はわからない。残存する深さはいずれも0.2m程度で、遺構底西端での標高は約8.30m、東端で約10.00mと緩やかに東から西に向かって傾斜するが、埋土はほぼ平坦に堆積する。埋土は第Ⅰ～Ⅳ層に分けられ、いずれも灰色又は灰黄色のシルトである。遺物は、第Ⅰ層から飛鳥時代から奈良時代の須恵器坏B蓋（342）や奈良時代から平安時代の須恵器坏B底部片（343）、弥生土器等細片が出土しており、第Ⅱ～Ⅳ層からは土師器や弥生土器細片等が出土している。埋土上面で、畦畔のようなものは確認できていないが、弥生時代から古代の水田である可能性も考えられる。

（３）弥生時代～古墳時代の遺構と遺物（図59～63・65、写真図版34・35・37・38）

弥生時代から古墳時代の遺構は、76溝、56溝、99溝、45溝、95溝、129溝、130溝、52溝、62溝、３溝、29溝、108溝、91土器棺墓、98溝、54溝、117溝、119溝、126溝、134溝、140溝、110溝、69土坑、80溝、81溝、82溝、92溝、94溝、72溝、66溝、106溝、109溝、139溝、89土坑、118土坑、柵１がある。ただし、出土遺物から時期が比定できるのは129溝、130溝、52溝、91土器棺墓、72溝のみで、その他遺構は、出土遺物が細片かつ少量又は出土していない等、出土遺物から時期を比定することが困難であった。しかしながら、中世・古代の遺構同様、時期が限定できる遺構埋土との土質の類似及び他遺構との重複関係から、当該期の遺構と判断している。

76溝　検出長約32.0m、幅約6.0m、残存する深さは約0.7mで、東西方向に延びる溝である。断面形はやや歪な舟底状を呈し、埋土は８層に分けられる。第１層は黄灰色のシルト混細砂で、第２層以下はグライ化した灰色や灰黄色、青灰色のシルト混細砂である。遺物は、埋土から須恵器や土師器、弥生土器細片等が出土した。76溝と29溝及び３溝、138第Ⅰ層との重複関係は、平面及び断面精査により、前者より後出し、後者より先行すると判断したが、いずれも埋土が極めて類似しており、その境界は不明瞭である。時期は、古墳時代のものと推定される。

56溝　検出長約10.0m、幅約0.4m、残存する深さは約0.2mで、北西・南東方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、にぶい黄褐色から褐色のシルト混細砂である。遺物は出土していないが、後述する52溝より後出し35溝より先行することから、古墳時代後期後半のものと推定される。

99溝　検出長約9.0m、幅約0.7m、残存する深さは約0.2mで、北西・南東方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は褐色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土から弥生土器

とみられる土器細片が出土した。遺構の時期は、他遺構との重複関係から52溝及び62溝より後出し、100溝より先行することから、古墳時代後期後半におさまるものと推測される。

45溝　検出長約36.0m、幅0.2～0.4m、残存する深さは0.1m程度で、南西方向に延びる溝である。断面形は浅い舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土から弥生土器とみられる土器細片が出土した。遺構の時期は、52溝及び95溝より後出し、１流路より先行することから、古墳時代後期後半におさまると推定される。

95溝　検出長約8.5m、幅約0.7m、残存する深さは約0.1mで、北西・南東方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土から弥生土器とみられる土器細片が出土した。遺構の時期は、他遺構との重複関係から、52溝より後出し、５溝や99溝、56溝より先行することから、古墳時代後期中葉におさまるものと推測される。

129溝　検出長約26.0m、幅約1.4m、残存する深さは約0.5mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は３層にわかれ、上層は黄灰色のシルト混細砂で、中層は黒褐色のシルト混細砂であり、上層に比べ砂質が強い。下層はオリーブ褐色のシルト混細砂である。遺物は、埋土下層からTK43型式の須恵器坏蓋（344）、サヌカイトの剥片（345）が出土した。出土遺物から、古墳時代後期後半に、溝の堆積が始まったものと考えられる。

130溝　検出長約6.0m、最大幅約9.0m、残存する深さは0.3m程度で、北西・南東方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は褐灰色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土下層からTK43型式の須恵器坏身（346）及び横瓶（347）等が出土しており、この溝は古墳時代後期後半の溝と考えられる。

52溝（図60、写真図版34）　検出長約34.0m、幅約1.3m、残存する深さは約0.4mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は２層にわかれ、上層は暗黄灰色のシルト混細砂、下層は黄灰色のシルト混細砂である。溝底には、溝と同様の方向に走る砂脈が認められる。土層断面からみて、強い地震により噴砂が噴き上がったのちに、この溝が掘削されたとみられる。遺物は、埋土からTK10型式の須恵器坏蓋（348）、庄内式併行期の広口壺口縁部（349、350）や壺底部片（351）、外面にタタキがみられる甕底部片（352）等が出土している。出土遺物から、52溝は古墳時代後期前半には埋没が始まっていたものと考えられる。

62溝　検出長約32.0m、幅0.5～0.7m、残存する深さは0.2～0.4mで、北東・南西方向に延びる溝であるが、遺構南端から約13.0m付近で東に向かってくの字状に屈曲する。断面形はU字状を呈し、埋土は場所により１層又は２層に分かれる。埋土はいずれもオリーブ灰色又はにぶい黄褐色、褐灰色等のシルト混細砂である。遺物は、埋土から器種・時期不明の須恵器片や弥生土器とみられる甕底部片（353）や緑泥片岩製穂積具（354）等が出土している。遺構の時期は、出土遺物及び他遺構との重複関係から、１流路や46流路、56溝より先行し、古墳時代中期から後期前半のものとみられる。

３溝　検出長約40.0m、幅1.0～1.3m、残存する深さは0.1～0.2mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は灰色シルト単層である。溝東半の底部には、径0.1～0.2m、深さ約0.1～0.2mで、埋土が黄灰色のシルト混細砂である小穴が多数検出された。これらは、どれが対応するかはわからないが、柵列の痕跡である可能性がある。遺物は、埋土から土

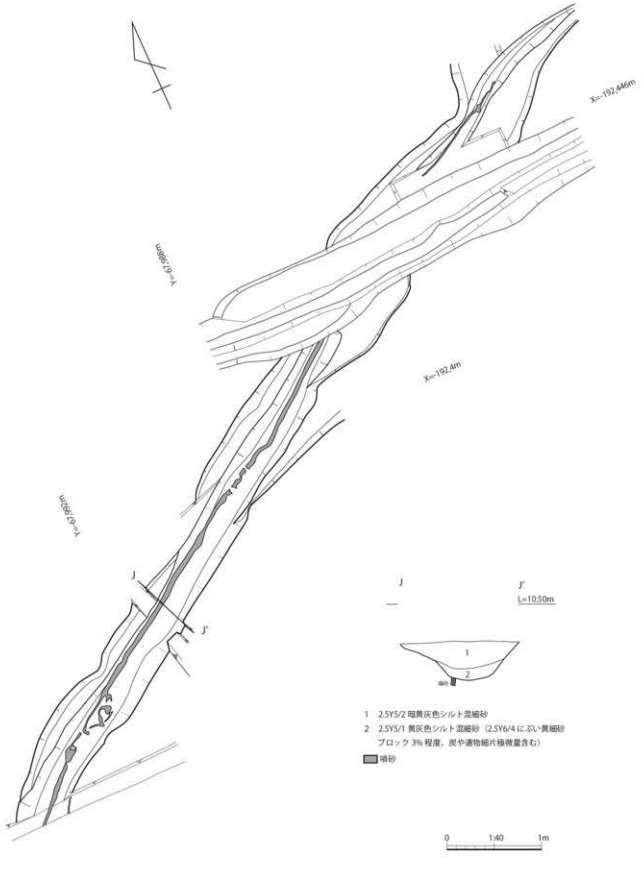
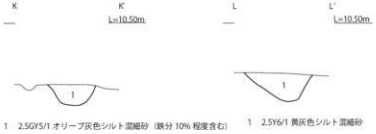


図60　52溝平面図及び土層断面図

62 溝



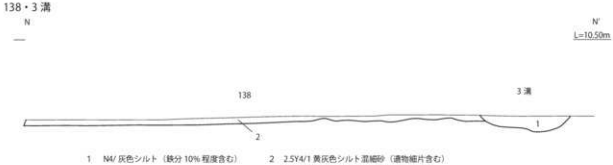
1　2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト混細砂（鉄分 10% 程度含む）

1　2.5Y6/1 黄灰色シルト混細砂

62 溝・117 溝

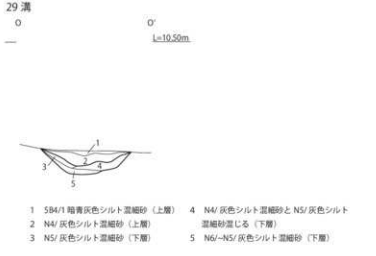
1　10YR4/1 褐灰色シルト混細砂
2　10YR5/1 褐灰色シルト混細砂

138・3 溝



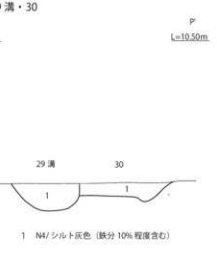
1　N4/ 灰色シルト（鉄分 10% 程度含む）　2　2.5Y4/1 黄色シルト混細砂（遺物細片含む）
（調査区北壁土層断面第 1 層に対応する）

29 溝



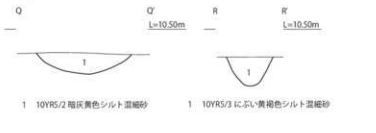
1　5B4/1 暗青灰色シルト混細砂（上層）
2　N4/ 灰色シルト混細砂（上層）
3　N5/ 灰色シルト混細砂（下層）
4　N4/ 灰色シルト混細砂と N5/ 灰色シルト混細砂混じる（下層）
5　N6/–N5/ 灰色シルト混細砂（下層）

29 溝・30



1　N4/ シルト灰色（鉄分 10% 程度含む）

108 溝

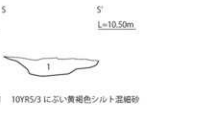


1　10YR5/2 暗灰黄色シルト混細砂

98 溝

1　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混細砂

54 溝



1　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混細砂

（位置は図57遺構全体図（ 2　弥生時代～古墳時代の遺構全体図）を参照）

図61　62・117・3・29・108・98・54溝、138、30土層断面図

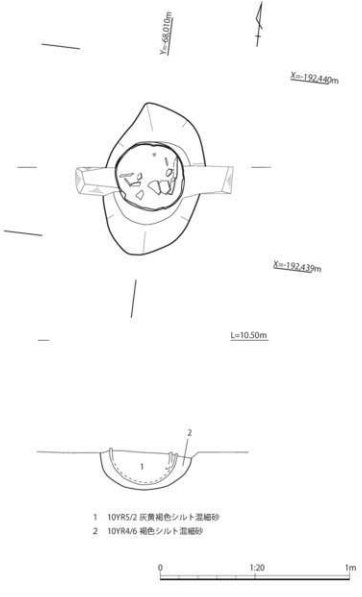


図62　91土器棺墓平面図・土層断面図

師器とみられる高坏片（355）やサヌカイトの剥片（356、357）等が出土した。３溝は、１流路との重複関係から、古墳時代のものと推測される。

29溝　検出長約16.0m、幅0.7～0.9m、残存する深さは約0.3mで、北西・南東方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は２層に大別される。上層は暗青灰色や灰色のシルト混細砂層で、下層はグライ化した灰色のシルト混細砂である。遺物は、弥生土器とみられる土器細片が出土した。遺構の時期は明確でないが、遺構の重複関係から、76溝及び３溝より先行する。

108溝　検出長約15.0m、幅約1.0m、残存する深さは約0.3mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土から時期不明の須恵器甕片や弥生時代後期後半の外面にタタキをもつ紀伊第Ⅴ様式鉢（358）が出土している。

91土器棺墓（図62、写真図版37）　検出長約0.8m、幅約0.5mで、平面は楕円形である。遺構の中央には、残存胴部径0.4m程度の庄内式併行期の壺（359）が正位で据えられていた。残存する深さは約0.2mで、壺は底部から胴部まで残存しており、高さは0.16mである。壺内部に堆積していた灰黄褐色シルト混細砂の埋土を全てふるいにかけたが、骨片や有機物、その他遺物は出土していない。しかしながら、この遺構は形状や土器の埋設状況からみて、壺を棺として用いた土器棺墓と想定される。遺構の時期は、据えられていた壺からみて、庄内式併行期の遺構と考えられる。

98溝　検出長約16.0m、幅0.5m、残存する深さは約0.3mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、にぶい黄褐色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土から弥生土器とみられる壺底部片（360）等が出土した。98溝は、99溝及び56溝との重複関係から後者より先行

する。また、溝の方向及び埋土の土質等から54溝につながる可能性がある。

54溝　検出長約9.0m、幅0.7～1.5m、残存する深さは約0.2mで、南西・北東方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色のシルト混細砂である。遺物は、埋土から弥生時代後期後半～終末期にあたる外面にタタキをもち内面にナデ調整を施す紀伊第Ⅴ様式から庄内式併行期の甕底部片（361・362）や弥生土器細片等が出土している。54溝は、溝の方向及び埋土土質等から98溝又は117溝につながる可能性がある。

117溝　検出長約16.0m、幅0.5～1.2m、残存する深さは0.2m程度で、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は歪な舟底状を呈し、埋土は黄灰色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土から弥生土器とみられる土器細片が出土した。117溝の時期は、他遺構との重複関係より、62溝より先行し、119溝及び126溝より後出する。

119溝　検出長約11.0m、幅約0.7m、残存する深さは約0.3mで、南北方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土はオリーブ褐色のシルト混細砂である。遺物は、出土していない。この遺構は、126溝や117溝との重複関係からこれらより後出し、また62溝より先行する。

126溝　検出長約22.0m、幅約1.0m、残存する深さは約0.3mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は２つに分かれ、上層はオリーブ褐色のシルト混細砂で、下層は黄灰色のシルト混細砂である。遺物は、埋土から弥生土器とみられる土器細片が出土した。この遺構は、117溝や110溝との重複関係からこれらより先行する。

134溝・140溝　134溝は検出長約12.0m、幅約1.6m、残存する深さは約0.2mで、北東・南西方向に延びる溝である。遺構の南西端では、Y字状に分かれる。断面形は舟底状を呈し、埋土は黄灰色から灰オリーブ色を呈するシルト単層である。140溝は、検出長約6.0m、幅約1.1m、残存する深さ約0.1mで、北東・南西方向の溝とみられるが、134溝に削平されており不明である。断面形は舟底状を呈し、埋土は黄灰色のシルト単層である。いずれからも遺物は、出土していない。

110溝　検出長約6.0m、幅約1.0mで北西・南東方向に延びる溝とみられるが、この周辺一帯がグライ化しており、形状は不明瞭である。残存する深さは約0.1mで、断面形は浅い舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土から弥生土器とみられる土器細片が出土した。この遺構は、134溝との重複関係から、この溝よりも先行する。

69土坑　検出長約1.6m、幅約0.9mで、平面は楕円形を呈する土坑である。残存する深さは約0.2mで、断面形は舟底状を呈し、埋土はにぶい黄褐色のシルト混細砂単層である。遺物は、埋土から弥生時代後期後半～終末期にあたる外面にタタキをもち内面に板圧痕をもつ紀伊第Ⅴ様式から庄内式併行期の甕底部片（363）等が出土している。

80溝　検出長約17.0m、幅約約0.8m、残存する深さは約0.3mの溝で、東から南に向かって円弧を描くように屈曲する。断面形は舟底状を呈し、埋土は２層にわかれ、上層は黄褐色のシルト混細砂、下層は暗褐色のシルト混細砂である。遺物は、上層から弥生土器壺底部片（364）が出土している。出土遺物が細片であり、この遺構の詳細な時期を明らかにすることは難しいが、類似する埋土をもつ81溝や82溝の埋土からは弥生時代後期後半から終末期にあたる紀伊第Ⅴ様式から庄内式併行期の遺物が出土しており、当該期以前の遺構と推測している。また、遺構の形状から、この遺構は区画溝もしくは周溝墓の一部である可能性もあろう。

81溝　検出長約9.5m、幅約0.9m、残存する深さは約0.4mで、南北方向に延びる溝である。断面形

はU字状を呈し、埋土は上下２層に分かれ、上層はにぶい黄褐色のシルト混細砂、下層は灰黄褐色のシルト混細砂である。遺物は、埋土から弥生時代後期後半から終末期にあたる外面にタタキをもつ紀伊第Ⅴ様式から庄内式併行期の甕細片（365）が出土している。この遺構の埋土は、土質等が80溝のものと類似することや遺構の形状が似ていることから、同種別の遺構である可能性がある。

82溝　検出長約8.0m、幅約0.8m、残存する深さは約0.4mで、南西・北東方向に延びる溝である。断面形はU字状を呈し、埋土は２層にわかれ、上層は灰色又は黄褐色のシルト混細砂、下層は褐灰色又は暗褐色のシルト混細砂である。遺物は、埋土から紀伊第Ⅴ様式から庄内式併行期の甕底部片（366）や土師器高坏片（367）等が出土している。この溝も、埋土が80溝のものと類似すること等から、同種別の遺構である可能性がある。

また、遺物が出土していないため遺構の時期は明確ではないが、92溝や94溝についても遺構の形状や埋土の土質等が80溝等と類似することから、同種別の遺構である可能性が高い。

72溝　検出長約10.0m、幅約1.0m、残存する深さは約0.2mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は舟底状を呈し、埋土は上下２層に分かれ、上層は褐色のシルト混細砂、下層は暗灰黄色のシルト混細砂である。遺物は、溝底から打製石鏃凸基式がほぼ完存品で１点（368）出土している。出土した石鏃は、この形式の中でも法量が大型であり、弥生時代中期後半のものとみられることから、流路の掘削時期も同様のものと考えられる。その他、埋土から遺物は出土していないことから、この流路が放棄された時期は明確でないが、１流路や61溝との重複関係から、古代には完全に埋没していたものと考えられる。72溝は、遺構の方向や埋土の土質等から117溝や126溝につながる可能性がある。

66溝　検出長約7.0m、幅約0.7m、残存する深さは約0.1mで、北西・南東方向に延びる溝である。断面形は浅い舟底状を呈し、埋土は褐灰色のシルト混細砂単層である。遺構南端から北へ向かって約5.5m付近で、溝東側の肩が枝分かれし、東方向へ直線状に延びるが、その全形はよくわからない。遺物は、埋土から弥生土器細片が出土した。

106溝　検出長約8.0m、幅約0.4m、残存する深さは約0.1mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は浅い舟底状を呈し、埋土は褐灰色のシルト混細砂単層である。遺物は、出土していない。

109溝　検出長約10.0m、幅約0.7m、残存する深さは約0.1mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は浅い舟底状を呈し、埋土は褐灰色のシルト混細砂単層である。遺物は、出土していない。

139溝　検出長約3.0m、幅約0.6m、残存する深さは約0.1mで、北東・南西方向に延びる溝である。断面形は浅い舟底状を呈し、埋土は黄灰色のシルト混細砂単層である。遺物は、出土していない。

89土坑　検出長約0.9m、幅約0.5mで、平面は楕円形である。残存する深さは約0.4mで、断面形はU字状を呈する。埋土は３層に分かれるが、いずれも褐灰色又は灰黄褐色のシルト混細砂である。遺物は、出土していない。

118土坑　検出径0.4mで、平面は円形の土坑である。残存する深さは約0.1mで、断面形は浅い舟底状を呈し、埋土は暗灰黄色のシルト混細砂単層である。遺物は、出土していない。

柵１　長さ約4.7mの柵で、木杭の痕跡とみられる小穴７基で構成される。小穴は径0.1m程度、深さ0.1m程度、埋土は褐色又は灰黄褐色のシルト混細砂である。遺物は、出土していない。

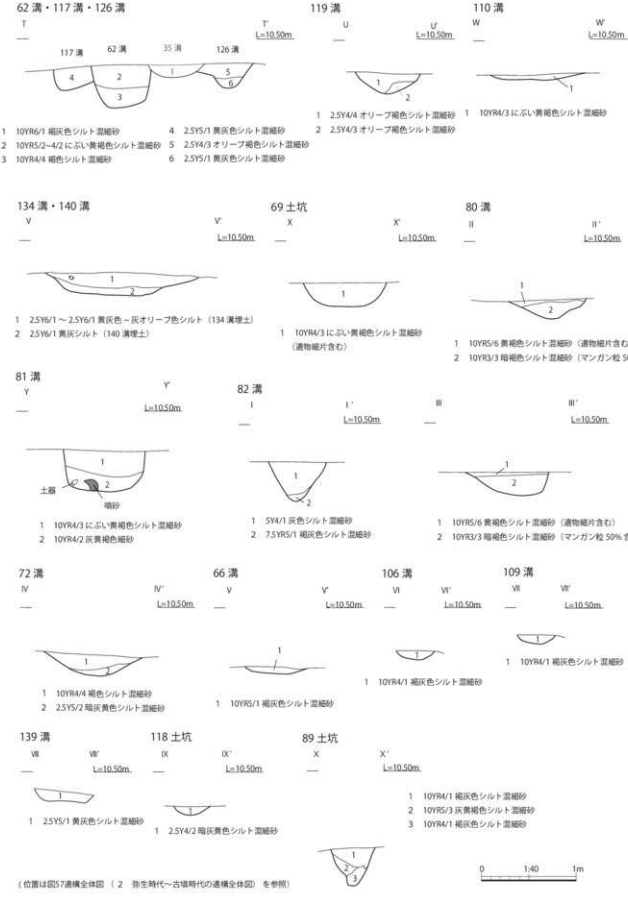


図63 62・117・126・119・110・134・140・80・81・82・72・66・106・109・139溝
69・118・89 土坑土層断面図

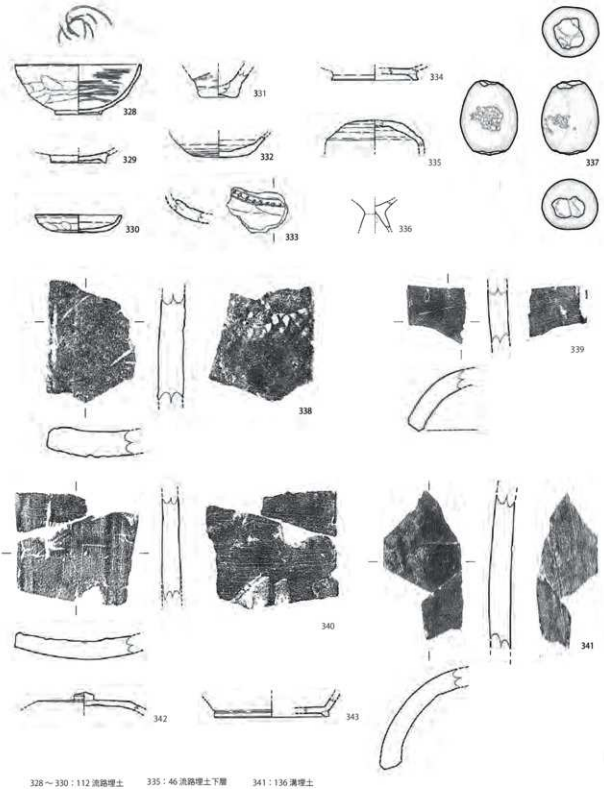

328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
328～330：112 流路埋土
331：1 流路埋土上層
332・333：1 流路埋土下層
334：46 流路埋土上層
335：46 流路埋土下層
336・337：46 流路埋土
338：100 溝底
339・340：61 溝埋土
341：136 溝埋土
342・343：138 第Ⅰ層
0
1：4
20cm

図64　出土遺物①

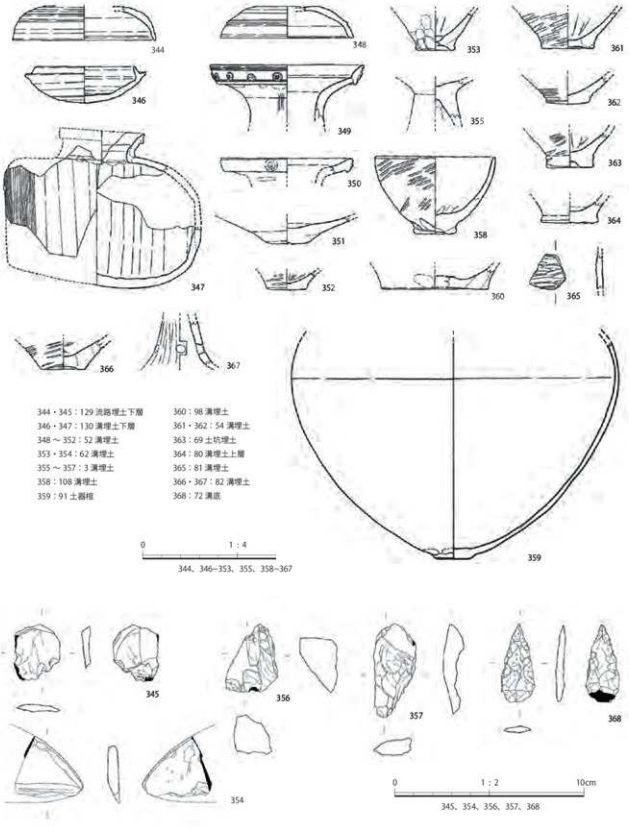

344
348
353
361
346
349
355
362
347
350
358
363
351
364
352
360
365
366
367
344・345：129 流路埋土下層
346・347：130 溝埋土下層
348～352：52 溝埋土
353・354：62 溝埋土
355～357：3 溝埋土
358：108 溝埋土
359：91 土器棺
360：98 溝埋土
361・362：54 溝埋土
363：69 土坑埋土
364：80 溝埋土上層
365：81 溝埋土
366・367：82 溝埋土
368：72 溝底
0
1：4
344、346~353、355、358~367
359
345
356
357
368
354
0
1：2
10cm
345、354、356、357、368

図65　出土遺物②

第6章　まとめ

第1節　東城跡

今回の調査成果の一つとしては、調査地東端の上面で伝承として知られていた「東城」の堀と考えられる遺構を検出したことが挙げられる。墨書土器など直接的に東城と結びつく文字資料を得ることはできなかったが、堀から出土した遺物の年代観や伝承されてきた東城の位置を鑑みれば、調査で検出された堀が東城に関するものであることは間違いないものと思われる。

時期的には戦国期ないし近世の城郭の形式ではなく、平安時代末から鎌倉時代初めのものであり有力武家の居館として位置付けられる。和歌山県内で確認されているこの時期の居館としては最も古くなる可能性がある。

今回の調査で検出した堀は、北西のコーナー部を含む一部だけであるため全体の平面規模は不明である。県内の平地に築かれた居館跡としては、有田川町に所在する藤並城やみなべ町に所在する高田土居城が知られているが、これらはともに戦国期まで下る時期のものである。規模としては前者が東西75m×南北90m、後者は外郭部を含めると東西160m×南北220mとされている。従って、今回の調査で検出した堀により、古い時代の事例を追加することとなった。

堀の内側で検出された建物跡（掘立柱建物１）は、方向性等から居館を構成する建物の一部である可能性が高いが、その規模からして主屋ではなく付属する建物であったと考えられる。主屋については、今回の調査区より南東側に建てられていたと思われる。主屋を含め、堀を含む全体の規模や内容を解明するためにも、今後開発が進むと考えられる周辺の調査に十分留意していくことが肝要であろう。

いま一つの成果としては、下面で弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての集落跡を新たに見出したことである。検出された竪穴建物跡は33棟を数え、遺存している壁高が0.5m前後を測るものも幾つかあり、平地部で検出される竪穴建物跡としては全体的に遺りの良いことが特徴と言える。この居住域は、西側は自然流路まで、東側は調査区東端で検出された溝群が東限を成す可能性が高いものと判断される。

居住域は、北東から南西方向に延びる微高地上に展開していたものと思われる。当初、微高地上に集落が展開していた時期には、２－２区から１－２区にかけて検出した67溝が集落の東限を成していたと考えられ、この溝より以西で検出した庄内式併行期の竪穴建物１・７・10・11・16・21が存在していたと思われる。その後、67溝を埋め、東方向に集落を拡張した可能性も十分考えられる。この証左として、67溝の断面形状は「V」字状となり、埋土の下層にはブロック状のシルトが混在していたことからも、人為的に掘削され、意図的に埋められた公算が高いことと、竪穴建物28を67溝上に築造していることからも言える。

また、集落の営まれていた期間は弥生時代終末期から古墳時代前期という短期間であり、同様な微高地上に展開する西田井遺跡や田屋遺跡などの周辺の集落の動向と併せて考える必要がある。このような問題も含めて、今後のこの地域での調査に期待がもたれるものと言えよう。

【参考文献】
『海草郡誌 ―人物編―』1926年発行
『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター　2006年発行

第２節　川辺遺跡（図66）

調査の結果、当該地の開発は弥生時代に開始され、水田や流路、一部は墓域として利用されたと考えられる。その後、古墳時代から古代にも引き続き新たな流路の開削が行われた。中世には、調査区の土層堆積状況並びに弥生時代から古代の遺構残存状況からみて、水田に適した地盤水平成形のため、当該地は削平等大きく改変された可能性が高い。その後、現代に至るまで長く水田を伴う生産域であったと考えられる。

とりわけ今回の調査成果で特筆すべきは、奈良時代に開削されたと考えられる１流路である。１流路は、既往の調査成果もふまえると、その方向等から第１次発掘調査で検出された遺構203又は212につながるとみられ、少なくとも延長約280.0mにもわたって直線的に延びる可能性が高い。また、その方向はN－84°－Eの方向をとり、N－40～60°－E又はそれに直交するものが多くみられる弥生時代から飛鳥時代の流路・溝に比べると、より東偏する。こうした１流路の方位の変化は、この流路が開削された時期や直線性も考慮すると、当該期に国家が主導した土地区画制度である条里制の地割に起因する可能性がある[1]。当該期の条里地割については、河北条里の中でも日延条里区及び藤田条里区に区分され、南北方向の地割はこれまでN－７°又は8°－Eと想定されてきた（中野1990）。これまでの調査も含め、当該期と確実視できる南北方向に延びる流路等は確認されていないが、１流路の方位から南北方向の条里地割を復元してみると、N－5～6°－Wとなり、中野氏が想定する条里地割に比べ西偏する可能性がある。ただし、現状では根拠資料に乏しく、1流路が当該期の条里地割を反映するか否かも含め、今後の周辺調査の進展により、慎重な検討が必要である。

また、１流路は近年、奈良時代の「南海道」の南側側溝と指摘[2]されている（冨加見2015ほか）。図66に、冨加見氏が南海道及び道路とした流路・溝を破線で示した。結論から言えば、今回の調査では、１流路が南海道の南側側溝であると追認する成果は得られなかった。調査では、1流路以北の一部で流路と同時期とみられる畦畔や水田を検出したが、明確な道路面等は確認できていない。また、冨加見氏が南海道の北側側溝と想定される流路を延長すると、今回調査を行なった東城跡の調査区内を通るようであるが、今回の調査では道路面及び側溝ともに検出されなかった。今後、周辺のさらなる発掘調査の進展により、議論されることが期待される。

【参考文献】
井馬好英・藤嶋勝則2008『川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』和歌山市都市整備公社発掘調査報告書第1集　（財）和歌山市都市整備公社
井馬好英・前田敬彦2010『川辺遺跡第10・11・12・13次発掘調査報告書』和歌山市都市整備公社発掘調査報告書第3集　（財）和歌山市都市整備公社
川口修実2003『川辺遺跡発掘調査』『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成13年度－』和歌山市教育委員会
中野栄治1990『紀伊国の条里制』第2印発行　（株）古今書院
冨加見泰彦2015『南海道と古代官衙遺跡-海部・名草・那賀郡』『紀伊風土記の丘研究紀要』第3号　和歌山県立紀伊風土記の丘
松下彰編1995『川辺遺跡発掘調査報告書－一般国道24号和歌山バイパス建設に伴う発掘調査－』（財）和歌山県文化財センター
村田弘・佐伯和也・藤井幸司2005『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書－県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に伴う発掘調査－』（財）和歌山県文化財センター
山本光俊・小林充貴2015『川辺遺跡－都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う発掘調査報告書－』（公財）和歌山県文化財センター

[1] 既往の調査における同時期とみられる流路・溝は、検出された延長が短いものが多く、その方向を見極めることが難しい。
[2] 当報告書第１章 位置と環境　第２節　歴史的環境にあるとおり、これまで当該時期の南海道は、今回の調査地よりさらに北側に想定されてきた。

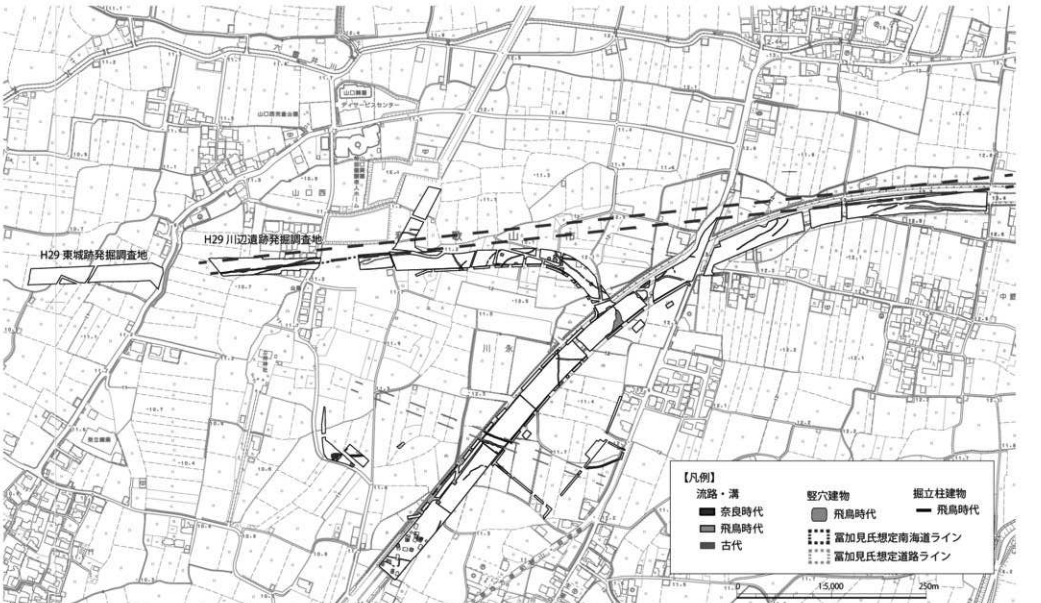


図66　古代の主要遺構配置図

東城跡　遺物観察表（土器類）

法量の（　）は復元した大きさ　色調及び調整の内・外・断は「面」を省略している

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書遺構番号No.	法量 口径cm	法量 高さcm	法量 底径cm	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
1	44	瓦器 椀	1-2区 D5g17	1	(14.7)	4.5	高台 5.0	40%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ幅0.1cm位 密か? 磨滅ぎみ 外)ユビオサエ→ナデ,ナデ 見込)連結輪状文	内・外)N5/0灰色 断)N5/0灰色	密	良好	反転復元 貼付高台
2	44	瓦器 椀	1-2区 D5g17	1	(13.3)	4.9	高台 (4.3)	25%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ 外)ユビオサエ→ナデ,ナデ 見込)連結輪状文	内・外)N5/0～4.5/0灰色 断)5Y8/1灰白色	密	良好	反転復元 貼付高台
3	44	瓦器 椀	1-2区 D5g17	1	(13.0)	(4.3)	—	口縁部 30%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキか?,磨滅のため不明瞭 外)ユビオサエ→ナデ	内・外)N4/0灰色 断)N6/0灰色	密　最大2mm位のチャート微量含む	良好	反転復元
4	44	東播系 捏ね鉢	1-2区 D5g17	1	(25.0)	(7.0)	—	口縁部 10%	内・外)回転ナデ	内)7.5Y6/1灰色 外)7.5Y6/1～5Y4/1灰色 断)7.5Y4/1灰色	密　1～4mm位のチャート・長石中量含む	良好	反転復元
5	44	瓦器 椀	1-2区 D5h・i25	3	(13.0)	(3.8)	—	口縁部 25%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ幅0.2cm位か?,磨滅のため不明瞭 外)ユビオサエ→ナデ	内)5Y5/1灰色 外断)2.5Y7/1灰白色	密　1～2mm位の赤色酸化粒多量含む	良好	反転復元
6	44	瓦器 椀	1-2区 D5h15	3	(13.7)	(4.2)	—	口縁部 5%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ幅0.1cm位?,粗,磨滅のため不明瞭 外)ユビオサエ→ナデ	内)5Y6/1～5/1灰色 外)5Y6/1灰色 断)2.5Y8/1灰白色	密	良好	反転復元
7	44	土師器 鍋	1-2区 D5h・i25	3	(26.5)	(5.5)	—	口縁部 25%	端)ヨコナデ 内)ヨコナデ,工具によるナデか(単位不明瞭) 外)ユビオサエ→ナデ?,工具によるナデ	内)10YR4/2灰黄褐色～10YR6/3にぶい黄橙色 外)5YR7/4にぶい橙色～にぶい褐色7.5YR5/3 断)10YR4/4褐色	密　1～2mmの石英・チャート多く含む	良好	反転復元
8	44	須恵器 東播系 捏ね鉢	2-2区 D5p10-11	300	—	(2.0)	—	—	端・内・外)ヨコナデ	N5/0灰色	密　1mm大の石英・長石含む	良好	断面のみ
9	44	瓦質土器 羽釜	2-2区 D5p11	300	(25.5)	(4.0)	—	口縁部 5%	端)ヨコナデ 内)ハケ7本/0.5cm?+すり目(不明瞭),単位不明 外)ハケケズリ	内)5Y5/1灰色 外)5Y5/1灰色～6/1 断)2.5Y7/1灰白色	密　細かい長石多く含む	良好	反転復元
10	44	土師器 鍋	2-2区 D5p11	300	(22.6)	(6.6)	—	口縁部 20%	端)ヨコナデ 内)ハケ 外)ユビオサエ,ナデ? 被熱痕あり	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)10YR5/3にぶい黄褐色	密　1mm大の石英・長石・雲母粒含む	良好	反転復元
11	44	瓦質土器 羽釜	2-2区 D5p10-11	300		(4.8)	(11.0)	5%以下	内)剥離のため不明瞭 外)ナデ,ヨコナデ 底)未調整	内)5Y8/1灰白色 外)2.5Y6/1黄灰色	やや粗　1～3mm大の石英・長石・チャート含む	軟	反転復元
12	44	土師器 鍋	2-2区 D5p10-11	300	(27.2)	(2.6)	—	25%	端・内・外)ヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	密　1～2mmの石英・長石・赤色斑粒含む	良好	反転復元
13	44	土師器 土釜	2-2区 D5p11	299	(25.6)	(3.5)	—	口縁部 5%	端)ヨコナデ 内・外)工具によるナデか,磨滅のため調整不明瞭	内・外)7.5YR6/6橙色 断)5Y6/2灰オリーブ色～7.5YR6/6橙色	密　1～2mm位のチャート・赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
14	44	土師器 土釜	2-2区 D5p11	300	(26.9)	(6.5)	—	口縁部 40%	端)強めのヨコナデ 内)ヨコナデ,ハケ7本/1.5cm? 外)強いヨコナデ,工具によるナデかの単位?,スス付着	内)7.5YR6/6橙色～10YR7/3にぶい黄橙色 外)5YR6/6橙色～7.5YR4/1褐灰色 断)7.5YR6/4にぶい橙色	密　1～2mmの赤色酸化粒中量,最大3mmの石英少量含む	良好	反転復元
16	44	白磁 皿	1-2区 C5c14	75	—	(1.2)	—	5%以下	内)施釉 外)ヘラケズリ,施釉	釉)5GY8/1灰白色 素地)5Y7/2灰白色	密	良好	反転復元
17	44	土師器 土釜	1-2区 C5c14	75	(24.4)	(4.2)	—	口縁部 20%	端)ヨコナデ 内)ハケケズリ 外)粗ナデ　スス付着	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)7.5YR6/4にぶい橙色	密　1～4mmの石英・長石・赤色斑粒含む	良好	反転復元
18	44	土師器 土釜	1-2区 C5c14	75	(23.4)	(5.2)	—	口縁部 25%	端)ヨコナデ 内)ナナメ方向のナデ 外)ナデ→ユビオサエ	5YR6/6橙色	密　1mmの砂粒多く含む	良好	反転復元
19	44	土師器 土釜	1-2区 C5c14	75	(31.4)	(6.4)	—	口縁部 10%	端)ヨコナデ 内)強いナデ,ナデ 外)剥離のため調整不明瞭　スス付着	内)10YR6/3にぶい黄橙色 外)10YR7/4にぶい黄橙色	密　1mmの砂粒含む	良好	反転復元
20	44	土師器 甕	1-2区 C5c15-16	75	(19.6)	(4.9)	—	口縁部 10%	端)強いヨコナデ 内)粗ナデ 外)ヨコナデ,剥離のため調整不明瞭	7.5YR6/3にぶい褐色	やや粗　1～4mmのチャート・長石含む	良好	反転復元
21	44	土製品 管状土錘	1-2区 C5c15-16	75	1.0	4.5	0.95	90%		7.5YR7/6橙色	密	やや軟	重さ3.71g
22	44	土師器 皿	1-2区 C5c14	75	—	0.9	—	10%	内・外)ヨコナデ 剥離のため調整不明瞭	7.5YR7/6橙色	密　赤色斑粒含む	軟	断面のみ
23	44	瓦器 皿	1-2区 D5i25	22	(4.6)	(1.8)	—	口縁部 15%	内・外)ヨコナデ	5Y5/1灰色	密	良好	反転復元
24	44	土師器 皿	2-2区 D5i～E2	2	(13.9)	3.3	(8.3)	20%	端)ヨコナデ 内・外)ユビオサエ→ナデ	内・断)7.5YR6/4にぶい橙色 外)7.5YR7/4にぶい橙色	密　1～6mm位の石英多量,1～3mm位の石英微量,灰色微粒少量含む	良好	反転復元
25	44	瓦器 椀	2-2区 D5i～E2	2	(13.6)	4.6	高台 (4.0)	40%	外)ユビオサエ→ナデ 磨滅のため調整不明瞭	内)N5/0灰色 外)N3/0暗灰色～N5/0灰色～5Y7/1灰白 断)N5/0灰白色	密　細かい赤色酸化粒微量含む	良好	反転復元 貼付高台
26	44	東播系 捏ね鉢	1-2区 D5h14-15	2	—	(5.1)	—	5%以下	端)重ね焼痕,自然釉付着 内・外)回転ナデ	内)5Y7/1灰白色 外)2.5Y7/1灰白色～N3/0暗灰色 断)N4/0灰色	密　細かい長石微量含む	良好	断面のみ
27	44	瓦器 椀	2-2区 D5i～E2	2	—	(2.7)	高台 5.8	高台部 100%	外)ユビオサエ→ナデ,ナデ 磨滅のため調整不明瞭	内)N4/0灰色～2.5Y7/1灰白色 外)2.5Y5/1黄灰色 断)2.5Y8/1灰白色	密　細かい赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元 貼付高台
28	44	土師器 土釜	2-2区 D5p12-13	2	(23.7)	(3.6)	—	5%以下	端)ヨコナデ 内・外)工具によるナデか? 磨滅のため不明瞭	内・断)10YR8/3浅黄橙色 外)5Y7/1灰白色	密　細かい赤色酸化粒中量,1mm以下の石英少量含む	良好	反転復元
29	44	東播系 捏ね鉢	1-2区 D5g14-15	2	(26.8)	(2.4)	—	口縁部 5%	回転ナデ	内)2.5Y4/1黄灰色 外)2.5Y7/1灰白色～N5/0灰色 断)5Y7/1灰白色	密　細かい長石少量含む	良好	反転復元
30	45	土師器 皿	2-1区 C5q-r11～13	202	7.8	1.2	5.8	60%	端)ヨコナデ 内・外)ユビオサエ→ナデ	内・外・断)5YR7/6橙色	密　1～2mmの赤色酸化粒中量含む	良好	
31	45	瓦器 皿	2-1区	202	(8.0)	1.4	(6.7)	30%	端)ヨコナデ 内・外)ユビオサエ→ナデ	内外)N5/0暗灰 断)2.5Y7/1灰白色	密	良好	反転復元
32	45	土師器 皿	2-1区 C9～s 12-13	202	(7.4)	1.2	(5.9)	50%	端)ヨコナデ 内)ユビオサエ→ナデ 底)回転糸切痕	内)2.5YR6/6橙色～10YR7/1灰白 外)2.5YR6/6橙色～10YR7/3にぶい黄橙色 断)10R5/6赤色	密　細かいチャート(?)少量含む	良好	反転復元
33	45	瓦器 皿	2-1区	202	8.2	1.1	6.6	100%	端)ヨコナデ 内)ユビオサエ,板状工具によるナデ 外)ユビオサエ→ナデ,板状工具痕あり?	内・外・断)N5/0灰色～2.5Y7/1灰白色	密	良好	反転復元
34	45	土師器 皿	2-1区 C5q-r11～13	202	7.8	1.2	6.0	90%	端)ヨコナデ 内・外)ユビオサエ→ナデ	内)7.5YR7/6橙色～10YR7/4にぶい黄橙色 外)7.5YR7/6橙色～10YR8/2灰黄橙色 断)10YR7/4にぶい黄橙色	密　1～2mmの赤色酸化粒多く含む	良好	
35	45	瓦器 皿	2-1区 C5q-r11～13	202	8.4	2.0	7.0	60%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ幅0.1cm位,密 外)ユビオサエ→ナデ	内)N6/0灰色 外)N5/0灰色 断)5Y7/1灰白色	密	良好	一部反転復元
36	45	土師器 皿	2-1区 C5j11	202	12.0	2.4	—	90%	端)ヨコナデ 内・外)ユビオサエ→ナデ	内)7.5YR7/6橙色 外)7.5YR8/4浅黄橙色 断)7.5YR7/6橙色	密　1～2mmの赤色酸化粒中量含む	良好	反転復元
37	45	瓦器 皿	2-1区 C5q-r11～13	202	(8.2)	1.8	(7.0)	40%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ密 外)ユビオサエ→ナデ　磨滅のため調整不明瞭	内)N3/0暗灰色～N5/0灰色 外)N4/0灰色 断)5Y8/1灰白色	密	良好	一部反転復元
38	45	瓦器 椀	2-1区 C5q-r11～13	202	(14.0)	4.6	高台 5.0	40%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ幅0.2cm位,密 外)ユビオサエ→ナデ,ナデ	内)N3/0暗灰色 外)N4/0灰色～5Y7/1灰白色 断)5Y7/1灰白色	密	良好	一部反転復元 貼付高台
39	45	瓦器 椀	2-1区 C5q-r11～13	202	(14.9)	5.5	高台 4.7	30%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ幅0.25cm位,密 外)ユビオサエ→ナデ,ナデ	内)N3/0暗灰色 外)N3/0暗灰色～5Y7/1灰白色 断)7.5Y7/1灰白色	密	良好	一部反転復元 貼付高台
40	45	瓦器 椀	1-2区 C5e-j15-16	202	(14.1)	4.7	5.9	60%	端)ヨコナデ→ヘラミガキ 内)ヘラミガキ幅0.2cm位,粗, 外)ヘラミガキ,ユビオサエ→ナデ 見込)連結輪状文?	内・外)N3/0暗灰色 断)5Y6/1灰白色	密	良好	一部反転復元
41	45	瓦器 椀	2-1区	202	(14.2)	4.4	高台 4.8	70%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ幅0.1cm位,密 外)ユビオサエ→ナデ	内)N3/0暗灰色 外)N4/0灰色～2.5Y8/1灰白色 断)2.5Y8/1灰白色	密	良好	一部反転復元 貼付高台

掲載番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書掲載遺構No.	法量 口径cm	器高cm	底径cm	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
42	45	瓦質 鉢	2-1区 C5q-v11~13	202	(14.3)	3.4	高台 4.0	60%	縁:ヨコナデ 内:ハケ目ケ幅0.2cm程、やや擦? 外:ユビオサエとナデ、ナデ 磨滅のため不明瞭	内:N3/0暗灰色 外:N4/0灰色~5Y7/1灰白色 断:2.5Y8/2灰白色	密	良好	一部反転復元 脚付高台
43	45	瓦質 鉢	1-1区 C5e-s10・16	202	(14.0)	(3.7)	—	口縁部 25%	縁:ヨコナデ 内:ハケ目ケ幅0.15cm程、密 外:ユビオサエとナデ	内外:N4/0灰色 断:5Y8/0灰白色	密	良好	反転復元
44	45	灰釉陶器 碗	1-1区 C5o16	202	—	(2.4)	—	10%以下	内・外:施釉	釉:5Y7/1灰白色 露胎:N8/0灰白色	密	良好	断面のみ
45	45	弥生土器 高杯	2-1区 C5h~k11	202	—	(6.6)	—	脚部 50%	外:ヘラミガキ 内:接合痕・粘土ひも見られる 穿孔φ1.1cm3ヶ所	内:7.5YR7/6橙色 外:7.5YR7/4にぶい橙色~7.5YR7/6橙色 断:2.5Y8/2灰白色	密 細かい赤色酸化粒多量含む	良好	一部反転復元
46	45	土師器 土釜	2-1区	202	(23.0)	(6.6)	—	口縁部 20%	縁:ヨコナデ 内:板状工具によるナデ? 外:板状工具によるナデ、磨滅のため不明瞭	内:10YR6/2灰黄褐色~10YR5/1褐灰色 外:7.5YR6/3にぶい褐色~10YR4/1褐灰色 断:10YR6/2灰黄褐色	密 最大3mm程の赤石、1mm程の小石多く含む	良好	反転復元
47	45	須恵器 甕	1-1区 C5r-s10・16	202	—	(4.3)	—	5%以下	内:回転ナデ、同心円文 外:回転ナデ、タタキの後カキ目(8~13本-1cm)	内:N5/0灰色~N4/0灰色 外:5Y7/1灰白色 断:N7/0灰白色~N5/0灰色	密 細かい長石多量含む	良好	反転復元
49	46	弥生土器 鉢	1-1区 C5m15	竪穴建物 1	(10.5)	4.8	3.4	80%	内:工具によるナデか 磨滅のため調整不明瞭 外:タタキ、ハケナデ?	内:5YR7/6橙色~10YR8/4浅黄橙色 外:5YR6/6橙色~10YR7/4にぶい黄橙色 断:10YR6/4にぶい黄橙色	密 1~4mmのチャート少量、1~2mmの赤色酸化粒中量含む	良好	一部反転復元
50	46	土師器 小型器台	2-1区 C5j・k13・14	竪穴建物 2	(9.0)	(2.1)	—	口縁部 25%	縁:ヨコナデ? 内・外:ヘラミガキか 磨滅のため調整不明瞭	内・外・断:7.5YR6/6橙色	密 細かい長石中量含む	良好	反転復元
51	46	弥生土器 壺	2-1区 C5j・k13・14	竪穴建物 2	—	(2.2)	(4.8)	底部 25%	外:強いナデ、ナデ、 剥離のため不明瞭	内:2.5Y4/1黄灰色 外:5YR6/6橙色	やや粗 1~5mm大の石英・長石・片岩・赤色鉄粒含む	やや軟	反転復元
52	46	弥生土器 甕	1-1区 C5j14・15	竪穴建物 2	—	(2.4)	4.1	底部 100%	内:工具によるナデ 外:タタキ 底:黒斑	内:2.5Y4/1黄灰色 外:2.5Y6/2灰黄色~7.5YR6/4にぶい橙色~N1.5/0黒色 断:10YR6/4にぶい黄橙色	密 1~4mmの片岩少量、1~4mmの石英多量含む	良好	一部反転復元
54	46	土師器 甕	1-1区 C5j14	竪穴建物 5	(9.7)	(2.6)	—	5%以下	縁:ヨコナデ 内:板状工具によるナデ 外:強めのハケナデ	内:10YR7/4にぶい黄橙色 外:2.5Y8/3淡黄色 断:10YR6/6明黄褐色	密 1~5mmの石英中量、細かい赤色酸化粒多量含む	良好	反転復元
55	46	土師器 甕	1-1区 C5j14	竪穴建物 5	(24.5)	(6.6)	—	口縁部 13%	縁:ヨコナデ 磨滅のため調整不明瞭	内:2.5Y5/1黄灰色~10YR8/2灰白色~5YR7/6橙色 外:10YR7/6明黄褐色 断:10YR6/6明黄褐色	密 1~3mmの赤色酸化粒多量含む	良好	反転復元
57	46	土師器 甕	1-1区 C5g15	竪穴建物 7	17.0	(16.8)	—	40%	縁:ヨコナデ 内:ユビオサエ、ハケナデ?、剥離のため調整不明瞭 外:タタキ後細かなハケ	内:10YR7/4にぶい黄橙色 外:10YR8/3浅黄橙色	粗 1~5mm大の長石・石英・片岩・赤色鉄粒多く含む	やや軟	一部反転復元 [illegible]
58	46	土師器 小型丸底土器	1-1区 C5k15 C5g14・15	竪穴建物 7	(11.3)	5.3	(2.0)	45%	内・外:ヨコナデ、ナデ	7.5YR7/6橙色	密 1~4mm大の石英・長石・赤色鉄粒含む	良好	反転復元
59	46	土師器 小型鉢	1-1区 C5g15	竪穴建物 7	(13.7)	5.5	脚部 5.4	脚部 30%	縁:ヨコナデ 内:ヘラミガキ 外:ナデ?、ハケナデ?、ナデ	内・外:7.5YR7/4にぶい橙色 断:10YR7/3にぶい黄橙色	密 1~3mmの赤色酸化粒中量含む	良好	一部反転復元
60	46	土師器 台付鉢	1-1区 C5g15	竪穴建物 7	(9.3)	7.2	脚部 (7.5)	20%	縁:ヨコナデ 内:しぼり痕? 外:ヘラミガキか? 磨滅・剥離のため調整不明瞭	内:10YR8/2灰白色 外:5YR6/6橙色 断:10YR5/3にぶい黄褐色~N1.5/0黒色	密 2~4mmの片岩少量、1~5mmの石英多量、1mm程のチャート微量含む	良好	一部反転復元
61	46	土師器 高杯	1-1区 C5k15 C5g14・15	竪穴建物 7	—	(5.0)	(9.4)	脚部 60%	縁:ナデ 内:ナデ 外:強いヨコナデ、工具痕あり 穿孔3ヶ所	7.5YR7/6橙色	やや粗 1~2mm大のチャート・石英・長石・赤色鉄粒含む	良好	一部反転復元
62	46	土師器 高杯	1-1区 C5g15	竪穴建物 7	13.6	10.7	脚部 (14.9)	70%	内:ヘラナデ? 外:ナデ 磨滅・剥離のため調整不明瞭 穿孔φ1.2cm4ヶ所	内:7.5YR7/6橙色 外:10YR8/6黄橙色	密 1~5mmの石英中量、1~3mmの赤色酸化粒中量含む	良好	一部反転復元
63	46	土師器 甕	1-1区 C5g14	竪穴建物 9	(14.2)	(5.1)	—	口縁部 13%	縁:ヨコナデ 内:ヨコ方向のヘラケズリ 外:磨滅のため不明瞭	10YR8/3浅黄橙色	やや粗 2mm大のチャート・長石・赤色鉄粒含む	やや軟	反転復元
64	46	土師器 甕	1-1区 C5g14	竪穴建物 9	—	(16.8)	—	20%	内:板状の圧痕(ヘラケズリか) 内外とも剥離が著しく調整不明瞭、被熱痕あり	5YR7/4にぶい橙色,10YR6/4にぶい黄橙色	密 1mm大の長石・2~6mm大の赤色鉄粒含む	軟	反転復元
65	46	弥生土器 甕	1-1区 C5f14	竪穴建物 9	—	(4.5)	(3.8)	底部 100%	内:ユビオサエ、剥離のため不明瞭 外:タタキ、ユビオサエ、ナデ	2.5YR5/6明褐色	粗 0.2~2.3mm大の石英・長石・片岩・赤色鉄粒多く含む	良好	一部反転復元
66	46	弥生土器 甕	1-1区 C5f14	竪穴建物 9	—	(1.9)	3.8	底部 100%	内:放射状の指頭圧痕 外:タタキ、繊維の圧痕?	内:10YR8/3浅黄橙色 外:5YR6/4にぶい橙色	密	良好	
67	46	弥生土器 甕	1-1区 C5g14	竪穴建物 9	—	(1.6)	3.0	底部 90%	内:放射状の指頭圧痕 外:タタキ、ナデ、ユビオサエ	7.5YR7/6橙色	密 3mmの石英粒含む	やや軟	一部反転復元
68	46	土師器 小型丸底土器	1-1区 C5g14	竪穴建物 9	(10.6)	7.1	—	70%	内・外:ヘラミガキ 黒斑有	7.5YR7/6橙色,10YR4/1褐灰色	密 3mmのチャート・赤色鉄粒含む	やや軟	反転復元
69	46	弥生土器 高杯	1-1区 C5f14	竪穴建物 9	—	(6.0)	—	30%	内:ヘラミガキ、ナデ? 外:[illegible]、ヘラミガキ 穿孔あり	7.5YR6/6橙色	密 1mm大の赤色鉄粒含む	良好	反転復元
70	46	土師器 高杯	1-1区 C5g14	竪穴建物 9	(15.7)	(5.9)	—	杯部 40%	内・外:ヘラミガキ	内:10YR3/1黒褐色 外:10YR6/4にぶい黄橙色	密	良好	反転復元
71	46	土師器 高杯	1-1区 C5f・g14	竪穴建物 9	—	(7.0)	(12.4)	脚部 40%	縁:ヨコナデ 内:強いナデ、剥離のため不明瞭 外:ヘラミガキ、ハガレ 穿孔φ1.0cm3ヶ所	5YR4/6赤褐色	密 1mmの長石・石英粒含む	良好	反転復元
72	47	弥生土器 小型甕	1-1区 C5f14	竪穴建物 10	(9.0)	8.6	3.7	60%	縁:ヨコナデ? 内:工具によるナデか(きれいにナデられている)、ユビオサエ 外:タタキ	内:7.5YR6/4にぶい橙色 外:2.5Y7/4浅黄色~10YR6/4にぶい黄橙色 断:10YR7/4にぶい黄橙色	密 1~3mmの赤色酸化粒少量、細かい雲母中量含む	良好	一部反転復元
73	47	弥生土器 甕	2-1区 C5f12・13	竪穴建物 10	—	(3.3)	3.9	底部 100%	内:工具によるナデか、磨滅のため調整不明瞭 外:タタキ	内:10YR6/3にぶい黄橙色 外断:7.5YR5/6明褐色	やや粗 1~10mmの石英多量、1~5mm程の斜長石中量、2mm程の角閃石微量含む	良好	一部反転復元
74	47	弥生土器 甕	2-1区 C5g13	竪穴建物 10	—	(4.0)	3.7	底部 100%	内・外:工具によるナデ? 底:黒斑	内:5YR5/8明赤褐色 外:10YR6/6明黄褐色~N2/0黒色 断:5YR6/8橙色	密 1~4mmの石英少量、1~5mm程の赤色酸化粒多量含む	良好	一部反転復元
75	47	弥生土器 壺	2-1区 C5f13	竪穴建物 10	—	(2.0)	4.6	底部 100%	内:板状工具によるナデ 外:ナデ	内:2.5Y5/1黄灰色 外:7.5YR6/6橙色~10YR8/2灰白色 断:7.5YR4/4褐色	密 1~3mmの石英中量、1~2mm程の赤色酸化粒多量含む	良好	一部反転復元
76	47	弥生土器 高杯	1-1区 C5f14	竪穴建物 10	12.8	(9.5)	—	70%	外:ヘラミガキ、磨滅・剥離のため不明瞭 内:ヘラミガキ、ヘラミガキか?しぼり痕	内外断:7.5YR7/6橙色~5YR6/6橙色	密 1~3mmの石英少量、1~2mmの赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元
77	47	土師器 製塩土器	3-1区 C5f13	竪穴建物 10	—	(3.3)	(3.7)	底部 50%	内:ナデ? 外:ナデ、ユビナデ	内:2.5Y8/3淡黄色 外:10YR7/4にぶい黄橙色~2.5YR7/4淡赤橙色 断:10YR5/2灰黄褐色	密 細かい赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
79	47	弥生土器 鉢	2-1区 C5d10・11	竪穴建物 11	—	(4.0)	(3.6)	底部 30%	内:工具によるナデか 外:タタキ後ナデ、ユビオサエ 磨滅のため調整不明瞭	内:7.5YR6/4にぶい橙色 外:5YR6/6橙色 断:10YR7/4にぶい黄橙色	密 1~4mmの片岩多く、1~6mmの石英中量含む	良好	反転復元
80	47	弥生土器 鉢	2-1区 C5d10・11	竪穴建物 11	—	(2.7)	(3.7)	底部 100%	内:工具によるナデか 外:ユビナデ、ナデ 磨滅のため調整不明瞭	内:10YR8/3浅黄橙色 外:7.5YR7/4にぶい橙色~7.5YR6/6橙色 断:7.5YR7/4にぶい橙色	密 1~2mmの赤色酸化粒多量含む	良好	一部反転復元
81	47	弥生土器 広口壺	1-2区 C5e・f16	竪穴建物 12	(12.8)	(7.6)	—	口縁部 40%	縁:ヨコナデ 磨滅のため調整不明瞭	内・外・断:7.5YR6/6橙色	密 細かい長石・石英・チャート多量含む	良好	反転復元
82	47	土師器 二重口縁 壺	3-2区 C5h19	竪穴建物 13	—	(2.6)	—	5%以下	磨滅のため調整不明瞭 [illegible]	内:10YR7/4にぶい黄橙色 外:10YR5/2灰黄褐色~7.5YR6/4にぶい橙色 断:10YR6/4にぶい黄橙色	密 1~2mmの石英少量、1mm程の赤色酸化粒少量、細かい雲母少量含む	良好	断面のみ
83	47	弥生土器 二重口縁 壺	3-2区 C5a12	竪穴建物 13	—	—	—	5%以下	内:板ナデ 外:キザミ目?、擬凹線?7本-9mm、ヘラミガキか(単位不明)	内:10YR6/2灰黄褐色 外・断:7.5YR6/6橙色	密 1~2mmの石英微量含む	良好	断面のみ
84	47	弥生土器 壺	2-2区 C5e・h12	竪穴建物 13	—	(5.9)	—	40%	内:ヘラミガキ幅0.1~0.2cm程?、密、板状工具によるナデ? 外:ヘラミガキ幅0.15cm程、密であるが雑	内:5YR6/6橙色~10YR7/3にぶい黄橙色 外・断:5YR6/6橙色	密 2mmのチャート少量含む	良好	
85	47	弥生土器 壺	2-2区 C5a12・13	竪穴建物 13	—	(3.9)	3.7	底部 100%	外:ヘラミガキか? 磨滅のため調整不明瞭	内:5Y7/1灰白色 外:2.5Y3/1黒褐色 断:N5/0灰色	密 細かい石英中量含む	良好	一部反転復元
86	47	弥生土器 壺	2-2区 C5e・h12	竪穴建物 13	—	(1.7)	3.0	底部 100%	内:板ナデ? 外:ヘラミガキ幅0.15cm程、粗 黒斑	内:5YR7/6橙色~10YR7/3にぶい黄橙色 外:5YR6/6橙色~10YR7/4にぶい黄橙色 断:5YR7/6橙色	密 2mm程のチャート微量、細かい赤色酸化粒微量含む	良好	

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書内遺構番号 No.	法量 口径cm	高さcm	底径cm	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
87	47	弥生土器 甕	2-2区 C5a12·13	竪穴建物 13	—	(2.1)	(1.2)	5%以下	内)板状工具によるナデか 外)タタキ	内)7.5YR6/4にぶい橙色 外)10YR5/2灰黄褐色～10YR5/1褐灰色 断)7.5YR6/6橙色	密　1mm以下の赤色酸化粒少量,雲母を少量含む	良好	反転復元
88	47	弥生土器 甕	2-2区 C5b12·13	竪穴建物 13	—	(2.5)	3.9	底部 100%	内)板状工具によるナデ 外)タタキ　黒斑	内)2.5Y7/2灰黄色 外·断)10YR7/4にぶい黄橙色	密　細かい赤色酸化粒中量,5~10mm以下の砂岩?微量含む	良好	一部反転復元
89	47	弥生土器 甕	2-2区 C5a12·13	竪穴建物 13	—	(1.9)	(3.9)	底部 50%	外)タタキ後ナデ消しているか 磨滅のため調整不明瞭	内)10YR5/2灰黄褐色 外)5YR5/3にぶい赤褐色 断)5YR5/6明赤褐色	密　1~2mm以下の片岩微量,細かい石英中量含む	良好	反転復元
90	47	弥生土器 高坏	2-2区 C5b12·13	竪穴建物 13	(11.3)	(7.3)	—	坏部 40%	内)板状工具によるナデ 外)ナデ,ハケ?,しぼり痕 剥離のため調整不明瞭	内)2YR6/8橙色 外)7.5YR6/6橙色 断)7.5YR7/4にぶい橙色	密　最大3mmの片岩?微量,1~2mmの赤色酸化粒多量,1~2mmのチャート少量含む	良好	一部反転復元
91	47	弥生土器 器台	2-2区 C5b13	竪穴建物 13	—	(6.2)	脚部 (9.8)	脚部 60%	磨滅のため調整不明瞭 穿孔φ1.1cm5ヶ所	内)2YR6/8橙色 外)2YR7/6橙色~5YR6/6橙色 断)7.5YR7/3にぶい橙色	密　1~3mmの石英·チャート少量含む	良好	
92	47	弥生土器 甕	2-2区 C5c11	竪穴建物 14	(14.0)	(4.4)	—	口縁部 15%	端)ヨコナデ 内)板状工具によるナデ 外)タタキ	内)7.5YR6/6橙色~10YR5/2灰黄褐色 外·断)7.5YR5/6明褐色	密　1~5mm以下の片岩少量,1~2mm以下の赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
93	47	弥生土器 壺	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 14	(15.4)	(5.9)	—	口縁部 30%	内·外)磨滅著しく調整不明瞭	7.5YR6/6橙色	やや粗　1~3mmの砂粒やや多く含む	軟	反転復元
94	47	弥生土器 鉢	2-2区 C5c11	竪穴建物 14	—	(3.3)	4.4	底部 100%	内)ナデか?,板状圧痕 外)ナデ　黒斑	10YR7/4にぶい黄橙色	密　1~4mm大のチャート·石英·長石·赤色斑粒·雲母粒含む	良好	一部反転復元
95	47	弥生土器 鉢	2-2区 C5c11	竪穴建物 14	—	(3.7)	3.7~4.0	底部 100%	内)ナデ,ハケ?,指ナデ? 外)タタキ,ユビオサエ 底)焼成前穿孔(内→外)	7.5YR6/6橙色,5Y3/1オリーブ黒色	密　1~2mm大の長石·赤色斑粒·雲母粒含む	良好	一部反転復元
96	47	二重口縁 壺	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	(19.7)	(4.6)	—	口縁部 5%以下	内)ユビオサエ? 磨滅のため調整不明瞭	内)2.5Y8/3淡黄色 外)10YR7/4にぶい黄橙色 断)2.5Y7/1灰白色	密　1mm以下の石英少量含む	良好	反転復元 旧内番
97	47	壺	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	—	(5.7)	—	5%以下	内)ナデ,ユビオサエ 外)ナデ,タタキ 磨滅のため調整不明瞭	内·外)10YR8/2灰白色 断)2.5Y7/2灰黄色	密　1~4mmの石英中量含む	良好	反転復元
98	47	弥生土器 壺	2-2区 C5b12	竪穴建物 15	—	(6.7)	—	頸部 100%	内)1.2×0.8cmの補修孔含む 内·外)磨滅のため調整不明瞭	7.5YR7/6橙色	やや粗　2~7mmの片岩·長石·石英·雲母·赤色斑粒含む	軟	一部反転復元
99	47	弥生土器 甕	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	—	(2.5)	3.4	底部 20%	内)工具によるナデか,工具によるオサエか? 外)タタキ後ヘラミガキ幅1.3~0.5cm位,やや粗? 磨滅のため調整不明瞭	内)5YR6/6橙色 外)5YR7/6橙色 断)10YR7/6明黄褐色	密　最大7mm位の片岩少量,1~2mmの赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元
100	47	弥生土器 壺	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	—	(3.7)	3.2	底部 100%	内)工具によるナデか 外)ユビオサエ 磨滅のため調整不明瞭　黒斑	内)7.5YR6/6橙色 外)7.5YR7/6橙色 断)7.5YR6/6橙色	密　1~4mmの石英少量,1mm以下の赤色酸化粒微量含む	良好	一部反転復元
101	47	弥生土器 壺	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	—	(4.3)	5.2	底部 60%	内)ナデ 外)平行タタキ後ハケ後ヘラミガキ,強いオサエ,ナデ	内)2.5Y4/1黄灰色 外)7.5YR5/4にぶい褐色	密　3mm大の長石·石英·雲母粒含む	良好	
102	47	弥生土器 甕	2-2区 C5c12	竪穴建物 15	(15.6)	(7.6)	—	口縁部 25%	端)ヨコナデ 内)ナデ,指ナデ 外)タタキ	7.5YR5/4にぶい褐色	密　2~5mmの長石·石英·雲母粒含む	軟	反転復元
103	47	弥生土器 甕	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	—	(5.0)	3.3	底部 90%	内)板状工具によるナデ 外)タタキ　黒斑	内·断)7.5YR6/6橙色 外)2.5YR6/6橙色~7.5YR5/3にぶい褐色	密　1~3mmのチャート中量,1~4mmの石英中量含む	良好	反転復元
104	47	土師器 壺	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	—	(21.3)	—	40%	内)粗いナデ 外)剥離著しい,被熱痕あり	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)7.5YR7/6橙色	やや粗　1~6mmの片岩·長石·石英·雲母粒含む	軟	一部反転復元
105	47	弥生土器 高坏	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	—	(4.9)	脚部 12.2	脚部 90%	外)ヘラミガキか? 磨滅のため調整不明瞭　穿孔φ1.2cm4ヶ所	内)7.5YR6/8橙色 外·断)7.5YR7/6橙色	密　2~10mm以下の片岩少量,1~5mm以下の石英少量含む	良好	一部反転復元
106	47	高坏	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	—	(3.9)	(15.3)	脚裾部 25%	内·外)磨滅のため調整不明瞭 穿孔φ1.7cm4ヶ所?	内)5YR5/6明赤褐色~10YR6/4にぶい黄橙色 外)5YR5/6明赤褐色 断)7.5YR4/4褐色	密　1~6mmの石英少量,1~5mmの片岩少量含む	良好	一部反転復元 旧内番
107	47	弥生土器 鉢	2-1区 C5b·c11	竪穴建物 15	(12.3)	5.8	3.2	60%	内)板状工具によるナデ 外)タタキ　黒斑	内)7.5YR6/4にぶい橙色 外)7.5YR6/6橙色~10YR7/4にぶい黄橙色 断)7.5YR7/6橙色	密　1~7mmの片岩少量,1mm以下の赤色酸化粒中量含む	良好	一部反転復元
108	48	弥生土器 鉢	2-2区 C5c11·12	竪穴建物 15	(27.6)	(6.2)	—	口縁部 20%	内)ナデ? 外)ヘラミガキか? 磨滅のため調整不明瞭	内·外)5YR6/6橙色 断)10YR5/3にぶい黄褐色	密　1~3mmの赤色酸化粒中量,1~5mmの片岩少量含む	良好	反転復元
109	48	土師器 鉢	2-2区 C5c12	竪穴建物 15	(35.2)	(14.2)	—	口縁部 15%	端)ヨコナデ 内)ナデ 外)強いヨコナデ,オサエ　全面剥離	7.5YR7/6橙色	密　赤色斑粒·雲母粒含む	軟	反転復元
110	48	壺	2-2区 C5c13	竪穴建物 16	(12.8)	(7.9)	—	口縁部 60%	端)ヨコナデ 内)ミガキ,ユビオサエ,しぼり痕 外)タテ方向のミガキ,ミガキ　黒斑	5YR5/6明赤褐色	密	良好	一部反転復元
111	48	弥生土器 壺	2-2区 C5c12	竪穴建物 16	—	(2.4)	—	口縁部 3%	外)三条沈線,竹管文	5YR5/8明赤褐色	密	軟	断面のみ
112	48	弥生土器 壺	2-2区 C5c12	竪穴建物 16	—	(2.7)	3.8	底部 100%	内·外)磨滅のため調整不明瞭	7.5YR6/6橙色	密　9mmの結晶片岩少量含む	軟	一部反転復元
113	48	弥生土器 壺 ミニチュア	2-2区 C5b·c13	竪穴建物 16	—	(4.9)	(3.6)	底部 40%	内)ナデ,放射状の板ナデ 外)ユビオサエ,ナデ　剥離のため調整不明瞭	内)2.5Y2/1黒色 外)2.5Y6/3にぶい黄色~2.5Y3/1黒褐色	密	軟	反転復元
114	48	土師器 把手	2-2区 C3c12	竪穴建物 16	—	(12.8)	—	把手 100%	外)一部にハケが残る 内·外)磨滅著しい	5YR6/8橙色	密　2~4mmの長石·赤色斑粒含む	軟	
115	48	土師器 二重口縁 壺	2-2区 B·C 5c·a11	竪穴建物 17	(23.1)	(9.0)	—	口縁部 40%	外)強いナデ,ハガレ 剥離のため調整不明瞭	7.5YR7/8黄橙色	やや粗　1~8mmの長石·石英·片岩·赤色斑粒含む	軟	反転復元
116	48	土師器 甕	2-2区 D5a11	竪穴建物 17	—	(4.7)	—	—	内·外)ヨコナデ	内)10YR7/3にぶい黄橙色 外)7.5Y2/1黒色	密	良好	
117	48	土師器 高坏	2-3区 B·C5c·a11	竪穴建物 17	—	(6.1)	—	—	内)ヘラミガキ,剥離のため不明瞭 外)ヘラミガキ,剥離のため不明瞭	10YR7/4にぶい黄橙色	密	軟	一部反転復元
118	48	弥生土器 台付鉢	2-2区 D5a11	竪穴建物 17	—	(4.2)	(4.8)	20%	内)ヘラミガキ(単位不明瞭) 外)ヘラミガキ幅0.3cm位,やや粗?,ナデ	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)5YR6/6橙色~10YR7/4にぶい黄橙色 断)10YR7/3にぶい黄橙色	密　1~3mmの赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元
119	48	土師器 台付鉢	2-2区 B·C5 γ·a11	竪穴建物 17	—	(4.3)	(2.2)	底部のみ 20%	内)ミガキ 外)ミガキ,粘土圧痕,ナデ	7.5YR7/4にぶい橙色	密　1mmのチャート·石英·長石·赤色斑粒含む		反転復元
120	48	土師器 製塩土器	2-2区 D5a11	竪穴建物 17	—	(3.6)	(3.6)	底部のみ 60%	内)調整不明瞭 外)ユビオサエ,ナデ	5YR7/6橙色,2.5Y8/3淡黄色	粗　1mmのチャート·石英·長石多く含む	良好	反転復元
121	48	土師器 小型鉢	2-2区 D5a11	竪穴建物 17	(6.0)	4.4	1.9	90%	内)ハケ目 剥離のため調整不明瞭	2.5Y6/4にぶい黄色	密	軟	
122	48	土師器 甕	2-2区 D5a13	竪穴建物 18	(12.5)	(7.0)	—	口縁部 25%	端)ヨコナデ 内)ケズリ 外)剥離のため不明瞭	7.5YR7/6橙色	密　1~3mmの石英·長石含む	軟	反転復元
123	48	土師器 高坏	2-2区 D5a13	竪穴建物 18	—	(4.2)	—	—	内)ヘラミガキ 外)ヘラミガキ,脚部整形しヘラミガキ後内部穿孔,穿孔φ1.3cm4ヶ所	10YR5/2灰黄褐色	密　1mmの長石·石英·赤色斑粒含む	やや軟	反転復元
124	48	弥生土器 壺	2-2区 D5w·a13	竪穴建物 18	—	(2.8)	2.4	底部 100%	内·外)剥離のため調整不明瞭	7.5YR5/6明褐色	密　3mmの長石·片岩·石英含む	軟	一部反転復元
125	48	弥生土器 甕	2-2区 D5a13	竪穴建物 18	—	(3.6)	4.3	底部 100%	内)剥離のため不明瞭 外)タタキ,ナデ　黒斑	10YR7/6明黄褐色	密	やや軟	
126	48	弥生土器 甕	2-2区 D5w·a13	竪穴建物 18	—	(2.7)	(6.0)	底部 40%	内)剥離のため不明瞭 外)タタキ,ナデ 底)未調整	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)2.5Y3/1黒褐色	密　5mmの長石·赤色斑粒含む	軟	反転復元
130	48	弥生土器 壺	2-2区 D5a12·13	竪穴建物 19	(12.2)	(1.8)	—	口縁部 40%	磨滅のため調整不明瞭 浮文貼付	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)5YR7/6橙色 断)7.5Y6/1灰色	密　細かい赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
131	48	弥生土器 甕	2-2区 D5a11·12	竪穴建物 19	—	(2.1)	3.4	底部 100%	内)剥離のため調整不明瞭 外)タタキ,ナデ	7.5YR5/6明褐色	やや粗　2~5mmの結晶片岩·片岩·雲母·赤色斑粒含む	やや軟	一部反転復元
132	48	土師器 鉢	2-2区 D5a11·12	竪穴建物 19	—	(3.0)	3.0	10%	内)剥離のため調整不明瞭 外)ユビオサエ,剥離のため調整不明瞭	7.5YR7/6橙色	密　1~3mmのチャート·長石含む	軟	一部反転復元
133	48	弥生土器 甕	2-2区 D5a11·12	竪穴建物 19	—	(2.7)	—	5%以下	内)ヨコナデ,ナデ 端·外)ヨコナデ　口縁内面に刻印?	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)10YR6/3にぶい黄橙色 断)10YR6/2灰黄褐色	密　細かい赤色酸化粒少量含む	良好	断面のみ

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書所載遺構No.	法量 口径cm	法量 高さcm	法量 底径cm	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
134	48	弥生土器 鉢	2-2区 II3y12	竪穴建物 19	15.9	10.0	6.8	90%	内:板状工具、剥離のため不明瞭 外:ナデ、強いユビオサエ、ナデ、剥離のため不明瞭 黒斑	10YR8/4浅黄橙色	密 1~3mmのチャート・長石・石英含む	軟	
135	48	土師器 鉢	2-2区 II3y12-13	竪穴建物 19	(16.4)	8.7	(3.8)	90%	内:剥離のため調整不明瞭 外:ユビオサエ、剥離のため調整不明瞭	7.5YR6/6橙色	密 7mmのチャート少量含む	軟	一部反転復元
136	49	弥生土器 高坏	2-2区 II3y12	竪穴建物 19	—	(10.9)	脚径 (15.0)	30%	内:ハケ目ヤキか?、しぼり痕?、未調整? 摩滅のため調整不明瞭 穿孔φ1.7cm(2ヶ所?)	内:2.5YR6/8橙色 外:7.5YR6/6橙色 断:10YR7/4にぶい黄橙色	密 1~4mmの石英・チャート少量、1~3mmの赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元
137	49	弥生土器 高坏	2-2区 II3y12	竪穴建物 19	—	(7.8)	—	40%	内:工具によるナデか 外:摩滅のため調整不明瞭 穿孔有	内:7.5YR7/6橙色 外:5YR6/6橙色 断:10YR5/1褐灰色	密 1~2mmの石英・チャート中量含む	良好	一部反転復元
138	49	弥生土器 高坏	2-2区 II3y12-13	竪穴建物 19	—	(7.0)	—	30%	内:ハケ目ヤキか、ハケナデ?、しぼり痕 摩滅のため調整不明瞭 穿孔有	内:5YR6/6橙色 外:7.5YR6/6橙色 断:7.5YR6/4にぶい橙色	密 1~2mmの赤色酸化粒多量含む	良好	一部反転復元
139	49	土師器 器台	2-2区 II3y11-12 C3a11	竪穴建物 19	(10.6)	(3.1)	—	体部 30%	内:しぼり痕 外:ハケ目ヤキ 摩滅のため調整不明瞭	内:10YR8/3浅黄橙色 外:10YR6/6明黄褐色 断:2.5Y4/1黄灰色	密 1~3mmの石英微量含む	良好	反転復元 布留古
140	49	土師器 器台	2-2区 II3y12-13	竪穴建物 19	—	(5.7)	13.2	脚部 95%	摩滅のため調整不明瞭	内:2.5YR6/3にぶい橙色~5Y7/1灰白色 外:7.5YR6/4にぶい橙色~2.5Y7/2灰黄色 断:10YR7/3にぶい黄橙色	密 1~3mmの石英少量、最大3mmの片岩微量含む	良好	一部反転復元
141	49	弥生土器 広口壺	1-2区 II3y14	竪穴建物 20	—	(1.3)	—	—	端:棒状工具圧痕文、円形浮文 外:ヨコナデ、ハケ目ヤキ	5YR6/6橙色	密 1~2mmの石英・長石・赤色酸粒含む	良好	
142	49	弥生土器 広口壺	1-2区 II3x-y14-15	竪穴建物 20	—	(3.2)	—	口縁部 20%	端:円形浮文φ0.7cm 内・外:剥離のため調整不明瞭	7.5YR6/6橙色	やや粗 1~3mm長石・石英・赤色酸粒含む	軟	反転復元
143	49	弥生土器 壺	1-2区 II3x-y14	竪穴建物 20	(28.8)	(4.2)	—	口縁部 20%	端:ヨコナデ 内・外:強いヨコナデ	内:7.5YR5/6明褐色 外:2.5Y3/2黒褐色	粗 2~4mm大の片岩・長石・石英・雲母粒多く含む	軟	反転復元
144	49	弥生土器 高坏	1-2区 II3y14-15	竪穴建物 20	—	(5.4)	—	30%	外:ハケ目ヤキ 穿孔φ1.1cm 2ヶ所 内外とも剥離のため調整不明瞭	7.5YR6/4にぶい橙色	やや粗 2~5mm大の長石・チャート・赤色酸粒含む	軟	反転復元
145	49	弥生土器 高坏	1-2区 II3y14-15	竪穴建物 20	—	(6.5)	—	30%	剥離のため調整不明瞭 穿孔φ1.3cm	7.5YR7/6橙色	やや粗 3mm大の石英・長石やや多く含む	軟	反転復元
146	49	弥生土器 台付鉢	1-2区 II3y14-15	竪穴建物 20	—	(6.2)	(4.6)	30%	端:ナデ 内:タテ方向のハケ目ヤキ 外:ヨコ方向のハケ目ヤキ、ユビオサエ、ハケ目ヤキ 剥離著しい 黒斑	7.5YR7/4にぶい橙色	やや粗 2~4mm大の長石・石英・チャート・赤色酸粒・雲母粒含む	軟	反転復元
147	49	弥生土器 台付鉢	1-2区 II3y14-15	竪穴建物 20	—	(5.8)	—	20%	外:ハケ目ヤキ、ハケ状工具圧痕、ナデ? 剥離のため調整不明瞭	外:5YR7/6橙色 断:10YR7/4にぶい黄橙色	密 2~3mm大の赤色酸粒多く含む	良	反転復元
148	49	弥生土器 高坏	1-2区 II3a15	竪穴建物 21	—	(6.6)	—	60%	内:強いナデ、剥離のため不明瞭 外:ヨコ方向のハケ目ヤキ、ナデ後ナデ方向のハケ目ヤキ	内:5YR6/6橙色 外:7.5YR7/6橙色	やや粗 2~4mm大の石英・長石・雲母粒含む	軟	反転復元
150	49	土師器 二重口縁壺	2-2区 II3v11	竪穴建物 22	(23.4)	(8.2)	—	口縁部 35%	端:ヨコナデ、剥離のため調整不明瞭 内:ハケ目ヤキ 外:竹管文、ヨコナデ、強いナデ、ハケ目ヤキ	5YR5/4にぶい赤褐色	やや粗 1~4mmのチャート・長石粒含む	やや軟	反転復元 布留古
151	49	壺	2-2区 II3v11-12	竪穴建物 22	(7.2)	(2.1)	—	口縁部 40%	剥離のため調整不明瞭	内:5Y6/6オリーブ色 外:5Y6/1灰色、2.5Y8/4浅黄橙色	やや粗 1~2mmの石英・長石・チャート・雲母粒含む	軟	反転復元
152	49	土師器 壺	2-2区 II3v11	竪穴建物 22	—	(3.0)	—	胴部 60%	剥離のため調整不明瞭	内:7.5YR6/6橙色 外:5YR6/6橙色	密 1mm以下の石英・長石含む	軟	反転復元
153	49	土師器 壺	2-2区 II3v11	竪穴建物 22	—	(12.2)	—	80%	内:ユビオサエ、ナデ、板ナデ? 外:ハケ目ヤキ 剥離のため調整不明瞭	7.5YR7/8黄橙色	密	軟	一部反転復元 布留古
154	49	土師器 壺	2-2区 II3w11-12	竪穴建物 22	(14.2)	(3.4)	—	口縁部 10%	端・外:ヨコナデ 内:ナデ、ケズリ	7.5YR5/4にぶい褐色	密	良好	反転復元
155	49	土師器 壺	2-2区 II3v-w11	竪穴建物 22	—	(2.7)	3.0	底部 100%	内:ユビオサエ、剥離のため調整不明瞭 外:強いナデ、ナデ、不明 黒斑	10YR7/4にぶい黄橙色	密 1~3mmの長石・石英・雲母粒含む	軟	一部反転復元
156	49	土師器 壺	2-2区 II3v-w11	竪穴建物 22	—	(2.6)	—	—	内:ナデ?、剥離のため調整不明瞭 外:強いナデ 黒斑	内:5YR6/6橙色 外:10YR7/4にぶい黄橙色	密 赤色酸粒含む	良好	
157	49	土師器 高坏	2-2区 II3v11	竪穴建物 22	(13.8)	(4.8)	—	口縁部 70%	剥離のため調整不明瞭	7.5YR7/6橙色	密	軟	
158	49	土師器 高坏	2-2区 II3w11	竪穴建物 22	—	(10.2)	—	40%	剥離のため調整不明瞭 穿孔φ1.4cm(3ヶ所)	10YR6/4にぶい黄橙色	やや粗 2~7mmの片岩・長石・石英粒含む	軟	反転復元 布留古
159	49	土師器 高坏	2-2区 II3w11-12	竪穴建物 22	—	(4.3)	—	—	外:ユビオサエ 内・外:剥離のため調整不明瞭	5YR6/6橙色	やや粗 2~7mmの片岩・長石・石英・赤色酸粒含む	軟	一部反転復元
160	49	土師器 器台	2-2区 II3w11-12	竪穴建物 22	—	(5.2)	—	—	内:板状工具痕 内・外:剥離のため調整不明瞭 穿孔φ1.0cm(3ヶ所)	5YR6/6橙色	やや粗 1~4mmの長石・石英・チャート含む	軟	一部反転復元
162	49	土師器 製塩土器	2-2区 II3a10	竪穴建物 25	—	(3.0)	—	—	外:ユビオサエ 内・外:剥離のため調整不明瞭	内:10YR8/4浅黄橙色 外:10YR8/3浅黄橙色、5YR7/3にぶい橙色	密 赤色酸粒少量含む	軟	一部反転復元
163	49	土師器 製塩土器	2-2区 II3a10-11	竪穴建物 25	—	(4.0)	(4.0)	底部 40%	端:ナデ 内:ナデ? 外:タタキ、ユビオサエ	内:10YR8/3浅黄橙色 外:2.5YR7/4淡赤橙色~7.5YR7/6橙色	密 1mmの赤色酸粒多く含む	軟	反転復元
165	49	土師器 壺	2-2区 II3w10	竪穴建物 26	—	(3.2)	—	胴部 40%	内:強いナデ、ユビオサエ 外:ユビオサエ後ヨコナデ、ハケ目ヤキ	5YR7/6橙色	密 2~6mmの砂粒少量含む、赤色酸粒含む	良好	反転復元
166	49	土師器 壺	2-2区 II3a10	竪穴建物 26	(16.0)	(4.3)	—	口縁部 3%以下	端:ヨコナデ 内:ヘラケズリ 外:ハケ	7.5YR6/4にぶい橙色	密	良好	反転復元
167	49	土師器 壺	2-2区 II3a10-11	竪穴建物 26	10.8	(13.8)	—	40%	内:ユビオサエ 内・外:剥離のため調整不明瞭	5YR5/8明赤褐色	密 1~9mmの石英・長石含む	軟	一部反転復元
168	49	土師器 製塩土器	2-2区 II3w10	竪穴建物 26	—	(2.7)	(4.8)	底部 60%	端:ヨコナデ 外:タタキ、強いユビオサエ	内:10YR8/1灰白色 外:5Y7/4にぶい橙色、10YR8/3浅黄橙色	密	良好	反転復元
169	50	弥生土器 直口壺	1-2区 II3a15	竪穴建物 28・29	(12.0)	(5.7)	—	口縁部 20%	端:ヨコナデ 内:ヨコナデ、工具によるナデか? 外:ハケ17本/2.0cm 摩滅のため調整不明瞭	内:2.5YR8/2灰白色~10YR7/4にぶい橙色 外:10YR7/4にぶい黄橙色 断:10YR7/4にぶい黄橙色、2.5Y7/1灰白色	密 1~5mmの石英中量含む	良好	反転復元
170	50	弥生土器 広口壺	1-2区 II3a15	竪穴建物 28・29	(15.0)	(3.9)	—	口縁部 25%	剥離のため調整不明瞭	5YR6/6橙色	やや粗 1.5cm大の片岩、2~4mmの石英粒含む	軟	反転復元
171	50	弥生土器 二重口縁壺	1-2区 II3a-b14-15	竪穴建物 28・29	(19.0)	(2.0)	—	口縁部 20%	端:ヨコナデ、櫛描波状文、刻付浮文 摩滅のため調整不明瞭	内・外:10YR6/4にぶい黄橙色 断:7.5YR5/3にぶい褐色	密 細かい長石少量含む、細かい角閃石(?)含む?	良好	反転復元
172	50	土師器 二重口縁壺	1-2区 II3a15	竪穴建物 28・29	(22.0)	(3.2)	—	口縁部 20%	端:ヨコナデ 外:板状工具によるナデ、竹管文 摩滅のため調整不明瞭	内・外:5YR6/6橙色 断:10YR4/2灰黄褐色	密 3~5mmの片岩少量、1~2mmの石英少量、1~5mmの赤色酸化粒微量含む	良好	反転復元
173	50	土師器 二重口縁壺	1-2区 II3a14-15	竪穴建物 28・29	(24.0)	(5.0)	—	口縁部 23%	端・外:ヨコナデ、刻付浮文 内:ナデ 摩滅のため調整不明瞭	内:10YR5/6明黄褐色 外:5YR6/6橙色 断:10YR5/6明黄褐色~10YR6/6明黄褐色	密 1~9mmの片岩少量、1~3mmの石英少量含む	良好	反転復元 布留
174	50	弥生土器 広口壺	1-2区 II3a15	竪穴建物 29	(13.0)	(5.1)	—	口縁部 23%	端:ヨコナデ? 摩滅のため調整不明瞭	内・外・断:7.5YR7/6橙色	密 2~8mm以下の片岩中量、1mm~3mm以下の石英少量含む	良好	反転復元
175	50	弥生土器 広口壺	1-2区 II3a15	竪穴建物 28・29	(13.5)	(4.4)	—	口縁部 40%	端:ヨコナデ、内傾面? 外:ナデ? 摩滅のため調整不明瞭	内:10YR4/3にぶい黄褐色 外:5YR6/6橙色~10YR5/4にぶい黄褐色 断:2.5Y5/1黄灰色	密 1~2mmの石英少量、細白色粒少量含む	良好	反転復元
176	50	土師器 二重口縁壺	1-2区 II3a-b15	竪穴建物 28・29	(15.7)	(4.3)	—	口縁部 20%	端:ヨコナデ? 摩滅のため調整不明瞭	内:7.5YR6/8橙色 外:5YR6/6橙色 断:7.5YR6/8橙色	密 1~3mmの赤色酸化粒中量、2~4mmの片岩少量、最大3mmの石英微量含む	良好	反転復元 布留
177	50	土師器 二重口縁壺	1-2区 II3a-b14-15	竪穴建物 28・29	(21.9)	(3.8)	—	口縁部 20%	端:ヨコナデ 内:工具によるナデか、ナデ 外:ヨコナデ 摩滅のため調整不明瞭	内:7.5YR6/6橙色 外:5YR6/6橙色 断:10YR6/2灰黄褐色	密 2~3mmの片岩少量、1~2mmの赤色酸化粒中量含む	良好	反転復元 布留
178	50	土師器 二重口縁壺	1-2区 II3a-b14-15	竪穴建物 28・29	(22.4)	(6.6)	—	口縁部 10%	内:板状工具によるナデ、ナデ 外:ナデ後縦位ナデ、ヨコナデ、板状工具によるナデ	内:7.5YR7/6橙色 外:5YR6/6橙色 断:10YR7/4にぶい黄橙色	密 1~2mmの赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元 布留
179	50	土師器 壺	1-2区 II3a15	竪穴建物 28・29	—	(7.1)	—	体部 25%	内:板状工具によるナデ 外:ヘラケズリか	内・外・断:5YR6/6橙色	密 3mm以下のチャート微量、1.1cm以下の砂岩1ヶ、1~3mm以下の赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元 布留
180	50	蓋か	1-2区 a14-15	竪穴建物 28・29	—	(3.7)	3.3	底部 98%	内:工具によるナデ後ヘラミガキ、単位不明 外:ヘラミガキ 内外面丁寧にヘラミガキされている 穿孔φ0.6cm1ヶ所穿通している	内:5YR6/6橙色 外:5YR6/6~7/6橙色 断:10YR7/6明黄褐色	密 1~3mm以下の赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
181	50	弥生土器 壺	1-2区 II3a15	竪穴建物 28・29	—	(1.3)	4.0~4.2	底部 80%	内:ナデ 外:ナデ、ユビオサエ	5YR5/6明赤褐色	密 1~3mmの長石・石英粒、多量の雲母粒含む	良好	一部反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書掲載遺構No.	法量 口径cm	法量 器高cm	法量 底径cm	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
182	50	弥生土器 壺	1-2区 55e-i14-15	竪穴建物 28·29	—	(11.6)	—	底部 40%	内)スピオサエ,工具痕 外)ハケ目ギキカナ,ハケケズリか 黒斑? 摩滅のため調整不明瞭	内)7.5YR6/6橙色~2.5Y5/2暗灰黄色 外)7.5YR6/6橙色~2.5Y3/1黒褐色 断)10YR6/6明黄褐色	密 1~5mm程の片岩少量,1~4mm程の石英少量,1~2mm程の赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
183	50	土師器 小型丸底土器	1-2区 55a15	竪穴建物 28·29	(10.6)	7.1	—	45%	内)ナデ? 外)ヨコナデ 摩滅,剥離のため調整不明瞭	内)5YR6/8橙色 外·断)7.5YR6/6橙色	密 1~2mmの赤色酸化粒少量,雲母微粒中量含む	良好	一部反転復元 布留中
184	50	土師器 小型丸底土器	1-2区 55e-i14-15	竪穴建物 28·29	(10.0)	8.6	—	70%	内)ハケ目ギキ 外)強いヨコナデ,ハケ目ギキ	5YR4/6赤褐色	密 1mm大の長石含む	やや軟	布留
185	50	土師器 甕	1-2区 55a15	竪穴建物 28·29	(12.2)	(6.0)	—	口縁部 20%	剥離のため調整不明瞭	10YR7/6明黄褐色	密 1~3mmの石英・長石粒含む	軟	反転復元 布留
186	50	土師器 甕	1-2区 55a15	竪穴建物 28·29	(14.0)	(6.8)	—	口縁部 20%	剥離のため調整不明瞭	10YR8/4浅黄橙色	やや粗 1~3mmの石英・長石をやや多く含む	軟	反転復元 布留
187	50	弥生土器 甕	1-2区 55e-i14-15	竪穴建物 28·29	—	(4.3)	3.0	底部 100%	内)ナデ,スピオサエ 外)タタキ,スピオサエ,ナデ	7.5YR6/6橙色	密 1~6mm大の片岩・長石・赤色酸化粒含む	やや軟	一部反転復元
188	50	弥生土器 甕	1-2区 55a15	竪穴建物 28·29	—	(4.2)	3.4	底部 100%	内)板状工具によるナデ 外)タタキ	内)10YR6/6明黄褐色~10YR5/4にぶい黄褐色 外)5YR6/6橙色~10YR6/4にぶい黄橙色 断)10YR6/4にぶい黄橙色	密 1~2mmの片岩少量,1~4mmの石英少量含む	良好	一部反転復元
189	50	弥生土器 甕	1-2区 55e-i14-15	竪穴建物 28·29	—	(2.5)	4.2	底部 90%	内)剥離のため調整不明瞭 外)タタキ,ナデ	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)5YR6/6橙色~10YR7/4にぶい黄橙色 断)10YR7/2にぶい黄橙色	密 2~3mmの石英・赤色酸化粒・雲母粒含む	やや軟	一部反転復元
190	50	土師器 鉢	1-2区 55a15	竪穴建物 28·29	(9.2)	4.9	—	40%	縁)ヨコナデ 内·外)ナデ?,摩滅のため調整不明瞭	内外)5YR6/6橙色 断)2.5Y4/1黄灰色	密 2mm程の片岩微量,1~4mmの石英少量含む	良好	一部反転復元 布留
191	50	土師器 鉢	1-2区 55a15	竪穴建物 28·29	(10.0)	4.9	—	50%	縁)ヨコナデ 内)板状工具によるナデ 摩滅のため調整不明瞭	内)7.5YR6/8橙色~2.5YR5/1黄灰色 外)7.5YR7/8黄橙色~10YR7/8黄橙色 断)7.5YR6/6橙色	密 1~3mmの赤色酸化粒中量含む	良好	一部反転復元 布留
192	50	土師器 鉢	1-2区 55a15	竪穴建物 28·29	(13.5)	6.7	3.7	90%	内)工具によるナデか,ヘラケズリ 外)摩滅のため調整不明瞭 底)籾殻の痕?	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)10YR8/4浅黄橙色 断)2.5Y4/1黄灰色	密 2~5mmの片岩(?)少量,2~5mmの石英中量,1~2mmの赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元 布留
193	50	土師器 脚付高坏	1-2区 55a15	竪穴建物 28·29	—	(7.6)	(17.8)	40%	縁)ヨコナデ 内)ヘラミガキ 外)ヘラケズリ,ヘラミガキ 穿孔φ1.4+1.1cm楕円形	7.5YR7/6橙色	密 2~3mmの石英・長石・赤色酸化粒含む	やや軟	一部反転復元 布留
194	50	土師器 高坏	1-2区 55a14-15	竪穴建物 31	14.0	(5.0)	—	坏部 30%	外)ミガキ? 剥離のため調整不明瞭	2.5YR7/6橙色	やや粗 1~4mm大の石英・チャート・長石粒多量に含む	軟	布留
195	50	土師器 小型丸底土器	1-2区 55a14-15	竪穴建物 31	9.4	7.7	—	90%	内)ハケ目,一部にスピオサエ,ヨコナデ,強いナデ,放射状のハケ目圧痕,ナデ 縁·内)剥離のため調整不明瞭	内)5YR7/6橙色 外)10YR7/4にぶい黄橙色	密 1~3mm大の石英・長石・赤色酸化粒・雲母含む	やや軟	布留
196	50	弥生土器 直口壺	2-1区 C5g12-13	369	(12.0)	(3.7)	—	口縁部 10%	縁)ヨコナデ 内)ナデ 外)ハケ目ギキ幅0.3cm程,やや粗	内·外)5YR5/6明赤褐色 断)2.5Y5/1黄灰色	密 最大3mm程のチャート微量,1mm程の赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
197	50	土師器 二重口縁壺	2-1区 C5g12-13	369	10.6	(3.4)	—	口縁部 60%	縁·内)ヨコナデ 外)摩滅のため調整不明瞭 二条凸帯,円形浮文貼付	7.5YR7/6橙色	密 1~2mmの長石・チャート・赤色酸化粒含む	やや軟	
198	50	二重口縁壺	2-1区 C5g12-13	369	(27.4)	(5.4)	—	口縁部 15%	内)ヘラミガキ,摩滅のため不明瞭 外)ハケナデ,ヘラミガキ幅0.3~0.4cm程,密 浮文貼付	内)2.5Y7/2灰黄色 外)5YR5/8明赤褐色 断)10YR6/4にぶい黄橙色~5YR5/8明赤褐色	密 1~2mmのチャート微量,1~2mmの赤色酸化粒中量,細かい雲母中量含む	良好	反転復元 庄内新
199	50	二重口縁壺	2-1区 C5g12-13	369	(19.4)	(3.2)	—	口縁部 20%	内)波状文(不明瞭),ナデ 外)櫛描文6本/0.7cm,浮文貼付,波状文(不明瞭)	内)7.5YR6/6橙色~10YR7/3にぶい黄橙色 外)5YR6/6橙色~7.5YR6/6橙色~10YR7/4にぶい黄橙色 断)10YR7/4にぶい黄橙色	密 1~2mmのチャート少量,1~5mmの石英少量含む	良好	反転復元 庄内新
200	50	土師器 二重口縁壺	2-1区 C5g12-13	369	(20.0)	(3.8)	—	口縁部 20%	内)ヘラミガキ幅0.2cm程,密,ナデ? 外)ハケナデ,ヘラミガキ幅0.2cm程,密 浮文貼付	内)5YR5/6明赤褐色~2.5Y4/1黄灰色 外·断)5YR5/6明赤褐色	密 細かい赤色酸化粒多量,1~3mmの石英少量含む	良好	反転復元
201	50	土師器 二重口縁壺	2-1区 C5g12-13	369	(22.0)	(2.6)	—	口縁部 20%	縁)竹管文 内)ハケ10本/1cm? 外)波状文 浮文貼付	内)5YR6/6橙色 外)5YR5/6明赤褐色 断)5YR6/6橙色~5YR5/6明赤褐色	密 1~5mm程の石英少量,細かい雲母中量含む	良好	反転復元
202	50	土師器 二重口縁壺	2-1区 C5g12-13	369	(22.0)	(3.9)	—	口縁部 20%	縁)ヨコナデ? 内)ナデ?,摩滅のため不明瞭 外)波状文5本/1.2cm 浮文貼付	内)2.5Y6/1黄灰色~7.5YR6/6橙色 外)10YR6/4にぶい橙色~5YR5/8明赤褐色 断)2.5Y6/1黄灰色	密 1~3mmの石英少量,1~2mmの赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
203	50	壺	2-1区 C5g13	369	—	(3.6)	(3.4)	底部 45%	内)ナデ,摩滅のため調整不明瞭 外)スピオサエ,ナデ,摩滅のため調整不明瞭	7.5YR6/6橙色,10YR6/4にぶい黄橙色	密	やや軟	反転復元 庄内新
204	50	壺	2-1区 C5g12-13	369	—	(2.3)	(4.0)	底部 100%	内)ハケメ,ナデ 外)ハケメ,スピオサエ,ナデ 黒斑	内)5Y4/1灰色 外)10YR8/4浅黄橙色	やや粗1~2mmの石英・長石・チャート含む	良好	一部反転復元 庄内新
205	51	弥生土器 直口壺	2-1区 C5g12-13	369	—	(10.6)	—	胴部 30%	内)ヨコ方向・タテ方向のミガキ,強いナデ,ナデ 外)タテ方向のミガキ,突帯貼付後キザミ(山二回),櫛描直線文,波状文	2.5YR4/6赤褐色,7.5YR5/6明褐色, 10YR7/4にぶい黄橙色	密 1mmの長石含む	やや軟	反転復元
206	51	土師器 広口壺	2-1区 C5g12-13	369	—	(8.1)	—	胴部 40%	内)ヨコ方向のミガキ,ヘラケズリ後ミガキ,ナデ 外)ミガキ,ナデ,タタキ後ハケ	7.5YR6/4にぶい橙色	密	良好	反転復元
207	51	土師器 小型丸底土器	2-1区 C5g12-13	369	—	(5.8)	(1.6)	70%	内·外)ミガキ 底)未調整	7.5YR6/6橙色	密 1~2mm大の石英・長石・赤色酸化粒含む	良好	
208	51	土師器 小型甕	2-1区 C5g13	369	9.6	8.9	3.7	80%	縁)ヨコナデ 外)強いヨコナデ,ハケナデ,ナデ	2.5Y5/2暗灰黄色	密	良好	
209	51	弥生土器 甕	2-1区 C5g12-13	369	(14.1)	(4.3)	—	口縁部 25%	縁)強いヨコナデ 内)ナデ,工具によるナデか?,摩滅のため不明瞭 外)ナデ,タタキ	内)7.5YR6/6橙色 外)7.5YR6/6橙色 断)7.5YR7/4にぶい橙色	密 1mm~2mmのチャート少量,1mm程の赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
210	51	弥生土器 甕	2-1区 C5g12-13	369	(15.0)	(6.8)	—	口縁部 25%	縁)強いヨコナデ 内)ヨコナデ,工具によるナデか 外)ヨコナデ,タタキ	内)2.5YR5/6明赤褐色 外)5YR5/6明赤褐色 断)2.5YR5/6明赤褐色	密 1~5mmの石英少量,2mm程のチャート微量,1~3mmの片岩微量含む	良好	反転復元
211	51	弥生土器 鉢	2-1区 C5g12-13	369	(25.6)	(5.6)	—	口縁部 5%	内)ヘラミガキ幅0.25cm程,密? 外)ヘラミガキ幅0.25cm程,密?,タタキ 剥離のため不明瞭	内·外)5YR4/4~5/4にぶい赤褐色 断)5YR5/6明赤褐色	密 細かい雲母微量含む	良好	反転復元
212	51	土師器 甕	2-1区 C5g13	369	(13.2)	(5.2)	—	口縁部 20%	縁)ヨコナデ 内)ハケ,ナデ? 摩滅のため調整不明瞭 外)タテ方向のハケ	内)2.5Y4/1黄灰色 外)2.5Y5/2暗灰黄色 断)2.5Y3/1黒褐色	密 1mm程の石英微量含む	良好	反転復元
213	51	土師器 甕	2-1区 C5g12-13	369	(18.2)	(4.5)	—	口縁部 10%	縁)強めのヨコナデ 内)ヨコナデ,ヘラケズリか 外)ハケ(格子目)	内)N2/0黒色 外)2.5Y4/1黄灰色 断)N2/0黒色	密 細かい角閃石少量,細かい雲母(?)中量含む	良好	反転復元
214	51	土師器 甕	2-1区 C5g13	369	(17.8)	(5.4)	—	口縁部 20%	縁·内)ヨコナデ 外)板ナデ,ヨコナデ,強いナデ	10YR4/2灰黄褐色	密	良好	反転復元
215	51	弥生土器 甕	2-1区 C5g13	369	—	(5.2)	3.4	底部 100%	内)板ナデ 外)タタキ,ナデ 黒斑	10YR7/4にぶい黄橙色,N2/0黒色	密 1~2mmの石英・斜長石・チャート・雲母粒含む	良好	一部反転復元
216	51	弥生土器 甕	2-1区 C5g12-13	369	—	(2.2)	(3.0)	底部 100%	内)板ナデ 外)タタキ,ナデ	2.5Y3/1黒褐色	密1mmの石英・斜長石含む	良好	一部反転復元
217	51	弥生土器 甕	2-1区 C5g12-13	369	—	(2.8)	4.8	底部 90%	内)剥離のため調整不明瞭 外)強いナデ,ナデ	5YR6/6橙色	密 1mm大のチャート・石英・長石粒含む	良好	一部反転復元
218	51	土師器 大鉢	2-1区 C5g13	369	(46.4)	(8.9)	—	10%以下	縁)ヨコナデ 外·内)剥離のため調整不明瞭	7.5YR6/6橙色	やや粗 2~3mmの石英・長石多く含む	軟	反転復元
219	51	弥生土器 蓋か	2-1区 C5g12-13	369	径 (13.6)	高 4.7	—	40%	ヨコナデ,ヘラミガキ,ナデ 穿孔2ケ所φ1.3cm	内)10YR6/4にぶい黄橙色 外)5YR6/6橙色 断)10YR5/1褐灰色	密	良好	弥生時代後期後半
220	51	鉢	2-1区 C5g12-13	369	(9.4)	(6.8)	—	20%	縁)ヨコナデ 内)タテ方向のナデ後ヘラミガキ 外)ユビナデ,タタキ,ヘラミガキ	10YR4/1褐灰色	密 1mmの赤色酸化粒含む	良好	反転復元
221	51	弥生土器 鉢	2-1区 C5g12-13	369	(9.0)	5.6	3.7	60%	縁)ヨコナデ 内)板状工具によるナデ 外)タタキ後ナデ消している? 黒斑	内)7.5YR6/6橙色 外)7.5YR7/6橙色 断)7.5YR6/6橙色	密 1~3mmのチャート少量,細かい雲母中量含む	良好	一部反転復元
222	51	土師器 鉢	2-1区 C5g13	369	—	(3.5)	4.0	底部 100%	内)ナデ 外)ナデ,強いスピオサエ,ヨコナデ,スピオサエ	7.5YR6/6橙色	密 3mmの赤色酸化粒含む	良好	
223	51	土師器 高坏	2-1区 C5g12-13	369	—	(7.7)	—	脚柱部 100%	内)板状工具によるナデ 外)ヘラミガキ幅0.2~0.3cm,密 穿孔あり	内)7.5YR7/4にぶい橙色 外)7.5YR6/6橙色~7.5YR5/3にぶい褐色 断)7.5YR6/4にぶい橙色	密 1~2mmのチャート少量,細かい雲母中量含む	良好	一部反転復元
224	51	土師器 高坏	2-1区 C5g12-13	369	—	(8.7)	12.0	脚部 60%	内)ナデ 外)ヘラミガキ,スピオサエ後ヘラミガキ 穿孔φ1.0cm 4ケ所	10YR6/4にぶい黄橙色,2.5YR6/4にぶい橙色	やや粗 1~2mmのチャート・石英・長石・赤色酸化粒・雲母粒含む	やや軟	

挿図番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書遺構番号No.	法量 口径cm	法量 高さcm	法量 底径cm	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
225	51	弥生土器 高坏	2-1区 C3g13	369	—	(3.5)	—	—	内・外)ヘラミガキ	5YR5/6明赤褐色	やや粗 1mmのチャート・石英・長石含む	良好	
226	51	土師器 高坏	2-1区 C3g12・13	369	—	(3.0)	—	脚柱〜脚裾部 60%	内)ハケ? 外)ヘラナデ? 穿孔φ0.6cm以下(4〜5+1?) 摩滅のため調整不明瞭	内)10YR4/2灰黄褐色 外)10YR4/3にぶい黄褐色 断)10YR5/3にぶい黄褐色	密 細かい雲母は多量含む	良好	一部反転復元
228	51	弥生土器 ミニチュア	2-1区 C3i12・13	371	—	(2.0)	2.2	底部 100%	摩滅のため調整不明瞭 底)黒斑?	内)7.5YR6/6橙色〜10YR7/3にぶい黄橙色 外)7.5YR6/6橙色 断)7.5YR5/6明褐色	密 1〜3mm位の石英中量含む	良好	一部反転復元
229	51	弥生土器 甕	2-1区 C3k・l13	471	—	(1.8)	(4.0)	底部 43%	内)板ナデ 外)ナデ、オサエ	内)7.5YR6/6橙色 外)5YR5/6明赤褐色	密	やや軟	反転復元
230	51	須恵器 壺	2-1区 C3k・l13	471	(22.2)	(3.4)	—	口縁部 5%	端)自然釉付着 内・外)回転ナデ	内)10YR6/1褐灰色 外)N4/0灰色 断)7.5YR5/2灰褐色	密	良好	反転復元
231	51	須恵器 壺	2-1区 C3k・l13	471	—	—	—	—	内)青海波 外)格子タタキ	5Y7/1灰白色	密	良好	
232	51	杯	2-1区 C3l・m13	472	—	(1.2)	—	口縁部 10%以下	端・内・外)ヨコナデ	5YR5/6明赤褐色	密	やや軟	断面のみ
233	51	弥生土器 甕	2-1区 C3l・m13	472	—	(3.9)	—	5%以下	内)工具によるナデか?、摩滅のため不明瞭 外)タタキ	内外)7.5YR5/6明褐色 断)10YR5/1褐灰色	密 1〜3mm位のチャート少量、1mm位の赤色酸化粒少量含む	良好	断面のみ
234	51	弥生土器 甕	2-1区 C3l・m13	472	—	(1.5)	3.8	底部 100%	内)剥離のため調整不明瞭 外)タタキ、粗いナデ、摩滅著しい	内)10YR7/3にぶい黄橙色 外)10YR3/1黒褐色	密 1〜3mmのチャート・長石含む	軟	一部反転復元
235	51	弥生土器 甕	2-1区 C3l・m13	472	—	(2.8)	(3.6)	底部 42%	内)ハケ 外)ナデ?、ユビオサエ、ナデ	内)10YR6/1褐灰色 外)7.5YR7/4にぶい橙色	密 1〜3mmの赤色鉱粒含む	良好	反転復元
236	51	弥生土器 小形器台	2-1区 C3l・m13	472	—	(4.3)	脚部 (8.7)	70%	摩滅・剥離のため調整不明瞭 穿孔φ0.7cm(4+1?)	内)5YR6/6橙色 外)5YR7/6橙色 断)10YR7/3にぶい黄橙色	密 1mm以下〜3mm位の赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元
237	51	土師器 脚台土器	2-1区 C3l・m13	472	—	(3.2)	脚部 6.4	脚部 60%	端・内)ナデ 外)ユビオサエ	内外断)7.5YR7/4にぶい橙色	密 1mm位の赤色酸化粒中量含む	良好	一部反転復元
238	52	広口壺	1-2区 D3k14	67	(16.6)	(22.6)	—	口縁部 100%	端)ヨコナデ、擬凹線3〜4条 内)ヘラミガキ幅0.2〜0.3cm位、密、ユビオサエ、タテ方向のナデ 外)ヘラミガキ幅0.4cm位、やや粗	内)5YR5/6明赤褐色 外)5YR5/6明赤褐色 断)5YR5/2灰褐色	密 3〜10mm位の片岩少量、2〜5mm位の石英少量、1〜2mm位の赤色酸化粒微量含む	良好	一部反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
239	52	広口壺	1-2区 D3a15	67	(14.9)	(5.8)	—	口縁部 30%	摩滅のため調整不明瞭	内)10YR7/6明黄褐色〜7.5YR6/6橙色 外)10YR7/6明黄褐色 断)2.5Y6/2灰黄色	密 1〜5mm位の片岩少量、1〜3mm位の赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
240	52	直口壺	2-2区 D3e12・13	67	(11.0)	(7.1)	—	口縁部 40%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ、ナデ 外)ユビオサエ後ヘラミガキ、擬凹線?	内・外・断)7.5YR7/6橙色	密 1〜3mmのチャート・赤色鉱粒含む	良好	反転復元 庄内
241	52	広口壺	1-2区 D3k14	67	(16.9)	(7.5)	—	口縁部 50%	端)ヨコナデ 内)ユビオサエ 外)ナデ? 摩滅・剥離のため調整不明瞭	内)5YR6/6〜6/8橙色 外・断)5YR6/6橙色	密 1〜4mmの赤色酸化粒多く、最大2mm位の石英少量含む	良好	反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
242	52	直口壺	1-2区 D3a15	67	(14.0)	(10.4)	—	口縁部 40%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ、ユビオサエ、やや強い板ナデ 外)ヘラナデ?、ヘラミガキ、ヘラケズリ 摩滅・剥離のため不明瞭	内)7.5YR6/6橙色〜2.5YR6/6橙色 外)2.5YR6/6橙色 断)2.5Y3/1黒褐色	密 1〜6mm位の片岩少量、緑色鉱粒少量、1〜5mm位の石英少量含む	良好	反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
243	52	壺	2-2区 D3d12・13	67	(14.0)	(14.2)	—	口縁部 50%	端)ヨコナデ 内)ヨコ方向のヘラミガキ 外)タテ方向のヘラミガキ 剥離のため調整不明瞭	内・外・断)5YR5/6明赤褐色	密 1〜2mmの長石・赤色鉱粒含む	やや軟	弥生時代後期後半〜庄内
244	52	壺	2-2区 D3a13	67	—	(25.2)	4.8	90%	内)ユビオサエ、ナデ、剥離のため調整不明瞭 外)タタキ、ナデ、剥離のため調整不明瞭	内)10YR6/1褐灰色 外)7.5YR7/6橙色	やや粗 1〜5mmの石英・長石・雲母粒・赤色鉱粒を含む	やや軟	一部反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
245	52	広口壺	2-2区 D3e12	67	(18.2)	8.8	—	口縁部 30%	端)ヨコナデ 内)ユビオサエ、ナデ、板ナデ 外)ミガキ?、ヘラのあたり 歪み著しい	内・外・断)2.5YR6/6橙色〜5YR6/6橙色	密	やや軟	反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
246	52	壺	2-2区 D3e12	67	14.9	(13.0)	—	口縁部 60%	端)ヨコナデ 内)強いヨコナデ、ナデ・ユビオサエ 外)ナナメ方向の板ナデ、ヘラミガキ 黒斑	2.5YR5/6明赤褐色	やや粗 2〜5mmの石英・長石・赤色鉱粒を含む	やや軟	弥生時代後期後半〜庄内
247	52	二重口縁壺	2-2区 D3y12	67	20.4	10.8	—	口縁部 70%	端)擬凹線、竹管文貼付 内)剥離のため調整不明瞭 外)ヨコナデ、タテ方向のヘラミガキ、頸部三角状の突帯貼付 頸にキザミ目施す ススが付着	内・外・断)5YR6/6橙色	やや粗 1〜10mm大の石英・長石・片岩・赤色鉱粒含む	やや軟	弥生時代後期後半〜庄内
248	52	壺	2-2区 D3e12	67	14.7	(20.0)	—	60%	端)ヨコナデ 内)ナデ、ユビオサエ、ナデ(板状工具?) 外)ナデ、タタキ後ミガキ	内・断)10YR7/4にぶい黄橙色〜10YR6/1褐灰色 外)5YR6/6橙色	密 1〜3mm大の石英・赤チャート粒を含む	良	弥生時代後期後半〜庄内
249	52	直口壺	2-2区 D3e12	67	11.0	13.5	—	70%	端)ヨコナデ 内)ユビオサエ、ヨコナデ、ヘラナデ 外)擬凹線、強いヨコナデ、ヨコナデ、剥離のため調整不明瞭	内・外・断)10YR8/3浅黄橙色	密 1〜3mm大の石英・長石・片岩含む	軟	一部反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
250	52	短頸壺	2-2区 D3e11	67	(9.2)	9.1	2.2	70%	端)ヨコナデ 外)ヘラミガキ、ユビオサエ、ナデ 剥離著しい	内・外・断)10YR7/4にぶい黄橙色	密 3mm大の長石・赤色鉱粒含む	やや軟	一部反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
251	52	小型壺	1-2区 D3a13	67	—	(7.2)	3.3	80%	内)ヘラナデ?、板状工具によるナデ 外)ヨコナデ、ヘラミガキか 摩滅のため調整不明瞭	内)10YR6/3にぶい黄橙色 外)10YR6/2灰黄褐色 断)7.5YR7/4にぶい橙色	密 1mm位の赤色酸化粒、石英多量含む、緑色鉱粒少量含む	良好	一部反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
252	52	弥生土器 鉢形器	1-2区 D3d14・15	67	(11.2)	(8.8)	—	口縁部 60%	端)ヨコナデ 内)ヘラミガキ幅0.2cm位、密、摩滅のため不明瞭 外)擬凹線3条、ヘラミガキ、摩滅のため不明瞭	内・外)5YR6/6橙色〜7.5YR7/6橙色 断)5Y7/1灰白色	密 細かい長石多く含む	良好	反転復元 弥生時代後期後半
253	52	有孔鉢	2-2区 D3a13	67	—	(5.1)	4.3	底部 100%	内)板状工具によるナデか 外)ナデ、タタキ 底)穿孔φ1.5cm 摩滅・剥離のため調整不明瞭	内)2.5Y6/3淡黄色〜2.5Y7/3浅黄色 外)7.5YR7/6橙色 断)10YR8/6黄橙色	密 1〜2mm位の赤色酸化粒中量、1〜3mm位のチャート少量含む	良好	反転復元 弥生時代後期後半〜庄内
254	53	弥生土器 甕	1-2区 D3k14	67	(13.6)	(10.2)	—	口縁部 25%	端)ヨコナデ 内)板状工具によるナデ 外)タタキ	内)10YR5/4にぶい黄褐色〜5YR6/6橙色 外)2.5YR5/6明赤褐色〜7.5YR5/4にぶい褐色 断)2.5YR5/6明赤褐色	密 2〜5mm位の片岩少量、1mm位の赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元
255	53	弥生土器 甕	1-2区 D3a14	67	(13.2)	(15.4)	—	40%	端)ヨコナデ 内)ユビオサエ、板状工具によるナデ 外)タタキ、スス付着	内)7.5YR5/4にぶい褐色〜5YR6/6橙色 外)5YR6/6橙色 断)7.5YR7/6橙色	密 1〜8mm位の片岩多く、1〜10mm位の石英多く、1〜4mm位の赤色酸化粒中量含む	良好	反転復元
256	53	弥生土器 甕	1-2区 D3k14	67	(16.4)	(14.1)	—	40%	端)ヨコナデ 内)工具によるナデか 外)タタキ 摩滅、剥離のため調整不明瞭 上下を分の所で接合か	内)7.5YR6/6橙色 外)7.5YR7/8黄橙色 断)7.5YR7/6橙色	密 5〜2mm位の片岩中量、1〜3mm位の石英少量含む	良好	一部反転復元
257	53	弥生土器 甕	2-2区 D3a13	67	(16.0)	18.1〜19.0	4.0	80%	端)ヨコナデ 内)ナデ、ヘラナデ、剥離のため調整不明瞭 外)タタキ、ナデ、剥離目立つ 歪み著しい	内・外・断)10R5/6赤色〜10YR7/4にぶい黄橙色	密 1〜3mmのチャート・石英・長石含む	軟	一部反転復元
258	53	弥生土器 甕	2-2区 D3e12	67	(15.8)	23.5	4.6	90%	端)ヨコナデ 内)ナデ 外)ユビオサエ、タタキ、タタキ後ナデ、ナデ スス付着	内)10YR6/4にぶい黄橙色 外)2.5YR6/6橙色〜10YR6/4にぶい黄橙色	密	良好	一部反転復元
259	53	弥生土器 甕	2-2区 D3e12	67	22.0	(10.0)	—	口縁部 80%	端)ヨコナデ 内)ヘラナデ、ナデ 外)ユビオサエ、強いヨコナデ、タタキ	内・外・断)7.5YR7/6橙色	密 2〜4mmの石英・長石・赤色鉱粒含む	軟	
260	53	土師器 甕	2-2区 D3e12	67	12.0	13.5	3.0	90%	端)剥離著しい 内)ナデ?板ナデ 外)タタキ 剥離著しい	内)5YR6/6橙色 外)7.5YR7/6橙色	密 1〜3mm大の石英・長石・片岩粒・赤色鉱粒含む	軟	
261	53	弥生土器 甕	2-2区 D3e12・13	67	—	(4.5)	(4.0)	底部 100%	内)放射状の板ナデ 外)タタキ、オサエ 黒斑 底)木葉痕?	内)7.5YR7/6橙色 外)10YR7/4にぶい黄橙色	1〜3mm大のチャート・赤色鉱粒含む	良好	
262	53	土師器 短頸壺	1-2区 D3k14	67	10.2	17.7	—	80%	端)ヨコナデ 内)ユビオサエ、上部から、ヨコナデ、板ナデ 外)ナデ、タタキ、ユビオサエ 黒斑、被熱痕あり	内・外・断)10YR7/3にぶい黄橙色	密	良好	反転復元
263	53	弥生土器 鉢	1-2区 D3k14	67	16.0	11.7	4.0	60%	端)ヨコナデ 内)板状工具によるナデ(不定方向) 外)タタキ、ユビオサエ(ナデ?) 黒斑	内)5YR7/4にぶい橙色〜6/4 外)5YR7/4橙色〜10YR7/4にぶい黄橙色 断)7.5YR7/6橙色	密 1〜3mmの赤色酸化粒少量含む	良好	
264	53	土師器 鉢	2-2区 D3e12	67	17.1	9.7	4.2	90%	端)ヨコナデ 内)ミガキ後ナデか、ナデ 外)ナデ、タタキ 黒斑	内)2.5Y6/1黄灰色〜N3/0暗灰色 外)10YR7/4にぶい黄橙色 断)10YR7/3にぶい黄橙色	密 1〜3mm大の石英・赤鉄石含む	良好	
265	53	土師器 鉢	2-2区 D3e12	67	16.3	9.8	(3.0)	70%	内)ナデ、ヘラ状工具でナデ 外)タタキ、ナデ	内・断)5YR6/6橙色 外)5YR6/8明赤褐色	密 1〜3mm大の石英・片岩多量含む	良	一部反転復元

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書掲載遺構No.	法量 口径cm	法量 高さcm	法量 底径cm	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
266	53	弥生土器 有孔鉢	2-2区 20a13	67	15.8	8.2	4.0	底部 100%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
267	53	土師器 鉢	2-2区 20c12	67	(12.0)	10.2	4.3	75%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良	一部反転復元
268	53	高坏	2-2区 20c12	67	(16.4)	(12.1)	—	80%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良	一部反転復元
269	53	土師器 高坏	2-2区 20c13	67	(15.2)	12.3	(13.6)	80%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良	一部反転復元
270	53	土師器 高坏	2-2区 20c12	67	(17.7)	13.4	(14.8)	80%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良	一部反転復元
271	53	弥生土器 高坏	1-2区 20a14	67	15.3	10.3	脚部 10.8	70%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	
272	53	鉢	1-2区 20a14	67	(13.1)	(6.7)	—	体部 20%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
273	53	弥生土器 高坏	1-2区 20a13	67	—	(5.2)	12.0	脚部 100%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	
274	54	土師器 壺	2-2区 10d10-11	198	(14.8)	(11.0)	—	30%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
275	54	土師器 高坏	2-2区 10j10	198	(14.0)	11.4	(9.0)	70%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
276	54	土師器 高坏	2-2区 10j10	198	(12.2)	11.8	9.8	50%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
277	54	土師器 把手	2-2区 10k11	198	長さ (5.2)	(5.6)	厚さ 3.0	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
278	54	弥生土器 壺	2-2区 10i-k11	198	—	(3.8)	(4.0)	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
279	54	土師器 小型丸底土器	2-2区 10j-m13	198	(6.1)	7.3	—	70%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
280	54	土師器 小型丸底土器	1-2区 10m-n14	198	5.9	8.7	4.5～5.0	80%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
281	54	土師器 小型丸底土器	2-2区 10j10	200	(8.8)	10.2	—	80%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
282	54	土師器 壺	2-2区 10i-k11	200	(13.0)	(11.6)	—	40%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
283	54	弥生土器 広口壺	1-2区 10i-j14	200	(14.0)	(6.5)	—	口縁部 60%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
284	54	弥生土器 広口壺	1-2区 10i-j14	200	(19.5)	(4.4)	—	口縁部 5%以下	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
285	54	土師器 二重口縁壺	1-2区 10i-j13	200	(25.6)	(6.6)	—	口縁部 5%以下	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
286	54	土師器 壺	1-2区 10i15	186	(25.0)?	(17.2)	—	30%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
287	54	土師器 小型丸底土器	1-2区 10i-j14	186	—	(5.6)	—	40%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
288	54	弥生土器 甕	1-2区 10i15	186	(20.0)	(5.1)	—	口縁部 13%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
289	54	土師器 甕	1-2区 10i-j13	186	(13.0)	(8.1)	—	5%以下	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
290	54	土師器 甕	1-2区 10i15	186	(13.0)	(3.8)	—	口縁部 20%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
291	54	弥生土器 甕	1-2区 10i15	186	(17.2)	(13.2)	—	30%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
292	54	弥生土器 甕	1-2区 10h11-12	186	—	(2.7)	3.6	底部 100%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
293	54	弥生土器 甕	1-2区 10i15	186	—	(2.6)	4.3	底部 100%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
294	54	弥生土器 甕	1-2区 10h11-12	186	—	(3.0)	3.7	底部 75%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
295	54	弥生土器 甕	2-2区 10i・h-12・13	186	—	(3.0)	(2.8)	底部 40%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	反転復元
296	54	土師器 手焙	1-2区 10i15	186	—	—	—	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	
297	54	土師器 高坏	1-2区 10h11-12	186	—	(11.0)	(10.2)	70%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	軟	反転復元
298	54	土師器 高坏	1-2区 10i15	186	—	(8.4)	—	50%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
299	54	土師器 高坏	1-2区 10i-j13	186	—	(8.2)	(10.0)	40%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	軟	一部反転復元
300	54	高坏	1-2区 10i15	186	—	(6.2)	16.2	50%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	軟	打内面
301	54	弥生土器 小型鉢	1-2区 10h11-12	186	(8.6)	(5.4)	2.0	40%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元
302	54	土師器 鉢	2-2区 10h11-12	186	—	(3.4)	(3.0)	底部 3%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	軟	反転復元
303	54	土師器 器台か	1-2区 10i-j15	200	(13.8)	(2.3)	—	口縁部 10%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	軟	反転復元
304	54	器台か	1-2区 10i15	188	—	(3.0)	9.1	60%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	打内
305	54	鉢	1-2区 10i16	185	(10.6)	6.0	4.8	50%	[illegible]	[illegible]	[illegible]	良好	一部反転復元 打内面

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書掲載遺構No.	法量 口径cm	高さcm	底径cm	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
306	54	小型鉢	1-2区 I15J15・16	185	(8.2)	4.0	(4.5)	25%	端)ヨコナデ 内・外)ナデ　黒斑 磨滅のため不明瞭	内)10YR8/4浅黄橙色 外)5YR6/6橙色～10YR7/4にぶい黄橙色 断)10YR8/2灰白色	密　1～8mmの片岩少量,1～2mmの石英少量,細かい赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元 庄内併
307	54	弥生土器 鉢	1-2区 I15i15	185	(13.0)	10.2	4.0	60%	端)ヨコナデ 内)板状工具によるナデ,オサエ 外)タタキ　黒斑	内)7.5YR7/4にぶい橙色～10YR7/3にぶい黄橙色 外・断)10YR8/3浅黄橙色	密　1～2mmの石英・チャート中量,細かい赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元
308	55	弥生土器 直口壺	1-2区 I15i15	185	(14.2)	(6.4)	—	口縁部 70%	外)ハケ目ナナメか 磨滅・剥離のため調整不明瞭	内)7.5YR5/6明褐色～10YR5/3にぶい褐色 外)5YR6/8橙色 断)5YR6/6橙色	密　1～3mmの石英・チャート中量含む	良好	反転復元
309	55	土師器 壺 二重口縁か	1-2区 I15i16	185	—	(7.8)	—	10%	内)ナデ?,しぼり痕,板状工具によるナデ 外)ナデ 磨滅のため調整不明瞭	内)2.5YR6/8橙色～10YR6/3にぶい黄橙色 外・断)10YR6/3にぶい黄橙色	密　1～4mmの片岩少量,1～5mmの石英少量含む	良好	一部反転復元
310	55	土師器 二重口縁 壺	1-2区 I15i5	185	(23.0)	(5.0)	—	口縁部 20%	外)竹管文 磨滅のため調整不明瞭	内)7.5YR6/6橙色 外)5YR6/6橙色 断)2.5Y5/1黄灰色	密　1～1mm以下の赤色酸化粒多量含む	やや軟	反転復元 布留古
311	55	土師器 二重口縁 壺	1-2区 I15i15・16	185	(20.0)	(5.0)	—	口縁部 20%	端)ヨコナデ 内)ナデ 外)キザミ目,ナデ	内)10YR5/1褐灰色～10YR5/2灰黄褐色 外)10YR5/2灰黄褐色 断)7.5YR6/6橙色～10YR5/2灰黄褐色	密　最大4mmの片岩微量,1～8mmの石英少量,最大7mmのチャート微量含む	良好	反転復元 布留古
312	55	土師器 壺	1-2区 I15h15	185	—	(10.0)	—	30%	内)板状工具によるナデ,ヨコナデ? 外)タタキ後ハケ→ハケ目キザミ(幅0.3cm以上,やや粗?	内)5YR6/8橙色～5YR4/3褐色 外)5YR6/6橙色～5YR5/3にぶい赤褐色 断)7.5YR6/4にぶい橙色～7.5YR3/2黒褐色	密　細かい雲母多量,1～4mmの石英微量,細かい赤色酸化粒少量含む	良好	一部反転復元
313	55	壺	1-2区 I15g13	185	—	(23.8)	3.9	40%	内)板状工具によるナデ 外)タタキ後ハケ目(幅0.3cm以上,粗? 磨滅・剥離のため調整不明瞭	内)2.5Y7/1灰白色 外)7.5YR7/4にぶい橙色～7.5YR5/4にぶい褐色 断)7.5YR7/6橙色	密　1～3mmの片岩少量,1～4mmの石英少量,細かい雲母多量含む	良好	一部反転復元 庄内
314	55	土師器 小型丸底土器	2-2区 I35g11・12	185	(6.4)	7.2	—	80%	端)剥離のため調整不明瞭 内)粗いナデ 外)ハケ目キ,剥離のため不明瞭	内)N4/0灰色 外)10YR7/3にぶい黄橙色,N4/0灰色	密　1～3mm大の長石・石英・チャート・赤色斑粒含む	軟	一部反転復元 布留
315	55	土師器 小型丸底土器	1-2区 I15g13	185	—	(5.5)	1.6	70%	外)オサエ	内)5YR6/6橙色 外)10YR7/4にぶい黄橙色～5YR6/6橙色 断)7.5YR4/3褐色	密　1～3mmの赤色酸化粒中量,最大4mmの片岩微量,細かい雲母少量含む	良好	一部反転復元 布留
316	55	土師器 小型丸底土器	1-2区 I15h15	185	(15.2)	5.7	—	70%	内)ヘラミガキ,剥離のため不明瞭 外)ハケ目キ,ユビオサエ	10YR8/4浅黄橙色	密　1mm大の石英・チャート・赤色斑粒含む	やや軟	反転復元 布留
317	55	弥生土器 高杯	1-2区 I15i15・16	185	—	(10.6)	(16.3)	50%	外)ヘラナデ?(ミガキ?)　穿孔φ1.3cm3ヶ所? 磨滅のため調整不明瞭	内・断)5Y7/1灰白色 外)7.5YR7/6橙色	密　1～3mmの片岩少量,1～4mmの石英中量含む	やや軟	一部反転復元
318	55	土師器 高杯	1-2区 I15i15・16	185	(10.5)	(8.1)	—	40%	内)ヘラナデ? 外)ヘラミガキか?　穿孔φ0.8cm3ヶ所 磨滅のため調整不明瞭	内・外)7.5YR6/8橙色 断)10YR6/4にぶい黄橙色	密　細かい雲母少量,1～2mmの石英微量含む	良好	反転復元
319	55	土師器 高杯	1-2区 I15h15	185	—	(6.1)	12.2	脚裾部 90%	端)ヨコナデ? 内)強めのヘラナデ?,工具によるナデか?脚・杯接合部にキザミあり 外)ハケ目キか?(幅0.2cm以上か)　穿孔3ヶ所 磨滅,剥離のため不明瞭	内)5YR6/8橙色 外)5YR6/6橙色 断)7.5YR6/6橙色	密　細かい金雲母多量,細かい赤色酸化粒微量含む	良好	布留
320	55	弥生土器 甕	1-2区 I15i16	185	—	(22.5)	4.5	50%	内)板状工具によるナデ 外)タタキ(頸部タタキ後ナデ消している?)	内)N3/0暗灰色 外)7.5YR6/6橙色～2.5Y5/6明赤褐色 断)10YR6/4にぶい黄橙色	密　1～5mmの石英中量,1～3mmのチャート中量,1～3mmの赤色酸化粒中量含む	良好	一部反転復元 弥生時代後期後半
321	55	甕	1-2区 I15i16	185	(22.0)	(26.5)	—	40%	端)ヨコナデ,キザミあり 内)板状工具によるナデ,ユビオサエ 外)ヨコナデ,タタキ	内)10YR5/1褐灰色 外)10YR5/2灰黄褐色 断)5YR7/6橙色	密　1～9mmの片岩微量,1～4mmの石英少量,1～5mmの赤色酸化粒中量含む	良好	反転復元 庄内
322	55	弥生土器 壺	2-2区 I35i11・12 g12	185	(9.9)	22.3	3.4	40%	端)ヨコナデ 内)板状工具によるナデ 外)タタキ,タタキの後ナデ消している?	内)5Y5/1灰色 外)10YR8/4浅黄橙色～2.5YR6/6橙色 断)10YR7/4にぶい黄橙色	密　1～4mmの赤色酸化粒少量,1～2mmのチャート微量含む	良好	一部反転復元
323	55	弥生土器 有孔鉢か	1-2区 I15h15	185	—	(4.2)	3.9	底部 90%	内)板状工具によるナデ 外)タタキの後ナデ? 底)穿孔	内・外)10YR4/1褐灰色 断)7.5YR6/4にぶい橙色	密　2～6mmの片岩少量,1～2mmの石英微量含む	良好	一部反転復元
324	55	土師器 甕	2-2区 I35	185	(14.0)	(7.7)	—	25%	端)ヨコナデ? 内)ヘラケズリ 外)工具によるナデか? 磨滅・剥離のため調整不明瞭	内・外)5YR5/8明赤褐色 断)5YR5/8明赤褐色～10YR4/2灰黄褐色	やや粗　1～2mmの石英・チャート多量含む	良好	反転復元 布留中
325	55	土師器 甕	1-2区 I15h15	185	(16.0)	20.3	—	40%	端)ヨコナデ 内)ヘラケズリ,オサエ(工具?) 外)細かいハケ	内・外)2.5Y7/2灰黄色 断)2.5Y5/1黄灰色	密　1～4mmの石英・チャート多量,1～4mmの赤色酸化粒少量含む	良好	反転復元 布留
326	55	甕	1-2区 I15i16	185	(14.1)	15.9	—	80%	端)ヨコナデ 内)ヨコナデ,ナデ 外)ハケ目,ヘラミガキ,黒斑 炭化物付着	内)10YR7/4にぶい黄橙色 外)2.5Y7/3浅黄色,5Y4/1灰色(黒斑)	密　1mm大の長石粒含む	やや軟	一部反転復元 庄内新～布留古
327	55	甕	1-2区 I15i15	185	12.8	12.9	2.7	80%	端)ヨコナデ 内)強いナデ,ナデ 外)タタキ,ハケ目,粗いナデ 二次焼成,スス付着	5YR6/6橙色	密　1～3mm大の石英・赤色チャート・雲母粒含む	良好	庄内新～布留古

東城跡　遺物観察表（石器・石製品）　法量の（　）は復元した大きさ　色調及び調整の内・外・断は「面」を省略している

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書掲載遺構No.	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg・kg	色調	石材	残存率	備考
48	45	石器 石斧	2-1区 C5q・r11～13	202	19.2	6.6	1.6	384.37g	N3/0暗灰色～N6/0灰色	石材：結晶片岩	100%	
53	46	石製品 砥石	1-1区 C5j14・15	竪穴建物4	14.2	8.7	7.8	1155.22g	2.5Y6/2灰黄色	石材：砂岩	不明	擦痕、カジリ、赤化
56	46	石製品 石皿	1-1区 C5i14	竪穴建物3	33.85	42.95	9.8～10.4	19.1kg		石材：砂岩	—	砥石として利用、敲打痕、擦痕
78	47	石器 叩石	2-1区 C3i13	竪穴建物10	7.4	5.6	3.1	182.25g	5Y6/1灰色	石材：砂岩	100%	敲打痕
127	48	石製品 管玉	2-2区 I35a13	竪穴建物18	0.5	1.7	—	0.41g	10GY8/1明緑灰色	石材：緑色凝灰岩	100%	
128	48	石製品 砥石	2-2区 I35a13	竪穴建物18	1.6	1.3	2.2	630.2g		石材：泥岩	—	二つに割れた後の使用痕跡あり、4面とも擦痕あり
129	48	石製品 叩石	2-2区 I35a13	竪穴建物18	12.4	12.6	2.8	625.4g		石材：砂岩	—	敲打痕か
148	49	石製品 叩石	1-2区 I16y14・15	竪穴建物20	8.7	11.8	4.1	362.49g	N6/0灰色	チャートか	—	
161	49	石製品 琴柱形石製品	2-2区 I35w11	竪穴建物22	1.9	1.9	0.9	4.51g	緑灰	石材：碧玉	不明	
164	49	石製品 石杵	2-2区 C5x10	竪穴建物25	10.4	9	5.9～6.9	775g		石材：砂岩	—	敲打痕
237	51	石器 叩石	2-1区 C5g13	388	9.5	13.4	3.2	556.25g	10YR5/1褐灰色～2.5Y5/1黄灰色	石材：溶結片岩	—	表面における途中の孔2ヶ所、数本のキズあり

東城跡　遺物観察表（金属製品）　法量の（　）は復元した大きさ　色調及び調整の内・外・断は「面」を省略している

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	報告書掲載遺構No.	長cm	幅cm	厚cm	備考
15	44	鉄製品 鉄刀	2-2区 I35a11・12	206	(12.8)	2.15	0.1～0.3	重量32.60g

川辺遺跡　遺物観察表（土器類）　法量の（　）は復元した大きさ　色調及び調整の内・外・断は「面」を省略している

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	遺構No.層位	法量 口径cm	法量 高さcm	法量 底径cm	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
328	64	瓦器 椀	2-2区 J5p11	112 黒土	—	(3.6)	4.8	20%	端）ヨコナデ 外）ユビオサエ、粗いナデ、ナデ 内）ヘラミガキ	内）N4/0灰色 外）5Y8/1灰白色	密	軟	内面に暗文 12～13世紀
329	64	瓦器 椀	2-2区 J5n10	112 黒土	—	(1.1)	5.8	底部100%	外）ヨコナデ 外）ヘラミガキか、磨滅のため調整不明	N5/0灰色	密	軟	12～13世紀
330	64	土師器 皿	2-2区 J5p11	112 黒土	(9.0)	1.8	—	30%	端・内）ヨコナデ 外）ヨコナデ、ユビオサエ	10YR8/3浅黄橙色	密	軟	
331	64	弥生土器 甕	2-1区 J5t・u12	1 黒土（上層）	—	(2.5)	4.0	底部45%	外）タタキ、粗いナデ 内）ナデ	内）10YR7/4にぶい橙色 外）10YR3/1黒褐色,10YR8/1灰白色	密	やや軟	一部反転復元 紀伊第Ⅴ様式
332	64	須恵器 杯身	2-1区 J5r12	1 黒土（下層）	最大径(9.8)	(2.2)	—	60%	外）回転ナデ、ケズリか 内）回転ナデ	N7/0灰白色	密	良好	一部反転復元 TK209型式～飛鳥Ⅰ
333	64	弥生土器 壺	2-1区 J5t・u12	1 黒土（下層）	—	(2.3)	—	10%以下	外）粗いナデ、刺突 内）磨滅のため調整不明	7.5YR5/4にぶい褐色	やや粗 2～6mm大の長石・赤色斑粒含む	軟	
334	64	土師器 杯B	2-2区 J5k9	46 黒土（上層）	—	(1.0)	(9.0)	高台部30%	外）回転ナデか 内）磨滅のため調整不明	7.5YR8/4浅黄橙色	密	軟	飛鳥Ⅱ～平城Ⅱ
335	64	須恵器 杯H蓋	2-2区 J5i10	46 黒土（下層）	最大径(10.2)	(2.8)	—	10%	外）ヘラケズリ、回転ナデ 内）回転ナデ	N7/0灰白色	密 2～3mmの黒粒含む	良好	TK209型式～飛鳥Ⅱ
336	64	土師器 高杯	2-1区 J5s13	46 黒土	—	(5.6)	—	脚部約50%	内外面ともに磨滅のため調整不明	5YR5/6明赤褐色	密 1mm大の石英・長石粒含む	軟	
338	64	平瓦	2-2区 J5s11	106 溝底	長(13.0)	巾(10.7)	厚2.8	—	凹面）布目 凸面）斜格子目タタキ	10YR7/4にぶい黄橙色	密 2mmの砂粒含む	軟	古代
339	64	丸瓦	2-1区 J5r12	43 黒土	長(8.0)	巾(6.0)	高(6.2)？	—	端）面取、ナデか 凹面）布目 凸面）ナデ	N6/0灰色	密	良好	古代～中世
340	64	平瓦	2-1区 J5s12	43 黒土	長(10.7)	巾(13.8)	厚1.9	—	凹面）布目 凸面）ナデ	N5/0灰色 被熱部分）2.5Y6/2灰黄色	密 1mmの長石・赤色斑粒やや多く含む	良好	古代～中世
341	64	丸瓦	2-2区	136 黒土	高(10.5)	巾(8.1)	厚 最大(2.1)	—	端）面取 凹面）布目 凸面）ナデ	N6/0灰色	密	良好	古代～中世
342	64	須恵器 杯H蓋	2-1区	136 第1層	2.2	2.0	—	15%	外）回転ナデ、ヘラケズリ 内）回転ナデ	N7/0灰白色	密 1mmの長石粒含む	軟	飛鳥～奈良
343	64	須恵器 杯B	2-1区	136 第1層	—	(1.7)	(12.0)	底部20%	外・内）回転ナデ	N7/0灰白色	密	良好	奈良～平安
344	65	須恵器 杯蓋	2-2区 J5l9～10	129 黒土（下層）	(15.0)	(3.5)	—	15%	端・内）回転ナデ 外）回転ナデ、ヘラケズリ	2.5Y7/1灰白色	密 1mmの長石含む	やや軟	TK43型式
346	65	須恵器 杯身	2-2区 J5l9～10	130 黒土（下層）	10.4	3.8	—	60%	端・内）回転ナデ 外）回転ナデ、ヘラケズリ	N6/0灰色	密	良好	TK43型式
347	65	須恵器 横瓶	2-2区 J5l9～10	130 黒土（下層）	(9.0)	(16.8)	胴部最大巾(20.5)	30%	端）回転ナデ 外）ユビオサエ、回転ナデ、ナデ、カキメ 内）ユビオサエ、回転ナデ、ナデ	N4/0灰色	密	良好	TK43型式
348	65	須恵器 杯蓋	2-1区 J5s13	32 黒土	(14.0)	3.3	—	25%	端・内）回転ナデ 外）ヘラケズリ、回転ナデ	N6/0灰色	密	軟	TK10型式
349	65	弥生土器 広口短頸壺	1-1区 J5v・w12・13	32 黒土	(16.0)	(6.0)	—	口縁部45%	外）ユビオサエ、ヘラミガキ 内）磨滅のため調整不明	7.5YR7/6橙色	密 1mmの長石・石英・雲母粒含む	やや軟	反転復元 口縁端部に凹文 庄内式併行期
350	65	弥生土器 広口短頸壺	2-1区 J5t・u11	32 黒土	(13.6)	(1.7)	—	5%以下	外）ナデ、ユビオサエ 内）磨滅のため調整不明	7.5YR5/4にぶい褐色	密 1mmの長石・赤色斑粒含む	軟	口縁端部に凹文 庄内式併行期
351	65	弥生土器 壺	2-1区 J5r12	32 黒土	—	(2.7)	3.6	底部100%	内外面とも磨滅のため調整不明瞭	内）2.5Y5/1黄灰色 外）7.5YR8/4浅黄橙色	粗 0.1～1.0cm大の石英・長石粒やや多く含む	軟	一部反転復元
352	65	弥生土器 甕	2-1区 J5t・u11	32 黒土	—	1.8	4.2	底部100%	外）タタキ、ナデ 内）放射状の板状圧痕	10YR5/4にぶい黄褐色	やや粗 2～3mmの石英・長石・雲母・赤色斑粒含む	良好	紀伊第Ⅴ様式～庄内式併行期
353	65	弥生土器 壺か	2-1区 J5s13	62 黒土	—	(3.8)	(4.2)	底部50%	外）ユビオサエ、強いユビオサエ、ナデ 内）放射状の板状圧痕	10YR6/2灰黄褐色	やや粗 1mmの長石・赤色斑粒・雲母粒含む	良好	紀伊第Ⅴ様式～庄内式併行期
355	65	土師器 高杯	2-2区 A5a10	3 黒土	脚部径 4.4～5.2	(3.8)	—	脚部 柱上部	外）磨滅のため調整不明 内）ユビオサエ、ナデ	5YR6/8橙色	密	軟	一部反転復元
358	65	弥生土器 鉢	2-2区 J5k11	106 黒土	(12.2)	(8.1)	4.6	40%	外）タタキ、強いナデ、ナデ 内）板ナデか、磨滅のため調整不明	7.5YR7/6橙色	密 2mmの赤色斑粒含む	良好	一部反転復元 紀伊第Ⅴ様式
359	65	弥生土器 壺	2-2区 A5b11	95	最大胴径 34.5	22.8	4.0	75%	外）ユビオサエ、ナデ 内）磨滅のため調整不明	7.5YR7/8黄橙色 2.5YR6/8橙色	粗 1～6mmの石英・長石・角石・赤色斑粒やや多く含む	軟	庄内式併行期
360	65	弥生土器 壺	2-2区 J5r10	98 黒土	—	(20.0)	(11.2)	底部25%	外）ナデ、ユビオサエ、ケズリか 内）粗いナデとユビオサエ	内）10YR6/4にぶい黄橙色 外）7.5YR6/6橙色	粗 1mm大のチャート・長石・石英・雲母粒多く含む	良好	
361	65	弥生土器 甕	2-1区 J5r13	34 黒土	—	(3.7)	(5.3)	底部100%	外）タタキ、ナデ 内）ハケナデ	内）7.5YR5/3にぶい褐色 外）10YR3/2黒褐色	密	良好	紀伊第Ⅴ様式～庄内式併行期
362	65	弥生土器 甕	2-1区 J5s13	34 黒土	—	(2.5)	4.6	底部100%	外）タタキ、ナデ 内）ナデ	2.5Y7/3浅黄色,7.5Y2/1黒色	密 1mm大の赤色斑粒含む	良好	一部反転復元 紀伊第Ⅴ様式～庄内式併行期
363	65	弥生土器 甕	2-1区 J5s11	69 黒土	—	(3.4)	(5.0)	底部60%	外）タタキ、ナデ 内）放射状の板状圧痕	10YR4/3にぶい黄褐色	やや粗 0.1～1.0cmの角閃石・石英・長石・雲母粒含む	良好	第Ⅴ様式～庄内式併行期 大和西部産か
364	65	弥生土器 壺	2-2区 A5a10	80 黒土（上層）	—	(2.3)	6.0	底部100%	外）ヨコナデ、ナデ 内）ナデ	内）10YR7/3にぶい黄橙色 外）5YR6/6橙色	密 1～2mm大のチャート・石英・長石粒含む	良好	
365	65	弥生土器 壺か	2-2区 J5x・y10	81 黒土	—	—	—	5%以下	外）タタキ 内）ハケか、ユビオサエ	10YR6/4にぶい黄橙色	密 1mmの石英・チャート・長石・雲母・赤色斑粒含む	良好	紀伊第Ⅴ様式～庄内式併行期
366	65	弥生土器 甕	2-2区 J5w10	82 黒土	—	(2.4)	(4.6)	底部30%	外）タタキ、ナデ、粗いナデ 内）ハケか	5YR5/6明赤褐色	密	良好	紀伊第Ⅴ様式～庄内式併行期
367	65	土師器小高杯	2-2区 J5a10	82 黒土	脚部径 3.7～7.0	(4.6)	—	5%以下	外）ヘラミガキ 内）ナデ	5YR6/6橙色	密 1mm以下の赤色斑粒・雲母粒含む	やや軟	

川辺遺跡　遺物観察表（石器・石製品）法量の（　）は復元した大きさ　色調及び調整の内・外・断は「面」を省略している

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	遺構No.層位	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg・kg	色調	石材	残存率	備考
337	64	砥石	2-1区 J5x・w13	46 黒土	7.8	6.0	3.3	204.27g		砂岩	100%	
345	65	剥片	2-2区 J5l9～10	129 黒土（下層）	29	2.4	0.4～0.6	3.44g		サヌカイト	—	
354	65	[illegible]	2-2区 J5q10	62 黒土	(3.2)	3.6	0.6	7.91g		緑泥片岩	10%	
356	65	剥片	2-2区 A5a10	3 黒土	3.6	2.7	2.0	15.72g		サヌカイト	—	
357	65	剥片	2-2区 A5a10	3 黒土	4.9	2.2	1.1	10.30g	風化著しい	サヌカイト	—	
368	65	打製石鏃	2-1区 J5s13	72 溝底	4.1	1.8	0.2～0.5	2.90g		サヌカイト	100%	

調査地俯瞰（南上空から）

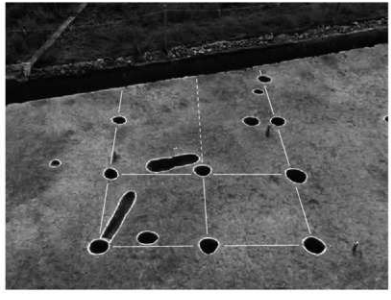
調査地俯瞰（北上空から）

2－2区　2堀（南上空から）

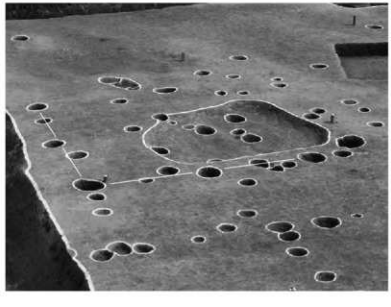
2－2区　上面全景（西から）

2－2区　上面東半部（西から）

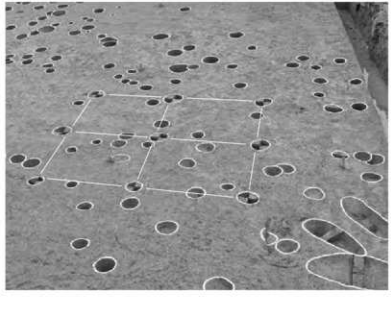
1－1区　上面全景（西から）



1－2区　堀立柱建物1（北から）



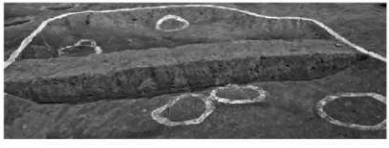
1－2区　堀立柱建物2（西から）



2－2区　堀立柱建物3（東から）

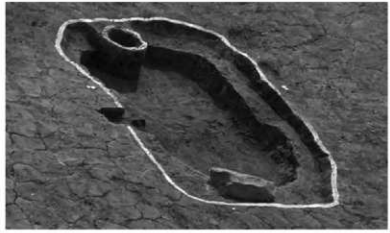
1－2区　東端中世遺構検出状況
(西から)

1－2区　1井戸　土層断面
(南から)



1－2区　3土坑　土層断面
(南から)

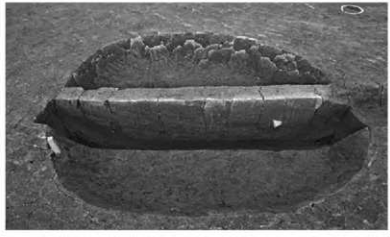
1－2区　15土坑　土層断面
(南東から)



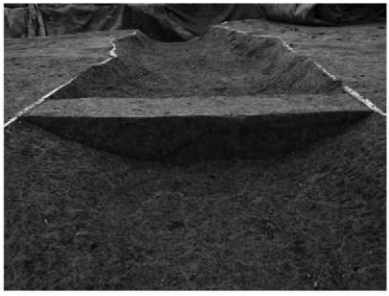
1－2区　78土坑　完堀状況
(北から)

1－2区　78土坑　土層断面
(南から)

2－2区　356土坑　土層断面
(南から)



2－2区　358井戸　土層断面
(南から)



2－2区　300土坑　土層断面
(南から)

1－2区　71溝（西から）

1－2区　71溝　土層断面
(北から)

1－2区　2堀（北西から）

1－2区　2堀（北西から）

2－2区　2堀コーナー部
（北西から）

1－2区　2堀　土層断面（西から）

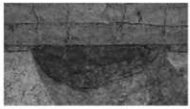
1－2区　2堀　東壁土層断面
（西から）

1－2区　2堀　南壁土層断面
（北から）

2－1区　202自然流路（西から）

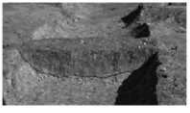
1－1区　145～148溝（西から）

1－1区　145～147溝
土層断面（東から）



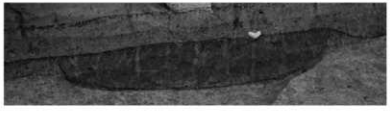
1－1区　北壁　105溝
土層断面（南から）（写真左）

2－1区　108溝　土層断面
（南南西から）（写真右）



1－1区　北壁　108溝
土層断面（南から）（写真左）

2－1区　119溝　土層断面
（南南西から）（写真右）



1－1区　北壁　119溝
土層断面（南から）

1－1区　下面全景（東から）

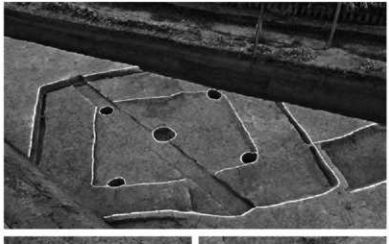
2－1区　下面全景（東から）

2－1区　東半部（南上空から）

1－1区（南上空から）

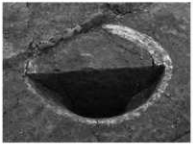
1－1区　東半部（東から）

2－1区　東半部（東から）



1－1区　竪穴建物1（西から）

1－1区　竪穴建物1内
91炉（西から）（写真左）



1－1区　竪穴建物1内
93柱穴（南西から）（写真右）

2－1区　竪穴建物2～5（東から）

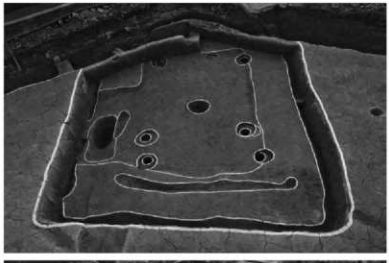
1－1区　竪穴建物5（南東から）

1－1区　竪穴建物5内
173炉（西から）（写真左）

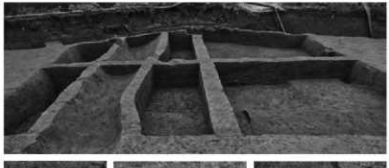
1－1区　竪穴建物5内
175貯蔵穴（東から）（写真右）

1－1区　竪穴建物6（北から）

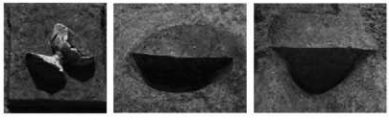
1－1区　竪穴建物6
炭化木材検出状況（北東から）



1－1区　竪穴建物7（北西から）



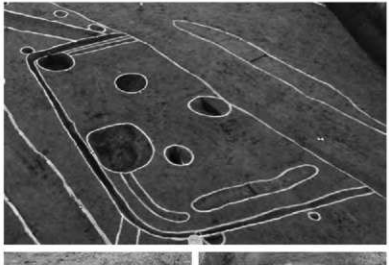
1－1区　竪穴建物7　土層断面（北から）



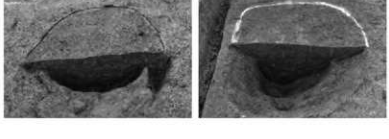
1－1区　竪穴建物7
床面土器出土状況（北から）（写真左）

竪穴建物7内　140炉（南から）（写真中）

竪穴建物7内　174貯蔵穴（北から）（写真右）



2－1区　竪穴建物8（東から）



竪穴建物8内
473炉（南南東から）（写真左）

竪穴建物8内
447貯蔵穴（東から）（写真右）

2－1区　竪穴建物10
369土坑・371土坑（北東から）

1－1区　竪穴建物9（東から）

竪穴建物9内
141炉（南東から）（写真左）

竪穴建物9内
171貯蔵穴（南東から）（写真右）

1－1区　竪穴建物9　土層断面
（南西から）

1－2区（北上空から）

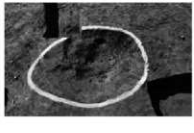
2－2区～2－1区（北上空から）

2－2区　西半部　竪穴建物群
（東から）

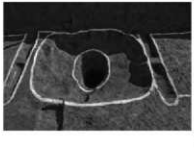
2－2区　西半部　竪穴建物群
(西から)

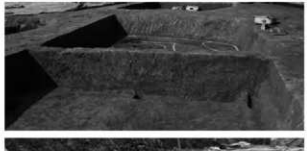
2－2区　竪穴建物 13（南東から）

竪穴建物 13 内
382 炉　完堀状況（東から）（写真左）



竪穴建物 13 内
382 炉　土層断面（東から）（写真右）



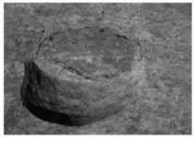


竪穴建物 13　379 貯蔵穴（北から）（写真左）

竪穴建物 13　土層断面（北から）（写真右上）

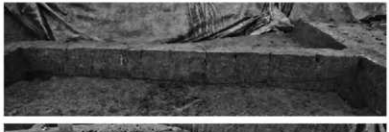
竪穴建物 13　土層断面（北東から）（写真右下）

2－2区　竪穴建物 14・15
（南から）



竪穴建物 15 内
452 土坑（東から）（写真左）

竪穴建物 15 内
453 土坑（南から）（写真右）



竪穴建物 15
東西土層断面（南南東から）

竪穴建物 15
南北土層断面（北北東から）

2－2区　竪穴建物 14
東西土層断面（北から）

2－2区　竪穴建物 16
東西土層断面（西南西から）

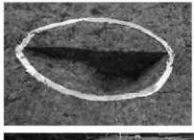
2－2区　竪穴建物 16
南北土層断面（南南東から）

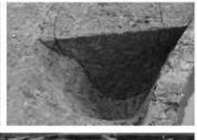
2－2区　竪穴建物 17～19
（東から）

2－2区　竪穴建物 17
東西土層断面（北から）

2－2区　竪穴建物 17
南北土層断面（西から）

2－2区　竪穴建物 18・19
（南南東から）





竪穴建物 18 内
395 炉（北東から）（写真左）

竪穴建物 18 内
388 貯蔵穴（南東から）（写真右）

竪穴建物 18
土層断面（東から）

2－2区　竪穴建物 19
東西土層断面（南から）

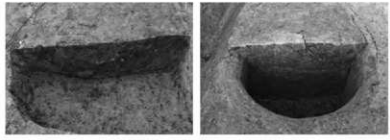
2－2区　竪穴建物 19
南北土層断面（西から）

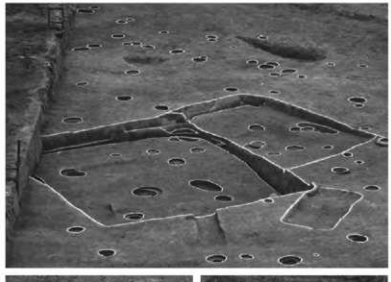
竪穴建物 19 内
398 炉（南から）（写真左）

竪穴建物 19 内
427 貯蔵穴（西から）（写真右）

2－2区　竪穴建物 19 内
428 土坑（南東から）（写真左）

竪穴建物 19 内
427 貯蔵穴（西から）（写真右）





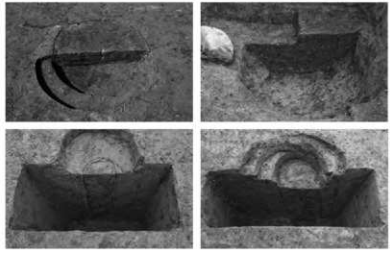
1－2区　竪穴建物 20・21
（西から）

竪穴建物 20 内
225 炉（南から）（写真左上）

竪穴建物 20 内
218 貯蔵穴（北から）（写真右上）

竪穴建物 20 内
249 柱穴（南から）（写真左下）

竪穴建物 20 内
226 柱穴（北から）（写真右下）

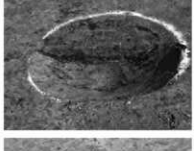


1－2区　竪穴建物 20
東西土層断面（南西から）

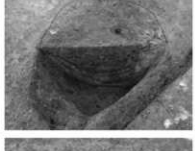
1－2区　竪穴建物 21
東西土層断面（東から）

1－2区　竪穴建物 21
南北土層断面（東から）

2－2区　竪穴建物 22・23・27
（東から）



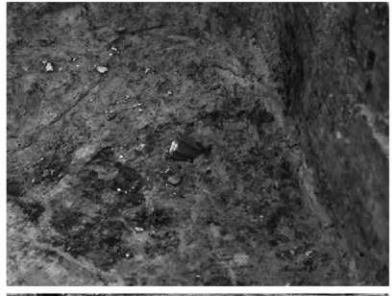
竪穴建物 22 内
402 炉（南から）（写真左上）



竪穴建物 22 内
405 貯蔵穴（南から）（写真右上）

竪穴建物 22 内　405 柱穴土器
出土状況（南から）（写真左下）

竪穴建物 22 内
404 柱穴（南から）（写真右下）

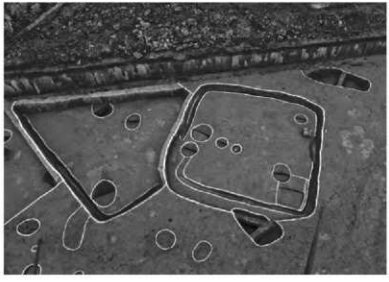


2－2区　竪穴建物 22
床面　琴柱形石製品　出土状況
（北から）

2－2区　竪穴建物 22
南北南側土層断面（北から）

2－2区　竪穴建物 26
東西土層断面（南から）

2－2区　竪穴建物 24
東西土層断面（南から）



2－2区　竪穴建物 25・26
（南から）

2－2区　竪穴建物 25（南から）

2－2区　竪穴建物 25
東西東側土層断面（北から）

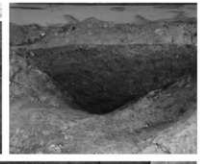
2－2区　竪穴建物 25
東西西側土層断面（北から）

2－2区　竪穴建物 26
東西西側土層断面（南東から）

2－2区　竪穴建物 26
東西東側土層断面（南東から）

1－2区　竪穴建物 28・29
（北から）

竪穴建物 29 内
223 柱穴（南西から）（写真左）

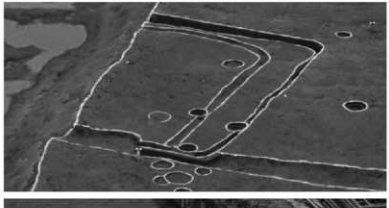


竪穴建物 29 内
224 柱穴（北から）（写真右）

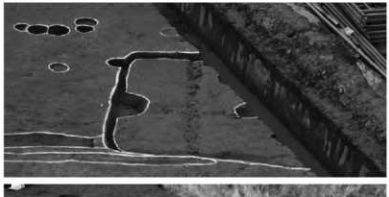
1－2区　竪穴建物 29
東西西側土層断面（北西から）

1－2区　竪穴建物31（北から）

1－2区　竪穴建物31
南北土層断面（北から）



2－2区　竪穴建物32（東から）



2－2区　竪穴建物33（東から）

2－2区　竪穴建物33
南北土層断面（東から）

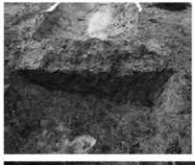
1－2区
214土坑　土層断面（西から）

1－2区
230土坑　土層断面（北西から）

2－2区
368土坑　土層断面（南東から）

2－2区
384土坑　土層断面（南から）

2－1区
471・472溝（東から）



471溝　土層断面（南東から）（写真左）

472溝　土層断面（南東から）（写真右）

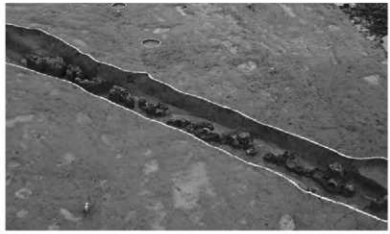
1－2区　67溝（北東から）

67溝　土器出土状況（南東から）
（写真左上）

67溝　土器出土状況（南東から）
（写真右上）

67溝　土器出土状況（南東から）
（写真左下）

67溝　土器出土状況（北東から）
（写真右下）



2－2区
67溝　土器出土状況（西から）

1－2区
67溝　完掘状況（北から）

2－2区
67溝　完掘状況（南から）

2－2区
67溝　土層断面（北東から）

1－2区　東側　溝群（西上空から）

1－2区　東側　溝群（西から）

1－2区　東側　溝群（東から）

2－2区　東側　溝群（東から）

1－2区　185溝（北から）（写真左）

185溝　土器出土状況（北から）（写真右）

1－2区
204溝　土層断面（北東から）（写真左）

1－2区
198溝　土層断面（北東から）（写真右）

1－2区
186溝　土層断面（北から）（写真左）

186溝　土層断面（南から）（写真右）

2－2区
203溝　土層断面（南から）（写真左）

1－2区
185溝　土層断面（南西から）（写真右）

1－1区　南壁　基本層序（北から）

1－2区　南壁　基本層序（北から）

2－2区　北壁　基本層序
（東南東から）

2－1区　全景（東から）

2－1区　西半全景（西から）

2－1区　東半全景（西から）

72 溝全景 (北から)

52 溝埋土及び砂脈土層断面
(北から)

52 溝及び溝底砂脈全景 (北から)

1 流路牛並びに人の足跡（北西から）

62 溝土層断面（南西から）

調査区南壁基本層序（南から）

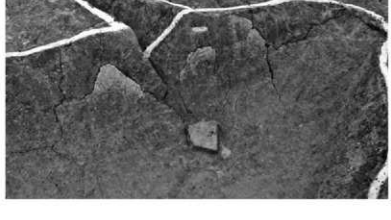
2－2区　全景（東から）

2－2区　全景（西から）

2－2区　中央（西から）

2－2区　東側全景（西から）

91 土器棺墓（南から）

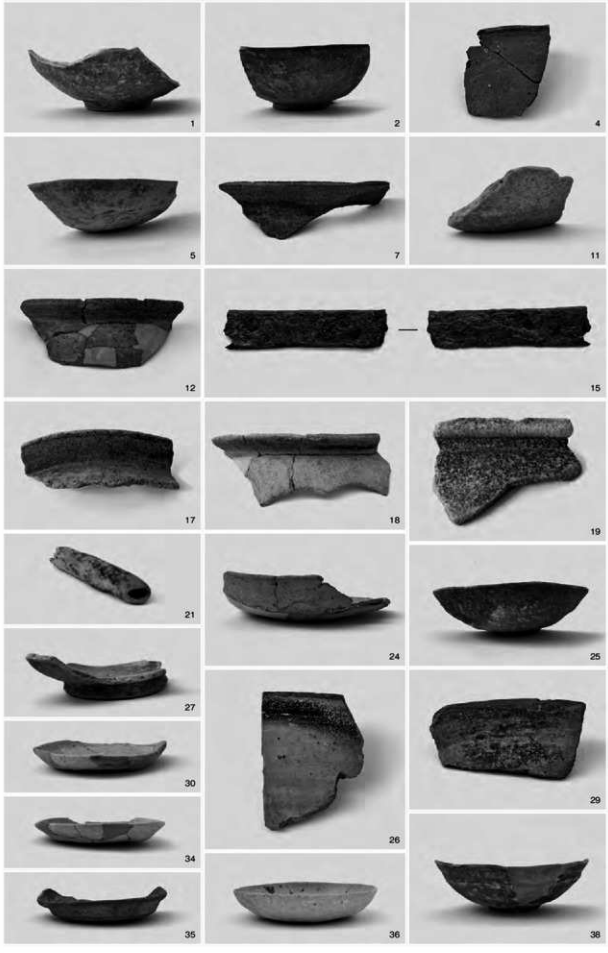


100 溝底平瓦出土状況
（南西から）

129 溝土層断面（北から）

46 流路土層断面（西から）

2－3区　全景（東から）


1
2
4
5
7
11
12
15
17
18
19
21
24
25
27
26
29
30
34
35
36
38

40

39

48

47

49

51

56

58

53

59

60

57

62

61

64

70

71

69

68

72

73

74

76

78

77

79

81

84

86

91

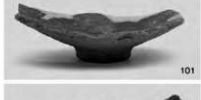
92

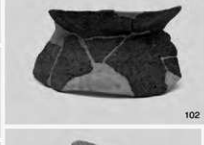
94

95

98

100


101


102

109

107

105

106

110

111

113

114

115

121

119

118

120

124

126

122

123

129

128

127

134

135

132

138

136

146

147

148

149

145

149

150

151

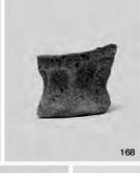
152

153

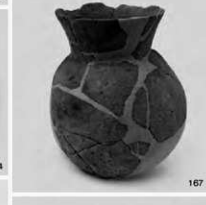
158

161

163


168

164


167

169

170

171

173

180

185

188

179

190

191

192

193

177

182

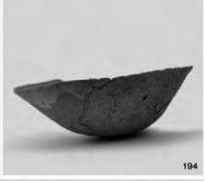
176

175

189

183

184


194

195

196

197

199

200

201

198

207

209

210

215

212

213

208

218

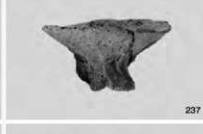
221

224

223

221

227


237

236

238

242

239

240

243

241

245

246

249

250

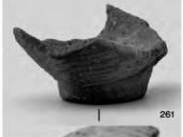
251

252

248

247

254


261

255

256

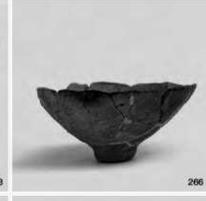
257

258

260

262

263


266

264

267

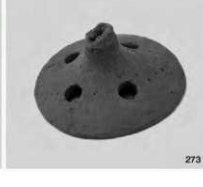
265

270

268

269

271


273

277

274

275

276

279

280

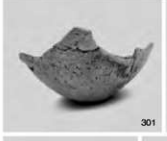
281

282

283

287

286


301

296

297

298

299

300

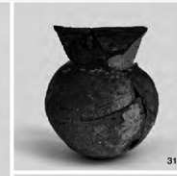
309

312

308

310

313


314

315

316

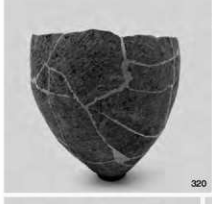
317

322

319

325

321


320

324

323

326

327

307

328（外面）

328（内面）

329

330

331

332

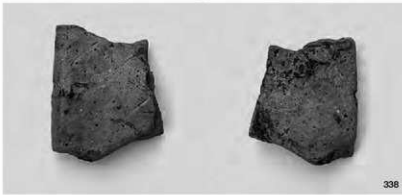
333

334

335

336

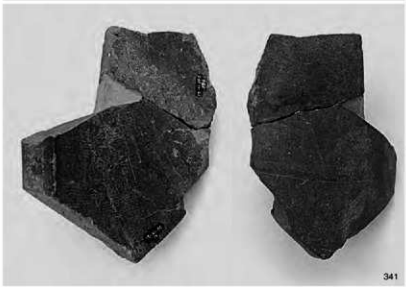
337


338

339

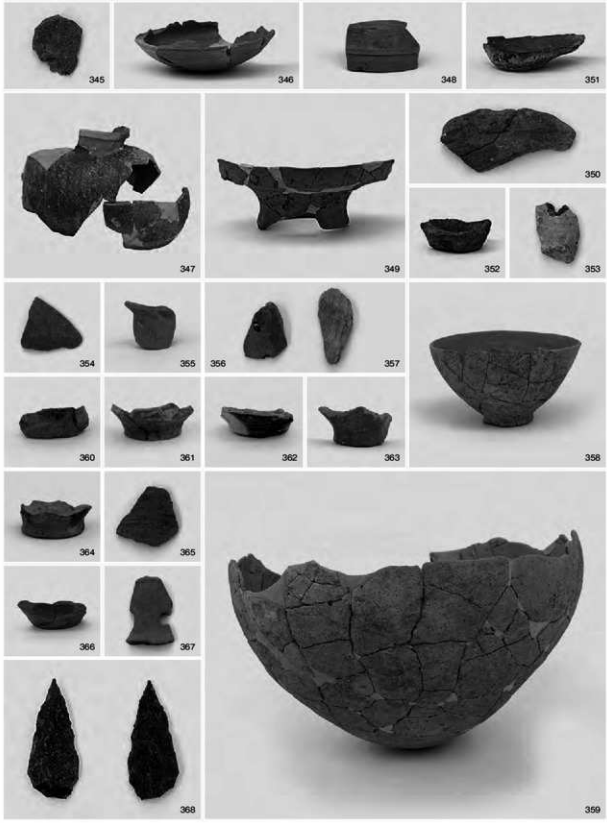
340

342


341

343

344


345
346
348
351
347
349
350
352
353
354
355
356
357
358
360
361
362
363
364
365
366
367
368
359

報告書抄録

ふりがな	とうじょうあと、かわなべいせき
書名	東城跡、川辺遺跡
副書名	都市計画道路西脇山口線道路建設工事に伴う発掘調査報告書
編著者名	佐伯　和也・金澤　舞
発行機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8301　和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1　　TEL 073-472-3710
発行年月日	西暦　2019年　3月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とうじょうあと 東城跡	わかやまし やまぐちにし 和歌山市山口西 及び楠本	302015	443	34° 15′ 47″	135° 15′ 34″	2017.8.1 ～ 2017.12.8	3860.4m²	都市計画道路 西脇山口線道路 建設工事
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かわなべいせき 川辺遺跡	わかやまし やまぐちにし 和歌山市山口西 及び楠本	302015	145	34° 15′ 47″	135° 15′ 34″	2017.5.25 ～ 2017.12.8	2461.9m²	都市計画道路 西脇山口線道路 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東城跡	城館跡 集落跡	弥生時代 ～ 古墳時代	竪穴建物 土坑、溝	弥生土器、土師器、石器	弥生～古墳時代の居住域を確認
		中世	掘立柱建物 土坑、堀	土師器、瓦器、刀子	中村氏の居館の堀とみられる遺構を発見
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川辺遺跡	耕作地 集落跡	弥生時代 ～ 古墳時代	土器棺墓 土坑、溝	弥生土器、土師器、須恵器 石器、サヌカイト剥片	弥生～中世の溝や水田を検出
		古代～中世	溝、流路 水田、畦畔	土師器、瓦器	

要約

東城跡では、出土遺物や文献史料等からみて東城跡の堀と推定される遺構を検出した。また、弥生時代終末期～古墳時代初めにかけて、多数の竪穴建物跡を中心に東側に複数の溝が流れ、西側には自然流路及び溝が見られる居住域を確認した。

川辺遺跡では、弥生～古墳時代の流路や周溝墓の可能性のある溝、土器棺墓、古代～中世の水田を確認した。

東城跡、川辺遺跡

－都市計画道路西脇山口線道路建設事業に伴う発掘調査報告書－

2019年3月26日

編集・発行：公益財団法人　和歌山県文化財センター
〒640-8301　和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1
印刷・製本：株式会社　協　和
和歌山県海南市南赤坂5－3